ケルト民話のなかでだれがいちばん美人だろうか。「ケルトのヴィーナス」はディアドラかグラーニアか。軍配はディアドラに上がるかもしれない。なにしろ彼女は生まれる前からその美貌が国に災いをもたらすと予言されたのだから。

いちばんの英雄はだれだろう。ともに「アイルランドのヘラクレス」といわれるクーフーリンかフィンか、いい勝負だ。本来ならちがう時代の神話・伝説群に属するふたりなのに、民話ではなんとおなじ土俵で対決してみせるのだ。

——「訳者あとがき」より

イラストは、本文さし絵（ジョン・D・バトン画）より

ケルト幻想民話集

小辻梅子訳編

教養文庫
1435
D
718
¥520
(505)

現代教養文庫

1435

ケルト幻想民話集

小辻梅子訳編

社会思想社

現代教養文庫

1435

ケルト幻想民話集

小辻梅子　訳編

社会思想社

ケルト妖精民話集

目次

英雄のおもかげ

かたりべ達の競演

悲しみの始まり・悲しみの終わり

ダーマットとグラーニアの運命

アイルランド略図
ジャイアンツ・
コーズウェイ
ドゥンガノン
ベンブルベン山
スライゴー州
スリーヴ・
ドナード
メーヨー州
イニスタータ島
タラ丘
アスローン
ホウス岬
ゴールウェイ州
ダブリン
アレン
シャノン川
ウィックロー州
リメリック
シャノン川
キャッスルアイランド
ケリー州
ローン川
ディングル湾
キラニー湖
カラ湖
クリア岬

英雄のおもかげ

フィン、巨人国へ行く

フィンと家来たちはホウス岬(1)の港の丘の上にいた。風下で太陽を浴びながら、みんなの姿を見ていたが、彼らの姿はだれにも見えなかった。そのとき西のほうから黒い点が近づいてくるのが見えた。最初は夕立の雲かと思った。だが、近づいて来たのは船だった。港にはいると、船は帆をおろした。船には三人の男がのっていた。船首に水先案内人、船尾に舵取り、真ん中にロープ係。彼らは岸におりると、船をその長さの七倍灰緑色の草のなかに引き上げた。そこなら町の学者が笑いの種にしたくても、出来そうになかった。

それから彼らは緑のきれいな場所に登って行った。最初の男が丸い小石を片手いっぱいすくって、アイルランド一の美しい家になれと命令した。するとそのとおりになった。二番めの男は平べったい石を拾うと、アイルランド一の家の屋根のスレート瓦になれと命令した。するとそのとおりになった。三番めの男は木片を一束か

きあつめて、アイルランド一の家の松の木材になれと命令した。するとそのとおりになった。

　これにはフィンもおおいに驚いて、男たちのいるところへおりて行ってたずねた。すると、彼らは答えた。フィンは彼らがどこから来て、どこへ行くのだとたずねた。彼らは言った。「われらは巨人国の王からフェーナ騎士団[2]に戦いを挑みに派遣された三人の英雄だ」フィンはたずねた。「なぜそんなことをするのだ?」彼らは知らないと答えた。だが、フェーナ騎士団は強いと聞いているから、その英雄たちに戦いを挑みに来たのだ。「フィンは家にいるか?」「いない」（人間は自分の命をおおいに惜しむものだ）フィンは男たちに十字架と魔法をかけてつぎに彼と会うまでいまいる場所から動けないようにした。

　フィンはそこを立ちさると、コラク舟[3]の準備をして、船尾を陸に船首を海にむけた。しみのついた帆を長い強い槍のようなマストに高々とかかげ、旋風の抱擁を受けながら大波を突っ切って進んだ。海岸の丘からと赤岩の急流から吹くやさしいそよ風は丘から柳を、樹木から葉叢（はむら）を、ヒースから幹を根こそぎ持ちさらんばかりだった。フィンは、船首で案内人、船尾で舵取り、中央でロープ係、と一人三役をした。そして巨人国に着くまで足も頭も休めなかった。岸におりてコラク舟を灰色の

草むらのなかに引き上げた。上っていくと、ひとりの大きな旅人と出会った。フィンはなに者かときいた。
「わしは巨人王に仕える赤毛の臆病者だ。それで」と彼はフィンに言った。「おまえこそわしが捜している人間だ。わしはおまえをとても尊重している。おまえはいままで見たこともないいいい童っ子だ。おまえなら王さまの小人になれる。おまえの犬(これはブラン)は抱き犬にちょうどいい。ながいこと王は小人と抱き犬を探していた」
　彼はフィンをつれて行った。だが、べつの巨人がやって来て、彼からフィンを奪おうとした。ふたりは争った。が、ふたりとも服を破ってしまい、判定をフィンにまかせた。フィンは最初の男を選んだ。彼はフィンを王の宮殿までつれて行った。重臣や貴族たちが小人を見ようと集まった。王はフィンを手のひらにのせると、フィンを片手にブランをもう一方の手にのせて町を三周した。王は自分のベッドの端にフィンの寝る場所をつくってやった。フィンは待っているあいだ、宮殿の様子を注意深く観察した。王は夜になるとすぐ立ち上がって外に出て行った。帰ってきたのは朝だった。フィンはとても不思議に思って、なぜ王妃をひとりおいて毎晩出て行くのか、とうとう王にたずねた。

いるのです」
「自分を満足させるためです」とフィンは言った。「わたしはとても不思議に思って
「なぜ」と王は言った。「たずねるのだ？」
ところで、王はとてもフィンが気にいっていた。フィンのすることなすことほど
王に喜びを与えてくれるものはなかった。それでとうとう話した。
「あのな」と王は言った。「わしの娘と結婚して、わしの国を半分自分のものにした
がっている大きな化物がいてな、そいつと対戦できる者はこの国にはわし以外いな
いのだ。だからわしは毎晩そいつと闘いに出て行かなければならないのだ」
「ほかに」とフィンは言った。「王さま以外にそいつと闘う人はいないのですか？」
「そうだ」と王は言った。「一晩だってそいつと闘う者はいない」
「残念なことです」とフィンは言った。「ここは巨人の国と言われているのに。そい
つは王さまより大きいのですか？」
「おまえが心配することはない」と王は言った。
「心配です」とフィンは言った。「今夜は王さまはお休みになってください。わたし
が化物と対戦しに行きます」
「おまえが？」と王は言った。「わしの一撃の半分も届くまいに」

夜になり、みんなが休むと、王はいつものように出かける用意をした。フィンはやっと王を説き伏せて自分が行く許しを得た。
「わたしが化物と闘います」と彼は言った。「だまし打ちにあうかも知れません」
「わしは」と王が言った。「おまえを行かせるのは心配だ。あいつはわしにとっても手ごわい」
「今夜はぐっすりお眠りになってください」とフィンが言った。「わたしが行きますから。あまり激しくかかってき

たら急いで逃げて帰ります」
　フィンは出て行って、闘いの場所に着いた。目の前にだれもいなかったので、前へ行ったり後ろへ行ったりした。ついに海が、燃えさかる炉のように、疾走する大蛇のように迫ってくるのが見え、彼の足もとまでやって来た。巨大な怪物が現れ、彼のほうを見て、それから目をそらした。「このちっぽけな点はなんじゃ？」と怪物は言った。「ぼくだ」とフィンは言った。「ここでなにをしとる？」「ぼくは巨人国の王の使いだ。王はとても悲しみ嘆いておられる。たったいまお妃さまがなくなられたのだ。それでぼくが頼みに来たのだ。今夜はこの国に面倒をかけないで帰ってくれないか」「そうしよう」と怪物は言った。そして大声で鼻歌を歌いながら行ってしまった。
　フィンは頃合をみはからって帰った。王のベッドの足もとの自分のベッドに寝た。王は目をさますとたいへん心配して叫んだ。
「わしの国がなくなった。わしの小人とわしの抱き犬が殺された！」
「ちがいます」とフィンが言った。「わたしはまだここにいます。王さまはお眠りになっていたのです。王さまのおっしゃったことはありえないことです」
「どうして」と王は言った。「おまえは逃げてきたのだ、おまえはそんなに小さく、

あいつはこんなに大きなわしの手にもあまるのに」

「王さまは」とフィン言った。「とても大きく、お強いけれど、わたしは機敏で身軽です」

翌晩王は出かけようとした。しかしフィンが今夜も眠るようにと言った。「わたしが王さまの代わりをつとめましょう。もっと強い英雄が現れるにちがいありません」

「おまえはあいつに殺されるぞ」と王は言った。「わたしが運をためしてみましょう」とフィンは言った。

彼は行った。前の晩とおなじで、だれも見えなかった。前へ行ってみたり後ろへ行ってみたりした。海が燃えさかる炉のように、疾走する大蛇のようにやって来るのが見えた。そして巨大な男が現れた。「今夜もおまえが来たのか?」と彼は言った。「そうだ。これが伝言だ。お妃さまが棺に納められて、釘が打たれ、蓋が閉じられるのを聞いて王さまは苦しさと悲しさのあまり心臓がお破れになった。それで、王さまが埋葬されるまで今夜はおまえに帰ってもらうよう頼むため、議会がぼくをよこしたのだ」怪物は今夜も大声で歌いながら行ってしまった。フィンは頃合をみはからって帰った。

朝、王はたいへん心配して目をさまし、大声で叫んだ。「わしの国がなくなった。

わしの小人とわしの抱き犬が殺された！」ところが、フィンとブランが生きていたので王はおおいに喜び、彼自身はながい間眠っていなかったのに休息がとれてほっとした。
フィンは三日めの晩も行った。前とおなじことが起こった。目の前にはだれもいなかった。彼は行きつもどりつした。海が迫ってくるのが見え、足もとまで来た。巨大な怪物が現れた。怪物は小さな点を見てだれだ、なんの用だとたずねた。「ぼくはおまえと闘いに来た」とフィンが言った。
フィンとブランは闘いを開始した。フィンが後ろにさがると、大男が迫って来た。フィンはブランに叫んだ。「おまえはおれを見殺しにするのか？」ブランは毒の爪を持っていた。犬は大男に跳びかかってその毒爪で胸骨を攻撃し、心臓と肺を取り出した。フィンは愛剣マックーアールイーンを抜いて首をはね、それを麻縄にかけ、王の宮殿に持ち帰った。台所に持って行って、ドアのかげにおいた。朝になって召し使いがドアを押しても引いても開かなかった。王がおりて来た。王は大きな塊を見て、頭のてっぺんをつかんで持ちあげた。それは長い間彼に闘いを挑んで一睡もさせなかった男の首だった。
「いったいどうして」と王は言った。「この首がここにあるのだ？　まさかわしの小

人のしわざではあるまい」
「どうして」とフィンが言った。「小人のしわざではないのですか？」
　翌晩王は自分が闘いの場所へ行くと言った。
「なぜなら」と王は言った。「今夜は前よりも大きな奴が来るだろう。そうすれば国は破壊され、おまえは殺される。わしはおまえを所有する喜びを失うことになる」
　しかしフィンが行った。大男が来て、息子の復讐を求め、王国をよこすか　対等の試合をするか、どちらかにせよと言った。彼とフィンは闘った。フィンは後ろへさがった。ブランに言った。「おまえはおれを見殺しにするのか？」ブランはくんくん鳴き、浜辺へ行ってすわった。フィンは追いつめられていた。ブランにふたたび叫んだ。するとブランは大男に跳びかかって、毒爪で攻撃し、心臓と肺を取り出した。フィンは首をはねて、持ち帰り、家の前においた。王はとてもおびえて目をさまし、叫んだ。「わしの国がなくなった。わしの小人とわしの抱き犬が殺された！」フィンは起きて言った。「ちがいます」外へ出て、家の前に首があるのを見たときの王の喜びようはひとしおだった。
　そのつぎの晩は大きな老婆が岸にやって来た。老婆の前歯は糸巻き棒にでもなりそうだった。老婆は盾をたたいて挑戦を宣告した。

「おまえは殺した」と老婆は言った。「わたしの夫と息子を」

「たしかにぼくが殺した」とフィンは言った。

彼らは闘った。フィンは巨大な老婆の手よりも歯から身を守るほうがむずかしかった。老婆がほぼフィンをやっつけそうになったとき、ブランが毒爪で攻撃して前のふたり同様殺した。フィンは首を持って帰り、家の前においた。王はたいへん心配で目をさまし、叫んだ。

「わしの国がなくなった。わしの小人とわしの抱き犬が殺された！」

「ちがいます」とフィンが答えた。

外へ行って首を見ると、王は言った。「わしとわが国はこれからは安泰だ。一族の母親が殺されたのだ。ところで、貴殿がなに者かおしえてくれ。わしを救うのはフィン・マクールだと予言があった。彼はいま弱冠十八歳だ。貴殿はなに者で、なんという名前だ？」

「これまでぼくは」とフィンが言った。「牛と馬の皮にかけて、自分の名前をかくしたことはない。ぼくはフィン、クールの息子、ルーアハの孫、トレーンの曾孫、フィンの曾曾孫、アートの曾曾曾孫、若きエリンの大王の曾曾曾曾孫だ。もうそろそろ帰らなければ。あなたの国へ来た目的からずいぶんそれてしまった。ぼくが来た

のは、ぼくがあなたになにか危害を加えたのか、あなたが三人の英雄を送ってぼくに闘いを挑み、ぼくの部下を壊滅させようとしたのはなぜか、その理由をさぐりたいと思ったからだ」
「貴殿はわしになんの危害も加えていない」と王は言った。「よって、なん千回も許しを乞いたい。あの英雄たちを貴殿のところへやったのはわしではない。彼らはほんとうのことを言っていない。あの三人は妖精の女に求愛していて、女たちからシャツをもらった。そのシャツを着るとめいめいの手が百人力になる。しかし、夜はシャツをぬいで、椅子の背にかけておかなければならない。もしシャツが盗まれれば、あくる日はみんなとおなじ力しかなくなるのだ」
　王はフィンに与えられるかぎりの名誉を与え、彼が帰るときは王と王妃と家来が浜辺まで見送りに来て、祝福をした。
　フィンがコラク舟にのって、岸の近くを航海していると、若い男が走って来て彼に呼びかけた。フィンはコラク舟で陸のすぐそばまで行き、なんの用かとたずねた。
「わたしは」と若者は言った。「いい家来として仕える主人を捜しています」
「おまえはどんなことができるのだ？」とフィンはきいた。
「わたしは」と若者は言った。「すぐれた予言者です」

「それでは舟にのれ」予言者はとびのった。ふたりは進んで行った。
しばらくすると、またべつの若者が走って来た。
「わたしは」と彼は言った。「いい家来として仕える主人を捜しています」
「どんなことができるのだ？」とフィンがきいた。
「わたしはとびきりの泥棒です」
「では舟にのれ」フィンはこの男もつれて行った。それからまた三人めの男が走って来て、呼びかけた。岸の近くによった。
「おまえはどんな男だ？」とフィンがきいた。
「わたしは」と彼は言った。「最高の山男です。おだやかな夏の日でも蠅さえとまれない場所を四十五キロの荷を背負っていけます」
「のれ」そしてこの男ものってきた。「これでわしには選り抜きの召し使いがそろった。これほど万全の召し使いはいない」
彼らは行った。ホウス岬の港に着くまで頭も足も休めなかった。フィンは予言者に三人の大男がなにをしているかきいた。
「彼らは」と彼は言った。「夕食をすませて寝る準備をしています」
フィンはまたきいた。

「彼らは」と予言者は言った。「寝ました。シャツは椅子の背に広げています」
しばらくしてフィンはまたたずねた。「いま大男たちはなにをしている？」
「彼らはぐっすり眠っています」
「いまこそ泥棒に入ってシャツを盗むのにいいチャンスだ」
「わたしがやりましょう」と泥棒が言った。「でもドアがロックされていて入れません」
「さぁ」と山男が言った。「ぼくの背中にのりたまえ。きみをなかに入れてやろう」
彼は泥棒を背負って煙突の上まで登り、そこにおろした。泥棒はシャツを盗んだ。
フィンはフェーナ騎士団のいるところへ行った。朝になってフィンと騎士たちは三人の大男がいる家に来た。彼らは盾を鳴らして挑戦を宣告し、外に出て闘えと言った。
大男たちは出て来た。「いままでずっと、われわれは闘う態勢がととのっていたが、今日はちがうのだ」と彼らはフィンにありのままをすべて白状した。
「おまえたちは」とフィンは言った。「無礼なふるまいをした。だが、許してやろう」
これからはフィンに忠誠をつくし、どんなことを命令されても喜んでですると誓わ

せた。

訳注
（1）ホウス岬―ダブリン湾の外につきでている岬。
（2）フェーナ騎士団―アイルランド大王コーマック・マック・アートの親衛隊で、フィンはその首領。
（3）コラク舟―柳の枝を編んだものに獣皮または油皮を張った小舟。アイルランドやウェールズ地方の川や湖で用いられる。

フィン対クーフーリンの勝負

アイルランドの男で、あるいは女で、あるいは子どもでわれらの有名なアイルランドのヘラクレス、あの輝かしい英雄フィン・マクールのことを聞いたことのない者がいるだろうか？　クリア岬[1]からジャイアンツ・コーズウェイ[2]にいたるまで、逆にもどってクリア岬までそんな者はひとりもいやしない。ところで、ジャイアンツ・コーズウェイというと即座にわたしの話のはじまりなのだ。さて、フィンとその家来（けらい）たちはアイルランドからスコットランドまで橋をかけようと、コーズウェイで仕事をしていた。フィンは妻のウーナをとても愛していたので、途中で家に帰って、自分の留守のあいだ妻がどんなにしているか見て来ようと思いたった。そこで彼はモミの木を引きぬいて、根と枝を払いおとすと、それを杖にしてウーナのもとへ出かけた。

ウーナ、というよりフィンは、このころノックマニィ・ヒルのてっぺんに住んで

いた。むかい側には丘のような、山のようなクラモアというとこがそびえていた。
　そのころもうひとり巨人がいた。クーフーリンといって――アイルランド人だという者もいれば、スコットランド人だという者もいたが――スコットランド人であれアイルランド人であれ、彼が注目の的であることにまちがいなかった。当時彼に太刀打ちできる巨人はいなかった。たいへんな力持ちだったので、怒って地団駄を踏むと、国じゅうが地震のように揺れた。彼の名声は遠くまで鳴りひびいていた。人間の形をしたものは誰が戦っても、彼に勝ち目はないと言われた。雷電をこぶしで一撃して平らにのし、ホットケーキのようにしてポケットに入れ、むかって来ようとする敵にそれを見せた。彼はアイルランドじゅうの巨人をのこらずこっぴどくやっつけていたことはまちがいない、フィン・マクール以外は。フィンを捕らえて、おなじ目にあわせるまでは夜も昼も冬も夏も安心して休めないと息まいた。しかし、てっとりばやくうやうやしく申しあげると、フィンはクーフーリンが彼と力だめしをするために、コーズウェイに来ているといううわさを聞いて、とつぜん自分の留守中淋しく不自由な生活をしているかわいそうな妻がいとおしくなったのだ。それで彼は、さっき言ったようにモミの木を引きぬき枝葉を払って杖にすると、ノックマニィの頂上にいるいとしいウーナに会うために旅立ったのだが、それは口実だっ

た。

　じつは、人々はなぜフィンがそんなに風あたりの強い場所を住まいに選んだのか不思議がってわざわざそれを言いに行く者もいた。

「マクールさん、よくもまあ」と彼らは言った。「ノックマニィのてっぺんにテントを張っていられますね？　夜も昼も、冬も夏も吹きさらしで起きてるときもナイトキャップがはなせないでしょう？　それとも指で押さえているんですかい？　それに、また、水にご不自由でしょう？」

「なあに」とフィンは言った。「わし自身が円塔のように高いから、いい眺めが好きなのは有名でね。きみたち、いったいノックマニィのてっぺんより眺めのいいところを知っているかね？　水なら、いまポンプを敷設している。ありがたいことにコーズウェイが完成したらすぐ、それを仕上げるつもりだ」

　さて、フィンの哲学の大部分は以下のとおり。ことの真相は、クーフーリンが家にむかって来るのが見えるようにノックマニィの頂上に住まいをかまえたのだ。もしフィンが見張りのよくできる場所を欲しかったとすれば、――ここだけの話だが、彼はそれがのどから手が出るほど欲しかった――スリーヴ・クルーブかスリーヴ・ドナードか、そのいとこのクラモアをのぞけば、うまし国賢者の国アルスターには

これ以上きれいで、ふさわしい場所はなかったといえば、十分お分かりいただけるだろう。
「ここに神のご加護を！」とフィンは上機嫌で言って、誠実な顔をわが家のなかに入れた。
「まぁ、フィン、お帰りなさい。ようこそウーナのもとへ。いとしい牡牛さん」つづいてピチャッと音がした。丘のふもとの湖の水が、なんというか、同情したり同調したりして渦巻くのだそうだ。
フィンはウーナと二、三日しあわせにすごし、とても心がなごんだが、クーフーリンのことを恐れていた。この恐怖が大きくのしかかってきたので妻は彼にはなにか気がかりなことがあって、それをひたかくしにしていることが分かってきた。女というものはその気になればそのうち夫の秘密をかぎつけるものだ。フィンがそのいい例だ。
「クーフーリンのことで」と彼は言った。「わしは悩んでいる。あの男が怒って地団駄を踏むと、町じゅうが揺れる。雷電を止めた話は有名だ。彼はいつもホットケーキ型のを持ち歩いて、疑う者にはそれを見せるということだ」
彼はそう言いながら、口のなかで親指をパチンといわせた。予言をしたいときや

留守中なにがあったか知りたいときはいつもそうするのだった。妻はなんのためにそうするのかきいた。
「やつが来ておる」とフィンは言った。「ドゥンガノンの下に見える」
「まぁ、ありがたいこと！　どなたですか？　神に栄光あれ！」
「あの怪物のクーフーリンだ」とフィンが答えた。「どう相手したらいいか分からん。逃げれば面目まるつぶれだ。おそかれ早かれあいつとは一戦まみえねばならん。わしの親指がそう言っておる」
「いつここに来るのでしょう？」妻がきいた。
「あしたの二時ごろだ」とフィンが唸りながら答えた。
「ねぇ、あんた、気をおとさないで」とウーナが言った。「わたしにまかせてちょうだい。あんたが親指でやるよりはわたしのほうがうまく苦境から救ってやることができるかも知れないわ」
彼女はそれから丘のうえに高くのろしをあげたあとで、口のなかに指を入れ、指笛を三回吹いた。それでクーフーリンはクラモアに招かれていると分かった――この方法でむかしのアイルランド人は外国人や旅人に合図をして歓迎と歓待の意を知らせたのだ。

そのうちフィンはとても憂鬱になった。なにをしたらいいのか、どうふるまったらいいのかさっぱり分からなくなった。クーフーリンは客として迎えるにはいやなやつだった。まえに言ったホットケーキのことを考えると彼の心臓のほうがぺちゃんこになるのだった。いかにフィンが力がつよくて勇敢でも、怒りにかられると国中を揺るがせ雷電をのしてホットケーキにできる男を相手に勝ち目があろうか？　フィンはどの手をつかって立ちむかえばいいのか分からなかった。右か左か――後か前か――どこへ行ったらいいのか、かいもく見当がつかなかった。

「ウーナよ」と彼は言った。「おまえにはなにもできないのか？　いつもの機転はどうした？　わしはおまえの目の前でウサギみたいに皮をはがれるのだろうか？　一族の者の見るなかでわしの名は永遠に汚されてしまうのだろうか、一族のなかでもとりわけすぐれたこのわしが？　わしはこの人間山――地震と雷電にかかる巨大な十字架――とどう戦ったらいいのだろう？　あいつのポケットに入っているホットケーキはかつて――」

「フィン、おちつきなさい」とウーナが言った。「まったく恥ずかしいわ。靴をちゃんとはいたらどう？　ホットケーキといえば、雷電だろうがなんだろうが彼が持ってくるのに負けないいいものが出せるかも知れないわ。彼には彼そうおうのごちそ

うでもてなさなくちゃ、ウーナの名がすたるっていうものよ。彼のことはわたしにまかせて、あんたはわたしの言うとおりにしてればいいのよ」

　これでフィンは安心した。なんのかの言っても結局は妻を信頼していた。これまでにも妻は彼を数々の苦境から救いだしてくれたのだ。ウーナは色のちがう毛糸を九本取り出した。なにか大事なことを成し遂げるのにいちばんいい方法を知りたいときはいつもこうした。三色の毛糸を三本ずつ編んで三かせつくると、ひとつは右腕に、ひとつは胸に、三っつめは右のくるぶしにかけた。これで、彼女がやると引き受けたことが成功することが分かった。

　用意がすべて整うと、隣近所をかけまわって、二十一個のフライパンを借り集めた。これを持って帰り、粉をこねて作った二十一個のホットケーキのなかへ入れた。これをいつものように火で焼き、焼きあがるにしたがって、戸棚にならべた。それから大きな鍋に新鮮な牛乳を入れ、凝乳と乳漿を作った。これをすませると、彼女はいたく満足して腰をおろし、翌日二時ごろのクーフーリンの到着を待った。その時刻に彼は来る予定だった——フィンは親指をしゃぶってこれを知ったのだ。さて、フィンの親指にはめずらしい特性があった。まさにこの点で彼は仇敵クーフーリンと似ていた。クーフーリンの強い力はすべて右手の中指にあることはよく知ら

れていた。そしてそれを失うようなことになれば、図体は大きくても、ただの人間と変わらなくなるのだ。

ついに翌日、クーフーリンが谷を越えて来るのが見えた。ウーナの作戦開始の時だった。彼女はすぐに揺り籠を持って来て、フィンをその中に寝かせ上から衣服を着せかけた。「あんたはあんたの子どものふりをするのよ。そこにおとなしく寝てなにも言わないで、わたしの言うとおりにするのよ」

予想どおり二時ごろクーフーリンが入ってきた。「神のお恵みを！」と彼は言った。

「ここが偉大なフィン・マクールの住まいかね？」

「そうですよ、あなた」とウーナが答えた。「神のご加護を――おかけになりませんか？」

「ありがとう、おくさん」と彼は言ってすわった。「マクールのおかみさんだね？」

「そうですわ。わたしは主人を誇りに思ってますのよ」

「そうとも」と相手は言った。「アイルランドじゅうでいちばん強くて勇敢だという評判だ。だがあんたの近くにいる人が彼とお手合せを願っておる。ご主人はいるかな？」

「それがあいにくいないんですよ」と彼女は答えた。「怒り狂って出て行きました。クーフーリンとかいう巨人がコーズウェイに彼を捜しに来たと聞いたものですから、捕まえに行ったようですわ。ほんとうにかわいそうな巨人が主人と会わなければいいのに。だって会ったらすぐ主人にのされてしまいますもの」

「えーと」と相手は言った。「わしがクーフーリンだがね。この十二カ月フィンを捜しつづけておったが、彼はわしを避けていた。あいつに手をかけるまではわしは夜も昼も休めない」

これをきいてウーナは軽蔑したように大声で笑いだした。そして彼がわずか一握りの人間ででもあるかのように見た。

「あなたフィンを見たことがあるの？」彼女はたちまち態度を変えて言った。

「見るわけないだろう？」と彼は言った。「あいつはいつもわしに近づかないように気をつけている」

「そうだと思ったわ」と彼女は答えた。「それぐらい分かっているわよ。あなたがかわいそうだから、忠告してあげるけど、彼に会いませんようにと日夜お祈りしたほうがいいわよ。会ったら最後だからね。でも、まもなく風が吹いてドアに当たるわ。フィンがいないから、あなた家の向きを変えてくれない？　フィンが家にいれば彼

がするんだけど」
　これにはさすがのクーフーリンもびっくりした。しかし、彼は立ち上がると、右手の中指を引っ張って三度鳴らし、外に出て、家に腕をかけ彼女が頼んだように向きを変えた。フィンはこれを見ると、冷汗が身体じゅうの毛穴から吹き出した。しかし、ウーナは自分の機転に自信が出てきて、ちっともひるまなかった。
「あら、まぁ」と彼女は言った。「あなたは親切だから、もうひとつ頼みをきいていただきたいわ、フィンがいないから。長い間雨が降らないものだから、ひどい水不足なの。フィンが言うには、この山のうしろの岩の下にとてもいい井戸があるんですって。フィンは岩を砕くつもりだったんだけど、あなたが来るって聞いたものだから大急ぎで出て行って忘れたんだわ。あなたが井戸を探してくれたら恩にきるわ」
　彼女はその場所を見せにクーフーリンをつれて行った。そこは固い一枚岩だった。しばらく見ていたが、彼は右手の中指を九回鳴らすと、しゃがんで深さ約百二十メートル長さ四百メートルの裂目を入れた。それ以来そこはラムフォドのグレンと名づけられた。
「さぁ、おはいんなさい」と彼女は言った。「たいしたものはないけど、ちょっと食べてちょうだい。フィンとあなたは仇どうしだけど、あのひとの家でもてなさなか

ったとあれば、あのひとにしかられるわ。たとえ留守でももてなさなかったとあれば、機嫌をわるくするるわ」

彼を中へいれると、彼女は前に話したケーキを半ダースとバターを一、二缶とゆでベーコンの片身とキャベツをどっさり彼の前におくとしきりにすすめた——言っておくが、これはジャガ芋が作られるようになるずっと以前のことだった。クーフーリンがケーキを一個口に入れると、大きなガシャッという音がした。うなり声ともわめき声ともつかぬ轟音だった。「頭にきたぞ！」と彼は叫んだ。「なんだこれは？歯が二本抜けた！　なんてパンを食わしたんだ」

「どうしたの？」とウーナが冷ややかにきいた。

「どうしたかだって？」と相手がまた叫んだ。「ほら、わしのいちばんいい歯が二本抜けたんだ」

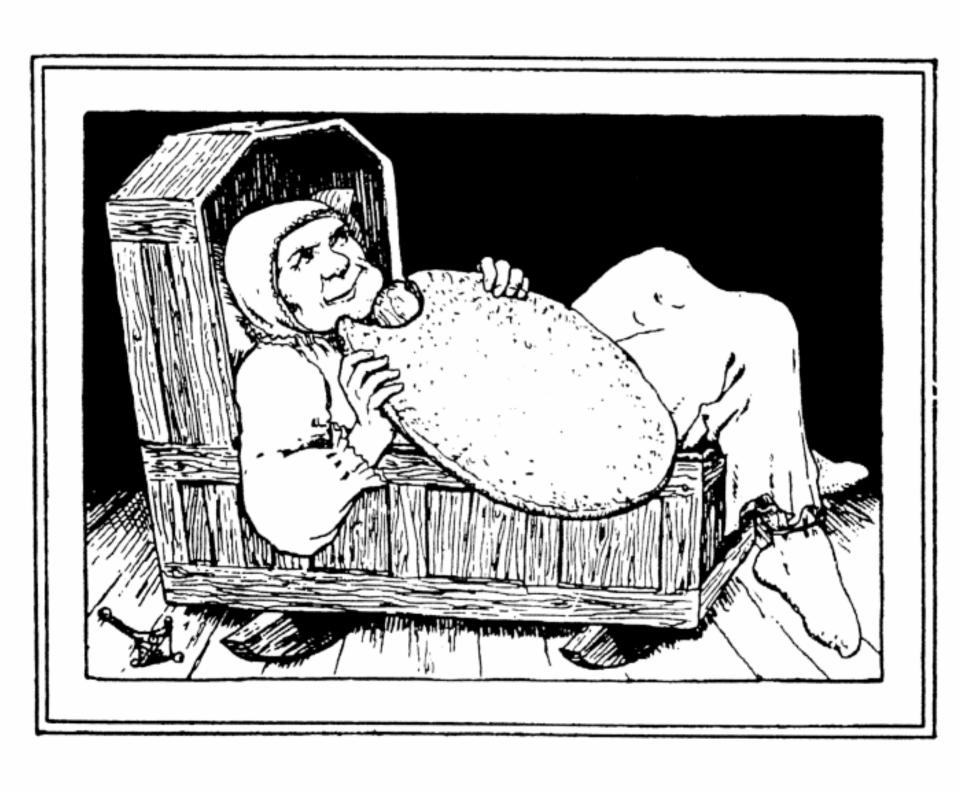
「あら」と彼女は言った。「それはフィンのパンよ——家にいるときはそればかりよ。あら、言うのを忘れていたけど、それは彼しか食べることができないの。それにあの揺り籠のなかの子どももとね。でも、わたし思ったの、あなたは評判の大男だから、食べられるだろうって。わたしはフィンを相手に戦おうって人に恥をかかせたくなかったのよ。ケーキをもうひとつどう——前のほど固くはないかも知れない

わ」

クーフーリンは空腹をとおりこして飢えていた。それであらたにふたつめのケーキにとりかかった。するとたちまち前の二倍も大きなわめき声が聞こえた。「雷に絞首刑！」と彼は怒鳴った。「このパンをどけてくれ。さもないとわしは歯が一本もなくなるぞ。ほらまた二本抜けた！」

「まぁ、あなた」とウーナが答えた。「そのパンが食べられないのならそっと言ってよ。揺り籠の赤ん坊が起きるわ。ほら、起きちまったじゃないの」

フィンは巨人がびっくりするような金切り声を出した。赤ん坊にしては大きな声だった。「おかぁちゃん」と彼は言った。「ひもじいよう。なにか食べるものおくれよう」ウーナは行って、フライパンのはいってないケーキを手に持たせた。フィンは人が食べるのを見て、食欲が刺激されていたので、それをさっと呑み込んだ。クーフーリンはびっくり仰天した。幸運にもフィンに出会わなかったことにひそかに感謝した。彼はひとり思った。「あんなパンを食べる男と試合しても勝ち目はない。まだ揺り籠の中にいるその息子でさえおれの目の前でムシャムシャ食べてやがる」

「揺り籠の中の坊やを一目見たいもんですなあ」と彼はウーナに言った。「あんな食べ物を食べるような子どもは本気でおがませてもらいたいもんだ。めずらしいまぐ

さ石[3]だって食いかねない」

「どうぞ、どうぞ」とウーナが答えた。「さぁ、起きて、このやさしいおじちゃんに父さんのフィン・マクールの名に恥じないところを見せてちょうだい」

フィンはこの際できるだけ子どもっぽい服を着ていたが、起き上がるとクーフーリンになれなれしく言った。「おじちゃんつよいの？」

「雷と猟犬だ！」と相手は言った。「ガキのくせになんて声してやがるんだ！」

「おじちゃんつよいの？」とフィンはまたきいた。「このしろい石から水をしぼりだせる？」クーフーリンの

手に石をひとつ持たせてきいた。クーフーリンはなんどもなんども石を搾ったが、水は一滴も出なかった。

「あぁ、だめだなあ！」とフィンが言った。「おじちゃん、巨人のくせに！　石をぼくによこして。フィンの息子だってこれぐらいできるんだから、父ちゃんがどれぐらいつよいかわかるってもんだ」

フィンは石を取ると、凝乳とすりかえそれを搾った。すると水のように透明な乳漿がシャワーのように彼の手からしみ出てきた。

「もうぼく寝るよ」と彼は言った。「揺り籠に。父ちゃんのパンも食べられない、石から水もしぼりだせない人と時間をむだにしちゃったんだもん。おじちゃん、父ちゃんが帰ってこないうちに出て行ったほうがいいよ。父ちゃんにつかまったら、二分でおかゆにされちゃうぞ」

クーフーリンはこれだけ見たので、おなじ意見だった。フィンが帰ってくると思うと恐怖でひざががたがたふるえた。それであわててウーナに別れをつげると、金輪際フィンのことは聞きたくない、ましてや会いたくはないと言った。「公平に見て、わしは彼にかなわない」と彼は言った。「わしがどんなに強くても。これからは疫病のように彼を避けよう。生きているあいだはこの地方に姿を現さないようにす

るから、フィンにそう言ってくだされ」

フィンはそのあいだ揺り籠にはいって静かに寝ていたが、クーフーリンはもうすぐ出て行く、姦計を見破られずにすんだと思うとうれしくて胸がわくわくした。

「よござんしたね」とウーナが言った。「主人がいあわせなくて。タカの餌食になるところだったわ」

「分かってますよ」とクーフーリンは言った。「そうなることとまちがいなしだった。だが出て行く前にフィンの息子の歯にさわらせてもらえませんか？　あんなフライパン・パンを食べるのはどんな歯なんだろう」

「どうぞ、どうぞ」と彼女は言った。「ただし、ずっと奥に生えているから、指をぐんと中に入れないといけないわ」

クーフーリンはこんな子どもにこんな強力な歯が生えそろっているのでびっくりした。しかし、いつまでも歯をしらべつづけていたので、フィンの口から手をとったときは彼の全力がやどっている大事な指をおき去りにしてしまった。彼は大声でうなった。たちまち恐怖と弱気のためにたおれた。これこそフィンの思うつぼだった。彼のもっとも強力で手ごわい敵がいまや彼の意のままだった。彼が揺り籠からとび出すと、長いあいだ彼と家来たちの恐怖の的だった偉大なクーフーリンはたち

まち彼の前に死体となって倒れた。かくてフィンは妻ウーナの機知と機転により、とても彼の力のおよばない姦計によって首尾よく敵を倒したのである。

訳注　(1)　クリア岬—アイルランド南端にある。
(2)　ジャイアンツ・コーズウェイ—アイルランド北端にある。
(3)　まぐさ—戸や窓の上部構造を支える大きな梁や桁。

かたりべ達の競演

ケインの足をヒルに吸わせて

目の見えない男が五百人、耳の聞こえない男が五百人、足のわるい男が五百人、口の利けない男が五百人、手の不自由な男が五百人いた。目の見えない五百人の男には五百人の妻が、耳の聞こえない五百人の男には五百人の妻が、足のわるい五百人の男には五百人の妻が、口の利けない五百人の男には五百人の妻が、手の不自由な五百人の男には五百人の妻がいた。この五百人にはそれぞれ五百人の子どもと五百匹の犬がいた。彼らは一団となって移動するのが慣わしで、不屈の放浪もの乞い兄弟同盟とよばれていた。エリンにオクロニサートという騎士がいた。彼らはその騎士のところに一年と一日いて、彼の持ちものをぜんぶ食べつくしてしまって、彼をすっかり貧乏にしてしまい、彼に残されたのは、がたがたの黒い古い家と足のわるい老いた白馬だけであった。エリンにブリーン・ボルー(1)という王がいた。オクロニサートはこの王に助けを求めに行った。彼は森のはずれで灰色のカシの木を切っ

て杖にし、足のわるい老いた白馬に乗ると、どんどん森を通り抜け沼地や荒地を越えて王の館にやって来た。到着すると、王の前にひざまずいた。王が彼にきいた。
「なんの知らせだ？　オクロニサート」
「王さま、芳しくないお知らせでございます」
「どんな芳しくない知らせだ？」
「不屈の放浪もの乞い兄弟同盟を一年と一日泊めて、持ってるものを全部食べつくされ、わたしはすっかり貧乏になりました」
「ほう！」と王は言った。「それは気の毒だな。なにが望みだ？」
「助けていただきたいのです」とオクロニサートは言った。「いただけるものはなんでもけっこうでございます」
王は百頭の牝牛をやると約束した。オクロニサートは女王のところへ行って、訴えた。すると女王はまた百頭くれた。彼は王の息子のマードック・マク・ブリーンのところへ行って、また百頭もらった。彼は王の館で食べものと飲みものをもらった。帰りがけに、彼はこう言った。「たいへんありがとうございました。これでわたしはしっかりやっていけます。これだけちょうだいしたあとですが、もうひとつ欲しいものがございます」

「なんだ？」と王がきいた。
「女王さまのあとをついてまわっている抱き犬をいただきたいのです」
「ほう！」と王は言った。「おまえは尊大で高慢だから財産をなくしたのだ。だが、いい人間になるのだったら、この犬もやろう」
　オクロニサートは王に別れをつげて、犬を抱くと、足のわるい老いた白馬の背に乗り、足早に森を通りぬけ、沼地や荒地を越えて行った。森のなかをしばらく行くと、ノロジカが飛び出て来て、抱き犬がそのあとを追った。たちまちのうちに、シカはオクロニサートのうしろで女になった。宇宙のはじまりから永遠の終わりまで目にしたことがないほど美しかった。女は彼に言った。「犬をわたしから追い払ってください」
「ぼくと結婚するならばそうしよう」とオクロニサートは言った。
「これからあなたに三つの誓いを課します。それを守れば結婚しましょう」と女は言った。
「その誓いとはなんだ？」と彼はきいた。
「第一はこの世の王を饗宴や晩餐によぶときは、わたしにまず知らせてからにすること」と女は言った。

「ほう！」とオクロニサートは言った。「おまえはぼくがその誓いを守れないと思うのか？　この世の王を招待するときはこれからそうするとおまえに言ってからにする。その誓いを守るのはかんたんだ」
「守れそうですわね！」と女は言った。
「第二の誓いは」と女は言った。「わたしたちが一緒に人前にいるときとか集まりの席で、あなたがさいしょわたしをみつけたときはシカだったとののしらないこと」
「ほう！」とオクロニサートは言った。「その誓いをぼくにたてさせる必要はない。とにかくそれは守る」
「守れそうですわね！」と女は言った。
「第三の誓いは」と女は言った。「あなたが外にでかけるとき、わたしを男の人とふたりきりにしていかないこと」女が彼と結婚することがふたりの間で決まった。
彼らは古いがたがたの黒い家に着いた。岩の割れ目や岩だなの草を刈った。ベッドを整えて寝た。オクロニサートは、モーという牛の鳴声とメーという羊の鳴声とヒヒーンという馬の鳴声で目が覚めた。彼は、キャッスルタウンの塔の中を端から端へ動く銀の車つきの、金のベッドに寝ていた。
「きっと驚かれたことでしょう」と女が言った。

がわたしと離れないかぎりずっとあなたのお部屋ですわ」

彼は起きると服を着て外へ出た。外から、家を眺めてみた。それは彼が見たこともないような、王さまでさえ持たないような宮殿だった。それから農場のまわりを歩いてみた。そこにはこれまで見たこともないくらいたくさんの牛と羊と馬がいた。彼は家に戻って、妻に言った。農場は他人の牛と羊に荒らされている、と。「そうじゃありません」と妻が言った。「あそこにいるのはあなたの牛と羊ですわ」

「ぼくはあんなにたくさんの牛や羊は持っていなかった」

「それは分かっています」と彼女が言った。「でもあなたがわたしと離れないかぎりずっとあなたのものですわ。いい妻には持参金がつくのです」

いまや彼は暮らしむきがよくなって、実に金持ちになった。牛や羊ばかりか、金や銀も持っていた。銃を持ち犬をつれて毎日狩りにでかける偉い人になった。ある日エリンの王を晩餐に招待しようと思いついた。が、その予定を妻に話さなかった。

第一の誓いが破られた。彼は急いでエリンの王のもとへ行って王と廷臣を晩餐に招待した。エリンの王は彼にきいた。「おまえにやると約束した牛をつれて帰るか？」

「あぁ！　エリンの王さま、いりません」とオクロニサートは言った。「いまではわたしがそれだけのものをさしあげることができます」

「ほう！」と王が言った。「この前会ったときからするとおまえは暮らしむきがよくなったのだな！」

「そうなのです！」とオクロニサートが言った。「金や銀や、牛や羊をいっぱい持っている金持ちの妻と出会いました」

「それは喜ばしいことだ」とエリンの王は言った。

オクロニサートは言った。「王さまと廷臣のかたがたにわたしの晩餐にお越しいただければありがたいのですが」

「喜んでまいろう」と王は言った。

王たちはその日彼と一緒に行った。これから王が行くことを妻に知らせないでどうやって晩餐の準備をするのかオクロニサートは考えもしなかった。どんどん進んで行って、オクロニサートがシカと会った場所に来たとき、彼は誓いを破ったことに気がついた。それで王に言った。「失礼でございますが、わたくしは一足さきに家

へ戻って、王さまが来られることを知らせておきます」
王は言った。「若い者を使いにやろう」
「それには及びません」とオクロニサートは言った。「使いをやるよりはわたくしが行ったほうが用がかたづきます」
彼は家にむかった。家に着くと妻がかいがいしく晩餐の準備をしていた。彼は王を招待したことを妻につげて、許しを求めた。「今回は許します」と彼女は言った。「わたしにはあなたのなさったことがあなたとおなじように分かるのです。あなたの第一の誓いは破られました」
王と廷臣たちはオクロニサートの家にやって来た。妻は王と偉い人たちにふさわしいようにすべて準備していた。あらゆる種類の飲みものと食べものがあった。彼らは三日三晩ご馳走を食べ続け、そして飲んだ。晩餐をとても賞賛した。オクロニサートもそれを賞めた。だが、妻はそれを賞めなかった。オクロニサートは妻が賞めないのに腹をたててこぶしで彼女の口を殴って歯を二本へし折った。「なぜおまえはみんなと一緒に晩餐を賞めないのだ、この下劣なシカめが」と彼は言った。
「わたしは賞めません」と彼女は言った。「今夜あなたがエリンの王と廷臣にお出ししている晩餐よりもおいしいご馳走を父の犬が食べているのを見たことがあります」

オクロニサートはもうれつに怒って外に出て行った。そこにしばらく立っていると、一人の男が黒い馬に乗って来て、通りがかりにオクロニサートのコートのえりをつかみ、彼のうしろに乗せた。ふたりは出発した。騎手はオクロニサートに一ことも言わなかった。馬はとても速く走ったのでオクロニサートは首が風に吹き飛ばされるのではないかと思った。とても大きな宮殿に着いて、黒い馬からおりた。馬丁が出てきて、馬をつかまえ、なかに連れて行った。馬の足をワインで拭いていた。黒馬の騎手はオクロニサートに言った。「あのワインを飲んで、今夜おまえがブリーン・ボルーと廷臣に出していたのよりいいワインかどうかくらべてみるがよい」

オクロニサートはワインを飲んでみて言った。「このワインのほうがいい」

黒馬の騎手が言った。「さっきの拳骨ははなはだ不当だ！　おまえの拳骨の風で歯が二本わしのところへ飛んできた」

それから騎手は大きくて立派な高貴な宮殿につれて行き、紳士たちがおおぜい飲んだり食べたりしている部屋に案内した。彼はオクロニサートを首席にすわらせると、ワインをすすめて言った。「このワインを飲んで、今夜おまえがエリンの王と廷臣に出していたワインよりいいかくらべてみよ」

「このワインのほうがいい」とオクロニサートが言った。

「さっきの拳骨ははなはだ不当だ！」と黒馬の騎手は言った。すべて終わると、黒馬の騎手が言った。「もう帰りたいか？」

「はい」とオクロニサートは言った。「とても帰りたいです」

彼らは立ち上がって、馬小屋に行った。黒馬が引き出された。彼らは馬の背に跳び乗って行った。出発すると黒馬の騎手がオクロニサートにきいた。「わしがだれだか知っているか？」

「知りません」とオクロニサートが言った。「おまえの義兄だ」と黒馬の騎手は言った。「わしの妹はおまえと結婚したが、あいつにふさわしい王も騎士もエリンにはいない。おまえの誓いはもうふたつ破られている。もしあとの誓いを破れば、おまえは妻と全財産を失うのだ」

彼らはオクロニサートの家に着いた。オクロニサートは言った。「ぼくは家に入るのが恥ずかしい。夜になってからぼくがどこに行っていたかみんな知らないから」

「ほう！」と騎手は言った。「みんなおまえのいないことなど気にしていない。みんなとても楽しんでいるからおまえがどこへ行ったか詮索しやしない。ここにおまえが妻の口からへし折った二本の前歯がある。もとのところに入れてやれば、以前どおり丈夫になる」

「ぼくと一緒に入ってください」とオクロニサートが黒馬の騎手に言った。
「いや、よそう。入りたくない」と黒馬の騎手は言った。
黒馬の騎手はオクロニサートに別れを告げて立ち去った。
オクロニサートはなかに入った。紳士たちをもてなすのに大わらわの妻が彼を迎えた。彼は妻に許しを乞うと、二本の前歯を口に入れた。するともとどおり丈夫になった。彼女は言った。「あなたはもう誓いをふたつ破りました」彼が入って行ったときだれも気づかなかった。「どこへ行っていたのだろう?」と言う者もいなかった。その夜と翌日いっぱい飲んで食べて過ごした。
夜になって王が言った。「帰る時間だ」みんながそうだと言った。オクロニサートは言った。「今夜はお帰りにならないでください。舞踏会の準備をしております。あしたお帰りください」
「お帰りいただいたら」と妻が言った。
「だめだ」と彼が言った。
その夜舞踏会がはじまった。踊りと音楽に興じてみんな暑くなって汗をかいた。つぎつぎと家の脇に涼みに出て行った。オクロニサートと妻とケイン・マク・ロイという男のほかはみんな出て行った。オクロニサートも出て行ったので家のなかに

は妻とケイン・マク・ロイだけが残った。彼が第三の誓いを破ったのをみて、妻は部屋のなかで跳びはねると大きな子馬になってケイン・マク・ロイを足で蹴り、腿をふたつにへし折った。彼女はもうひと跳びすると、ドアをぶち壊して出て行き、もう姿が見えなくなった。彼女はキャッスルタウンの塔を軽々と肩と背中にかついで持って行った。あとにはケイン・マク・ロイが古いがたがたの黒い家の床の雨漏りのなかにとりのこされた。

つぎの日の夜明け、かわいそうにオクロニサートの目に入ったのは以前の古い家だけだった。牛も羊も、彼が持っていたいいものはなにもかもなくなっていた。朝になって、ある者は藪(やぶ)のそばで、ある者は堤防のそばで、ある者は溝のそばで目を覚ました。王はかろうじて面目を保って、オクロニサートの小さな小屋のなかに頭がかくれていた。帰りがけにマードック・マク・ブリーンは乳兄弟のケイン・マク・ロイをおいてきたことを思いだして、生きているあいだふたりは別れ別れになってはいけない、つれに行ってくると言った。ケインは足を折られて、古いがたがたの黒い家の床のまんなかの雨漏りのなかにいた。ケインの足を治せる人が見つからなければ、地球がわが足裏に巣を作り、空がわが頭に巣を作るだろうとマードックは言った。

イニスターク島(2)にケインの傷が治る薬草があるということだった。

そこでケイン・マク・ロイは担がれてその島に行き、一カ月分の食料と、好きなときに使って出入りできる二本の松葉杖をもらった。とうとう食料がつきて、彼は貧窮したのに薬草はみつからなかった。彼は海岸までおりて行って貝をひろって食べるのが慣わしだった。

ある日、岸におりているとき、とても大きな男が島に上陸するのが見えた。天と地が両足の間におさまるほどの大男だった。大男が近づいて来ないうちに小屋のなかに入ろうと松葉杖で立ち去った。努力のかいもなく、大男は彼のまえでドアをふさいで言った。「きみがうそをつかなければ、きみはケイン・マク・ロイだな」ケイン・マク・ロイは言った。「ぼくは人にうそをついたことはない。ケインだ」

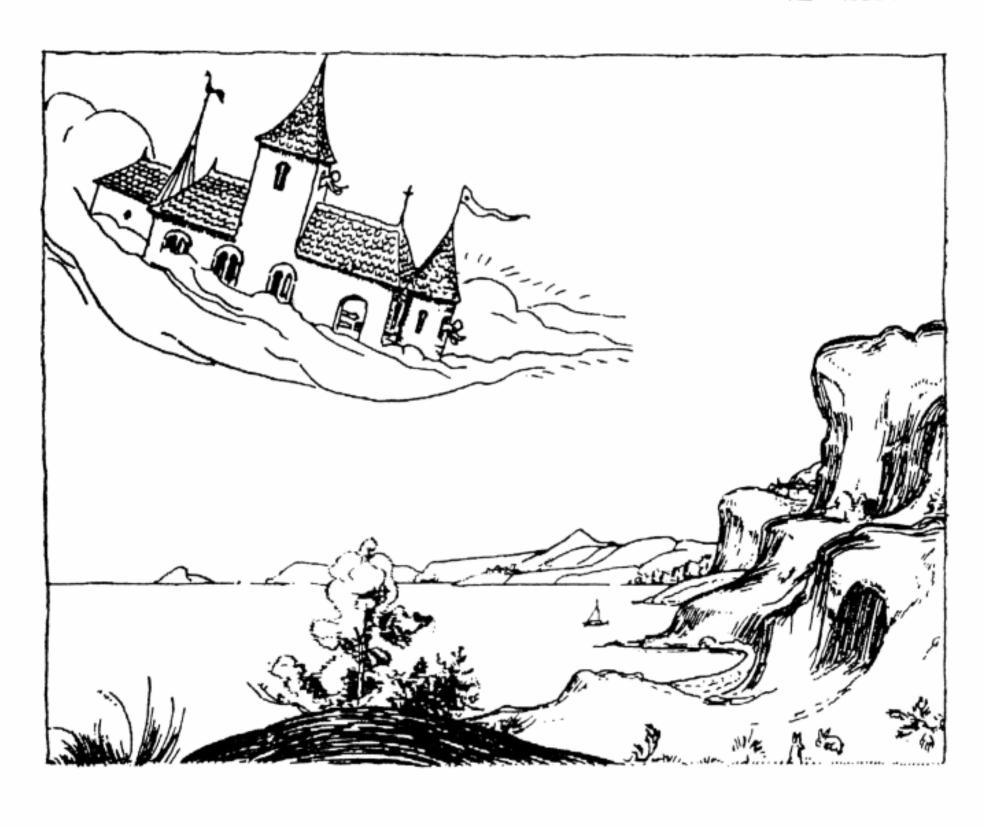
大男は言った――

「ケイン、薬草の軟膏を塗って治してやるからおまえの足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ローマの大教会でミサを聞いてからノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイは言った――

「ケインの足だろうが、だれの足だろうが、ぼくがロイの息子ケインであろうが、あるまいが、足を出して薬草の軟膏をつけて治してもらうから教えてくれ、なぜノルウェーには教会がないのか、今日も明日もローマの大教会に行かねばならないのか。

きみがうそをつかなければ、きみはノルウェー王の息子マカン・アン・アハールだな」

大男は言った。「ぼくは人にうそをついたことがない。ぼくはマカ

ンだ。なぜノルウェーに教会がないか、これから話そう。七人の石工が教会を建てに来て、ぼくの父と教会建設の契約をした。石工たちが望んだ取り決めは教会が完成したら、ぼくの母と姉が教会のなかを見に行くことだった。父は教会が安く建てられるので喜んだ。双方がそれで合意した。朝になって石工たちは教会の建設予定地に行った。父は建設の場所を指示した。彼らは朝建てはじめ、教会は夕方には完成した。完成すると彼らは母と姉がなかを見に行くように要求した。母と姉が入るとすぐドアが閉まった。教会は一塊りの霧となって空中にあがって行った。

「ケイン、薬草の軟膏を塗って治してやるから足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ローマの大教会でミサを聞いてからノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイは言った——

「ケインの足だろうが、だれの足だろうが、ぼくがロイの息子ケインであろうが、あるまいが、ぼくは足を出して薬草の軟膏をつけて治してもらうから教えてくれ、

きみの母君と姉上はどうなったのか」

「ああ！」と大男は言った。「君は不運だ。この話は長くて語りきれない。だが、手短に話そう。彼らが教会の仕事をしていた日、ぼくは山に狩りに行っていた。夕方家に帰ってくると、兄がその日あったことを話してくれた。つまり、母と姉が一塊りの霧につつまれて去ったというのだ。ぼくは怒り心頭に達して、母と姉の居場所を探し出すまではこの世を破壊してやると決意した。兄は、そんなことを考えるのは馬鹿だと言った。『おまえがなにをすればいいか教えてやろう』と兄は言った。『まずふたりの居場所を探しに行くのだ。居場所が分かったら、おだやかにふたりを要求する。もしおだやかに取りもどせなかったら、戦って取りもどせ』
「ぼくは兄の忠告にしたがって、乗っていく船の準備をした。ひとりで出発して、大洋をひとり占めにした。ひどい霧に襲われて、島にたどりついた。島のちかくには多くの船が錨をおろしていた。ぼくはそのなかに入って行って、上陸した。とてつもなく大きな女がイグサを刈っていた。女は頭をあげるとき、右の乳房を肩のうえにのせるのだった。女が身体を屈めると、乳房は両足の間に垂れ下った。ぼくは女の背後に行って、乳房を口でくわえた。『女よ、見ただろう、ぼくはおまえの右乳

できるだけ速くここを離れることです』『なぜだ？』とぼくはきいた。『あの上の洞穴に大きな巨人がいます』と女は言った。『あなたがごらんになった船の者はみんな、その巨人が自分の息で海から吸い上げて、殺して食べました。巨人はいまは眠っていますが、目を覚ませばあなたもおなじ目にあうでしょう。洞穴には大きな鉄のドアとカシのドアがあります。巨人が息を吸うとドアが開きます。息を吐くと閉まります。まるで七本の小さな棒と七本の大きな棒と七つの錠をかけたみたいにぴたっと締まります。あまり堅くて七本のてこでも開きません』ぼくは老女にきいた。『巨人をやっつける方法はないのか？』『お教えしましょう』と女は言った。『どうやったらやっつけられるか。彼は短槍という武器をドアの上に持っています。最初の一撃でうまく彼の首をはねれば、それでいいのです。しかしうまくいかなければ、事態ははじめよりわるくなります』

「ぼくはでかけた。洞穴に着いた。ふたつのドアは開いていた。巨人の息でぼくはなかに吸い込まれた。大小の椅子と鍋がたがいにぶつかりあい、足をけがしそうだった。ぼくがなかにはいるとドアが閉まった。まるで七本の小さな棒と七本の大きな棒と七つの錠をかけたみたいにぴたっと締まった。七本のてこでも開かなかった。

ぼくは洞穴の囚人だった。巨人はまた息を吸い込んだ。ドアが開いた。上を見ると短槍が見えたのでつかんだ。ぼくはその短槍を引くと、保証するが、二度と頼みたくないような一撃を見舞ってやったよ。ぼくはサッと巨人の首をはねた。下でイグサを刈っていた老女に首を持って行って、言った。『巨人の首を持ってきてやったぞ』老女は言った。

「『まあ、なんと勇敢なお方！　あなたは英雄です。この島はあなたのおいでを必要としていたのです。あなたがうそをつかなければ、あなたはノルウェー王の息子、マク・コナハー（前出では、マカン・アン・アハール）ですね』『ぼくは人にうそをついたことはない。ぼくはマク・コナハーだ』とぼくは言った。『わたしは予言者です』と女は言った。『ですから、あなたの旅の目的は分かっています。あなたは母君と姉上を捜していますね』『そうだ』とぼくは言った。

「『ぼくは長い間旅をして母と姉とを捜している』『お二人の居場所をお教えしましょう』と彼女は言った。『お二人はレッド・シールドの王国におられます。レッド・シールド王は母君と結婚する決意で、王の息子は姉上と結婚する決意です。町の状況をお話ししましょう。七、七、四十九歩の幅の運河にその町は囲まれています。町の運河にははね橋がかかっています。昼間は、二匹の動物が番をしていますが、全身

鱗でおおわれていてどんな武器も突きささらないけれど、首のしたに二箇所だけ急所があります。名前はローとラスル。夜になると橋はあげられて、怪物は眠ります。とても高くて大きな塀が王宮を囲んでいます』

「ケイン、薬草の軟膏をつけて治してやるから足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ローマの大きな教会でミサを聞いてから、ノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイは言った――

「ケインの足だろうが、だれの足だろうが、ぼくがロイの息子ケインだろうが、あるまいが、ぼくは足を出して薬草の軟膏をつけて治してもらうから、教えてくれ、さらに母君と姉上を捜しに行ったのか、帰ってきたのか、どうなったのか」

「ああ！」と大男は言った。「おまえは不幸だ。話は長くて語りきれない。だがべつの話をしてやろう。ぼくは出発した。レッド・シールドの大きな町に着いた。老女

が言ったとおり運河に囲まれていた。運河にははね橋がかかっていた。ぼくが着いたときは夜だった。橋はあげられて、怪物は眠っていた。ぼくの立っている所から前に二フィート（六十センチ）、後に一フィート（三十センチ）測って、爪先と槍先を使って跳び、怪物の眠っている所へ飛んで行った。短槍をとり、保証するが、二度とごめんの一撃を首のしたたにお見舞いした。ふたつの首をとりあげ、橋の柱にかけた。王宮を囲んでいる塀のところへ行った。この塀は高くて跳び越えるのは容易でなかった。そこで短槍を使って、塀に穴をあけ、入って行った。宮殿の扉をたたいた。門番が叫んだ。『だれだ？』『おれだ』とぼくは言った。母と姉にはぼくの声が分かった。母が叫んだ。『ああ！　わたしの息子です。入れてください』
「ぼくが入ると大喜びで迎えに来た。食べものと飲みものといいベッドをあてがわれた。朝になると朝食が出た。そのあと、ぼくは母と姉に、さあ用意しなさい、行きましょうと言った。レッド・シールドの王が言った。『そうはさせない。わしはおまえの母と結婚する、息子はおまえの姉と結婚することに決めている』『あなたがぼくの母と結婚したいなら、ご子息がぼくの姉と結婚したいなら、おふたりともぼくと一緒に、ぼくの国に来てください。そこでふたりをさしあげましょう』レッド・シールドの王は言った。『そうしよう』

「そこでわれわれは出発した。ぼくの船のある所まで来て、それに乗り、国へむかって航海した。大きな戦争が行われている場所を通りかかったとき、ぼくはレッド・シールドの王になんの戦争か、なにが原因かとたずねた。『知らないのか？』とレッド・シールドの王は言った。『知りません』とぼくは言った。『世界一の美女、大宇宙王の娘を得るための戦争だ。その英雄らしさで姫を勝ち得た者は姫と結婚できるのだ。むこうの

城が見えるか？』『見えます』とぼくは言った。『姫は城の頂上にいて、そこから自分を勝ち得る英雄を見ている』とレッド・シールドの王は言った。ぼくは、足の速さと力の強さで彼女を勝ち得たいから、岸におろしてくれと頼んだ。彼らはぼくを岸におろした。姫が城の頂上にいるのが見えた。後方に二フィート、前方に一フィート測ると、爪先と槍の先を使って跳び、城の頂上に飛んで行った。宇宙王の娘を腕にかかえて、城の上から投げた。姫が地面に着くまえにぼくは姫のところへ行って、とちゅうで受けとめた。姫を肩にかついで全速力で岸をめざし、レッド・シールドの王にわたして船に乗せた。『これまでぼくほどりっぱな戦士があなたを求めたことはないでょう？』とぼくは言った。『あなたは跳躍はお上手です』と姫は言った。『でも勇気のほうはまだ見てませんわ』ぼくは後ろをむいて戦士たちと対戦し短槍で攻撃し、一人残らず首をはねた。それからふりむいて、レッド・シールドの王にむかって、岸に来て相手になれと叫んだ。彼は聞こえないふりをして、大宇宙王の娘と家に帰って結婚しようと帆をあげた。ぼくは後方に二フィート、前方に一フィート測ると、槍の先と爪先を使って跳んで、船に乗った。それからレッド・シールドの王に言った。『どうなさるおつもりだったのですか？　なぜお待ちにならなかったのですか？』『船に帆を張って準備をしてから、岸へ行っておまえの相手をしよ

うとしたまでだ。わしの考えていることは分かっておるだろう?』『分かりません』とぼくは言った。『つまり』と王は言った。『わしは大宇宙王の娘をつれて帰ろう。おまえは母と姉と一緒に帰国するのだ』『それは理屈にあいません』とぼくは言った。『ぼくが自分の勇気で勝ちとった姫はあなたのものでもだれのものでもありません』

「王は赤い盾を持っていた。それを着ければ、どんな武器にもびくともしなかった。彼は赤い盾を着けはじめたので、ぼくは短槍で王の胴のまんなかを打ち、ふたつに切って船のそとに投げた。それから息子を打って、首をはね、船のそとに投げた。

「ケイン、薬草の軟膏をつけて治してやるから足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ローマの大教会でミサを聞いてから、ノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイは言った。

「ケインの足だろうが、だれの足だろうが、ぼくがロイの息子ケインだろうが、あ

るまいが、ぼくは足を出して薬草の軟膏をつけて治してもらうから、宇宙王の娘を捜しに行ったのかどうか教えてくれ」

「ああ！　おまえは不幸だ」と大男は言った。「べつの短い話をしてやろう。ぼくは母と姉と宇宙王の娘と一緒に帰ってきて、宇宙王の娘と結婚した。はじめての息子にマカンーナースカヤージャイリカ（赤い盾の息子）と名づけた。このあとまもなく敵の軍勢がレッド・シールド王の償いを求めてきた。敵の軍勢は宇宙王からも来て宇宙王の娘の償いを求めた。ぼくは宇宙王の娘を片方の肩に、マカンーナースカヤージャイリカをもう一方の肩にかついで船に乗り、帆を張った。マストに大宇宙王の旗をかかげ、べつのマストにレッド・シールド王の旗をかかげ、ラッパを鳴らして敵の軍勢のなかを突っ走った。敵に言った、ここにおれはいる、力ずくで要求をするのなら、いまがチャンスだ。そこにいた船は全部ぼくを追ってきた。われわれは広い海に出て行った。速さでぼくの船にかなうのはいなかった。ある日、濃い霧がたちこめて、敵はぼくを見失った。たまたまぼくはウェット・マントルという島にやってきた。そこに小屋を建てた。もうひとり息子が生まれ、ウェット・マントルの息子と呼んだ。

「ぼくは長い間その島にいたが、くだものも魚も鳥も十分にあった。ふたりの息子はかなり成長した。ある日鳥を殺しに行ったところ、大きな大きな男が島へむかって来るのが見えた。その前に家に入ろうと走った。彼はぼくを待ちぶせして捕まえると、脇の下まで沼に押し込んだ。彼は家のなかに入り、宇宙王の娘を肩にかついでつれ出した。ぼくのすぐそばを通ったので、よけいいらいらした。宇宙王の娘がほかの男の肩にかつがれているのを見て、しかも取り戻すことができず、ぼくはあとにもさきにもあんな悲しい顔をしたことはない。息子たちはぼくのところへ出て来た。家から短槍を持って来いと言いつけた。ふたりは短槍をひきずって持って来た。ぼくはまわりの泥を槍で切り、抜け出した。

「ぼくはウェット・マントルに長い間いて、ふたりの息子は大きな若者になった。ある日、ふたりは母を捜しに行く気はないかぼくにたずねた。ぼくは、ふたりが強くなるまで待っていたのだ、そのときは行こうと言った。ふたりはいつでも行く準備はできていると言った。ぼくはふたりに、船の準備をして、行ったほうがいいと言った。息子たちは言った。『めいめい一艘ずつ船をもつことにしましょう』それにしたがって準備した。めいめいそれぞれの道を行った。

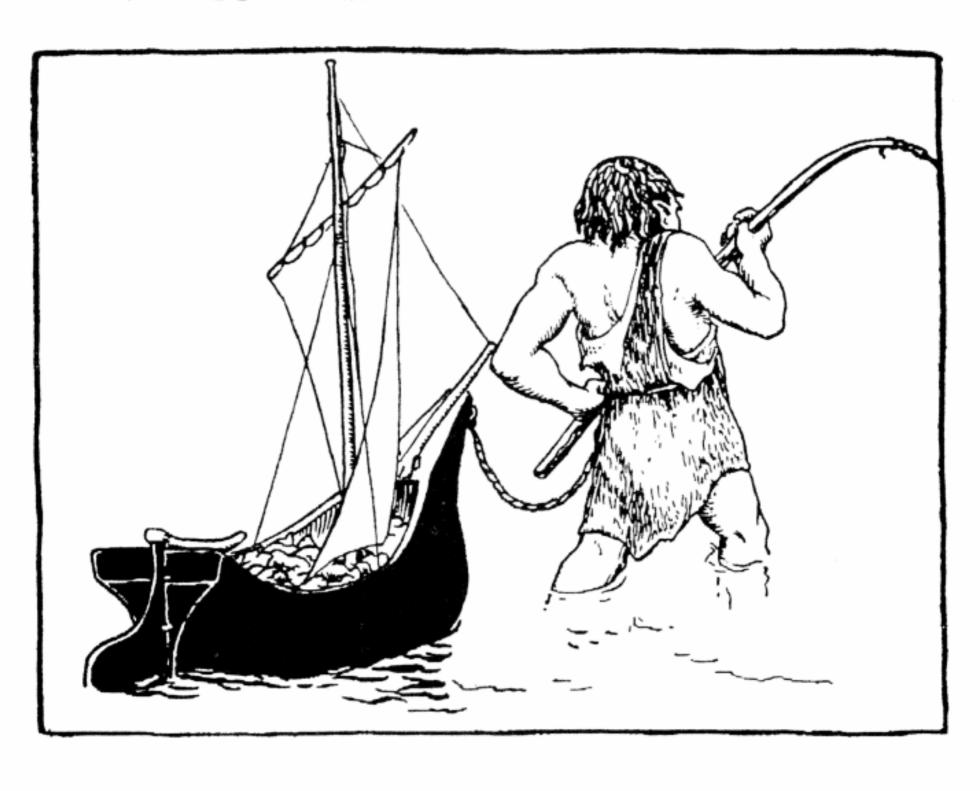
「ある日偶然陸のすぐ近くを通りかかると、大きな戦争をやっていた。ぼくは弱者

を助けずには戦争を見逃さないと誓いをたてていたので、上陸すると、弱い方に味方して戦った。短槍で一人残らず首をはねた。疲れたので、死体の間に横になって眠った。

「ケイン、薬草の軟膏をつけて治してやるからおまえの足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ローマの大教会のミサを聞いてから、ノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイが言った。

「ケインの足だろうと、だれの足だろうと、ぼくがロイの息子のケインだろうが、あるまいが、ぼくは足を出して軟膏をつけて治してもらうから、きみが宇宙王の娘を捜しだしたのか、家に帰ったのか、どうなったのか教えてくれ」

「おまえは不幸だ」と大男は言った。「話は長くて語りきれない。だがべつの短い話をしてやろう。眠りから覚めると、一艘の船がぼくの寝ているほうへやってくるの

が見えた。一つ目の大きな巨人がその船を引いていた。海は巨人の膝までしかなかった。巨人は大きな強い釣り糸のかかった大きな釣り竿を持っていた。釣り糸の先にはとても大きな針があった。巨人は釣り糸を岸に投げ、針を死体に引っかけ、船の上に釣りあげていた。巨人はこの作業をくりかえして船に死体の荷を積んだ。巨人は一度ぼくの服に針を引っかけた。しかしぼくが重かったので、釣り竿で船までもちあげられなかった。巨人は自分で岸に来て、ぼくをかかえて船に運んだ。ぼくはいままでにない窮地においった。巨人は船を引っ張って出発した。大き

な切り立った崖に着いた。崖の前面に巨人の大きな洞穴があった。見たこともないような美しい女が出てきて、洞穴の入り口に立った。巨人は死体を女にわたした。女はそれを受け取って洞穴に入れた。一体受け取るごとに女はきいた。『生きてる？』とうとう巨人はぼくを取って、女にわたして言った。『それはべつにしておけ。大きいから、わしが出かける最初の日の朝めしにしよう』巨人のぼくにたいする宣告を聞いたときは最悪だった。巨人は夕めしに死体をたらふく食べると、横になって寝た。彼がいびきをかきはじめると、女が来てぼくに話しかけた。彼女は王の娘だが、巨人にさらわれて逃げだす方法がないのだと言った。『わたしはもう』と彼女は言った。『あと二日で巨人といるのが七年になります。わたしたちの間には抜き身の刀をおいています。七年たつまでは巨人はそれ以上は近寄らないのです』ぼくは彼女に言った。『巨人を殺す方法はないのですか？』『容易には殺せませんが、殺す方策を考えだしてみましょう』と彼女は言った。『あの先の尖った棒を見てください。あれを巨人は死体を焼くのに使っています。真夜中に残り火を集めて、棒を入れ赤く焼いてください。それから行って、棒を力いっぱい巨人の目に突きさしてください。巨人に捕まらないように気をつけて。もし捕まれば蚊みたいに小さく潰されてしまいます』ぼくは残り火を集めに行って、そのなかに棒をいれて、赤く熱すると、巨

人の目に突きさした。彼のあげた叫び声で岩が割れたかと思った。巨人はとびあがって、洞穴のなかじゅうぼくを追いかけて捕まえようとした。ぼくは洞穴の床にあった石を拾って、海に投げた。ポチャンと音がした。棒はずっと目に食い込んだままだった。海に飛び込んだのはぼくだと思って、巨人は洞穴の入り口へかけていった。棒が洞穴のドアの柱に当たり、頭蓋骨がはずれた。巨人は倒れて冷たくなり死んだ。女とぼくは七年と七日がかりで巨人をこまかく砕き海に捨てた。
「ぼくは女と結婚して、男の子が生まれた。七年後に、ふたたび出発した。
「ぼくは自分の名前を刻んだ金の指輪を女に与えた。男の子が大きくなって、父であるぼくを捜しに旅立つ日のためだ。
「ぼくは戦った場所をめざして行った。短槍がおいた場所にあった。それがあったのと船が無事だったのとでうれしかった。そこを出て一日航海して、きれいな湾に入り船を岸に引き上げた。そこに小屋を建てて夜はそのなかで寝た。あくる日起きると、一艘の船がぼくのいるところめざしてまっすぐ入ってくるのが見えた。船が陸地に着くと、大きな強い勇士が出てきて、船を引き上げた。ぼくの船に勝りもしない負けもしない船だった。ぼくは彼に言った。『ぼくの船のそばに船を引き上げるとはなんともあつかましい奴だな？』『ぼくはマカンーナースカヤージャイリカだ』と

その勇士が言った。『ノルウェー王の息子、マク・コナハーのために宇宙王の娘を捜しに行くところだ』ぼくは彼にあいさつして歓迎した。そして言った。『わしはおまえの父だ。おまえが来てよかった』ぼくたちはその夜小屋のなかで楽しく過ごした。

「つぎの日起きたとき、べつの船がぼくのいる場所めざして来るのが見えた。大きな強い英雄が出て来て、ぼくたちの船のそばに船を引き上げた。ぼくたちの船に勝らずとも、すこしも見劣りしなかった。『われわれの船のそばに船を引き上げるとはなんともあつかましい奴だな？』とぼくは言った。『ぼくは』と彼は言った。『ウェット・マントルの息子だ。ノルウェー王の息子、マク・コナハーのために、宇宙王の娘を捜しに行くところだ』『わしがおまえの父だ。これがおまえの兄だ。おまえが来てよかった』とぼくは言った。二人の息子とぼくはその夜小屋のなかで一緒に過ごした。

「あくる日起きると、またべつの船がぼくのいる場所めざして来るのが見えた。大きな強い勇士がとびおりて、ぼくたちの船のそばに船を引き上げた。ぼくたちの船より高くはなかったが、低くもなかった。ぼくは彼のところへおりて行って、言った。『われわれの船のそばに船を引き上げるとはなんともあつかましい奴だな？』『ぼくは秘密の息子だ』と彼は言った。『ノルウェー王の息子、マク・コナハーのために

宇宙王の娘を捜しに行くところだ』『なにか証拠の品物を持っているか？』とぼくはきいた。『持っている』と彼は言った。『父に託されて母がぼくに与えた指輪がここにある』ぼくはその指輪を手に持って、ぼくの名前を見た。疑いの余地はなかった。ぼくは彼に言った。『わしがおまえの父だ。ここにいるのはおまえの二人の異母兄だ。われわれは宇宙王の娘を捜しに行くのにますます強力になった。三重ねより四重ねが強い』ぼくたちはその夜小屋のなかで楽しく気持ちよく過ごした。
「あくる朝予言者に会った。彼は言った。『あなたがたは宇宙王の娘を捜しておられる。どこにいるか教えてあげましょう。彼女はブラックバードの息子と一緒にいます』
「マカンーナースカヤージャイリカは行って、百人の修練を積んだ英雄に戦いを挑み、戦わないならば、宇宙王の娘を引き渡せと言った。百人が出てきた。双方が戦いをはじめ、彼は一人のこらず殺した。ウェット・マントルの息子はべつの百人に戦いを挑み、戦わないならば、宇宙王の娘を引き渡せと言った。彼はその百人を短槍で殺した。秘密の息子はさらに百人の英雄との戦いかあるいは宇宙王の娘を要求した。彼は一人のこらず短槍で殺した。それからぼくが戦場へ出て、盾をたたいて挑戦の声をあげ、町じゅうを震わせた。ブラックバードの息子には送り出す兵士がもう一

人もいなかった。彼は自分で出てこなければならなかった。彼とぼくはたがいにかかって行った。ぼくは短槍を引いて彼の首をはらった。ぼくは城のなかに入って行って、宇宙王の娘をつれ出した。ぼくにかんすることの顚末は以上のとおりだ。

「ケイン、薬草の軟膏を塗って治してやるからおまえの足を出せ。薬草の軟膏で湿布して冷やす。虫に吸わせて血を出す。ぼくは猛烈に急いでいる。ぼくはローマの大教会でミサを聞いてからノルウェーに帰って寝なけりゃならんのだ」

ケイン・マク・ロイは足を出した。大男は薬草の葉をつけて治してやった。足は治った。大男はケインを島から陸へつれて行って、王のところへ帰した。

かくしてオクロニサートは妻を得て失い、かくてロイの息子、ケインの足をヒルに吸わせるにいたったのである。

訳注　（1）ブリーン・ボルー――デーン人と戦って勇名をはせたアイルランドの王。一〇一四年ダブリンの近くでデーン人を撃破した。
（2）イニスターク島――アイルランド西部メーヨー州沖にある。

コナル・イエロウクロウがした怖い話

　コナル・イエロウクロウはエリンでは筋金入りの領臣[1]で、息子が三人いた。当時エリンの五国にはそれぞれ王がいた。コナルの近くの王の子どもたちがたまたまコナルの子どもたちと殴りあいのけんかをした。コナルの子どもたちが勝って、王の長男を殺してしまった。王は使者を送ってコナルを呼びつけて言った。「おう、コナル！　いったいどうしておまえの息子たちはわしの長男を殺すほど攻めまくったのだ？　だが、おまえに復讐したところで、なんの益にもなりゃしない。だから、おまえに課題を出そう。おまえがそれをすれば、しつこく復讐するようなことはしないぞ。おまえとおまえの息子たちがノルウェー王の茶褐色の馬をつれて来れば、息子たちの命は助けてやる」
「はぁ」とコナルは言った。「王さまのためとあらば、なんでもいたします。息子たちはなにものも恐れはいたしません。王さまのご要望はむずかしいものではございい

ますが、わたしの命や息子たちの命を失うよりは、王さまの御意にそいたいと存じます」

　こう言ったあとコナルは王のもとを去り、家へ帰った。家に帰ると、彼はとても思い悩んだ。床についてから妻に王から出された課題のことを話した。妻は二度と会えるかどうか分からないので、彼と離れるのをとても悲しがった。

「あぁ、あなた」と妻は言った。「どうして王さまに息子たちを好きなようにしていただかなかったのですか？　あなたに二度と会えるかどうか分からないから、行ってほしくありません」

　あくる朝起きると、コナルと息子たちはノルウェーにむけて旅立った。彼らは休みもせず波をかきわけて進み、ノルウェーに着いた。着いてはみたが、どうしたらいいか分からなかった。父親は息子たちに言った。「ここで、王さまご用達（ようたし）の粉屋の家を探そう」

　王の粉屋の家に入って行くと、今夜は泊まっていけと引き止められた。コナルは、自分の子どもたちと王の子どもたちがけんかをして、自分の子どもたちが王の息子を殺したので、王の機嫌を害（そこ）なわないためにはノルウェー王の茶褐色の馬を持って行くよりしかたがないのだという話を粉屋にした。

「頼むから、馬を手に入れる手はずをととのえてくれないか。お礼はたっぷりするぞ」
「そんなものを取りに来たとはあんたも馬鹿だな」と粉屋は言った。「王さまはあの馬がいたくお気に召しているから、盗みでもしないかぎり手に入りっこないさ。だが、あんたがいい手を考え出したら、黙っていてやるよ」
「わしにはこういう考えがあるんだが」とコナルは言った。「おまえさんは毎日王さまのところで働いているから、おまえさんと使用人とでわしと息子たちを四つのふすま袋に入れてくれないか」
「それはいい考えだ」と粉屋は言った。
　粉屋は使用人に話して、そのとおり指示した。使用人はコナル父子を四つの袋に入れた。王の召し使いがふすまを取りに来て、四つの袋を持って行き、馬の前で中身を出した。召し使いはドアをロックして行った。
　息子たちが起き上がって、茶褐色の馬に手をかけようとしたとき、コナルが言った。
「やめろ。ここから出るのはむずかしい。穴を四つ掘ろう。おれたちの物音を聞きつけられたら、隠れるのだ」穴を掘ってから、馬に手をかけた。馬は全然馴らされ

ていなかったので、馬小屋じゅうにすさまじい音をたてた。王が音を聞きつけた。
「わしの鹿毛(かげ)だ」と王は召し使いに言った。「どうしたのか見てこい」
　召し使いは出て行った。コナルと息子たちは召し使いが来るのを見て、穴に隠れた。召し使いは馬をしらべたが、なんともなかった。それでもどって行って王にそう報告した。王は、なんでもないのなら、休むがよいと言った。召し使いが行ってしまうと、コナルと息子たちはまた馬に手をかけた。さっきの音もすさまじかったが、こんどの音はその七倍もあった。王はまた召し使いを呼んで、きっと鹿毛になにかあったのだと言った。「行って、よくしらべよ」召し使いは行った。コナル父子は穴に隠れた。召し使いはていねいにしらべたが、なにもなかった。もどってそう報告した。
「それはよかった」と王は言った。「行って、休むがよい。もしこんど聞こえたら、わしが行こう」
　コナルと息子たちは召し使いが行ったと分かると、また馬に手をかけて、一人がつかまえた。馬は前二回もすごい音をたてたが、こんどはさらにものすごかった。
「こんどはわしが行く」と王は言った。「だれかがわしの鹿毛にわるさをしているのだ」王は急いでベルを鳴らし、従僕を呼ぶと、馬がたいへんだと馬屋番に告げさせ

た。王は、やって来た馬屋番といっしょに行った。コナルと息子たちは一行が来るのに気づいて、穴に隠れた。
　王は用心ぶかい男だったので、馬がどこで騒いでいるかしらべた。
「気をつけろ」と王は言った。「馬小屋の中にだれかいる。なんとしてもつかまえてやるぞ」
　王は人の足跡をつけていって、コナル父子をみつけだした。みんなコナルを知っていた。彼はエリンの王の重要な領臣だったのだ。王はコナル父子を穴からひっぱり出して言った。「おぉ、コナル、ここにいたのはおまえだったのか？」
「さようでございます、王さま、コナルにまちがいございません。必要にせまられてここへやってまいりました。王さまの名誉にかけてお許しください。どうぞ、ご慈悲を」コナルは自分の身に起こったことを話し、エリンの王に鹿毛を持っていかなければ、息子たちが死刑になると言った。「お願いしてもちょうだいできないと分かっていましたから、盗もうと思いました」
「なるほど、コナル。もっともじゃ。まぁ、入れ」と王は言った。王は夜警に、コナルの息子たちの見張りをして、食事を出すよう命令した。その夜、コナルの息子たちには厳重な見張りがつけられた。

「ところで、コナル」と王は言った。「息子がなん人も絞首刑になるのを見るよりつらい目にあったことがあるか？　だが、おまえはわしに慈悲を乞い、必要に迫られて来たと言っておるから、おまえを絞首刑にするようなことはしない。同じように困った目にあったことがあれば、それを話してみよ。話せば、おまえの末息子の命は助けてやるぞ」

「これとおなじくらいつらい目にあった話をいたしましょう」とコナルは言った。「むかしわたしがまだ若かったころ、父は土地をたくさん持っておりました。一歳牛を放った牧場がたくさんありました。そのうちの一頭が子を産んだので、それをつれて帰るように父から言われました。牛を探してつれて帰っておりますと、雪がひどく降ってきました。牝牛と子牛をつれて牛飼い小屋に入り、雪が止むのを待っていました。ところが、なんと十一匹の猫とその頭領らしい狐色の片目の大猫が入ってきたではありませんか。正直言って、わたしはこいつらと一緒にいるのは厭でした。『はじめろ』と頭領猫が言いました。『なぜ黙っている？　コナル・イエロウクロウに猫のゴロゴロ（クロナン）歌を歌ってきかせろ』猫がわたしの名前を知っていたのでおどろきました。猫どもが歌うと、頭領が言いました。『さぁ、コナル、猫がおまえにクロナンを歌って聞かせたんだ、代金を払え』『だけど』とわたしは言いました。『あ

んたに払うものなんかなにも持たない。あの子牛でも受け取ってくれ』わたしがこう言うとすぐ十二匹の猫は子牛におそいかかりました。子牛はあっという間に食いつくされてしまいました。『演奏しろ、なぜ黙っておる？　コナル・イエロウクロウにクロナンを弾いてやれ』と頭領が言いました。たしかに、わたしはクロナンが大きらいでした。だけど、十一匹の猫は近づいてきて、クロナンを歌いまくりました！『さぁ、代金を払え』と狐色の大猫が言いました。『おまえたちもうたくさんだ』とわたしは言いました。『おまえたちに払う代金は持たないから、あの牝牛でも受け取ってくれ』猫どもは牝牛にかかって行って、牛はすぐなくなりました。「『なぜ黙っている？　コナル・イエロウクロウにクロナンを歌ってやれ』と頭領が言いました。あぁ、王さま、心底わたしは猫とクロナンが大嫌いでした。猫どもがろくでもない奴らだと分かってきたのです。クロナンを歌い終わると、猫は頭領のところへ行きました。『さぁ、代金を払え』と頭領が言いました。あぁ、王さま、本当に、わたしは払う物がありませんでしたので、『払う物はない』と言いました。猫どもはギャーギャー騒ぎました。それでわたしは家のうらの窓から飛び出しました。猫一生懸命森の中にかけこみました。あのころのわたしは足も速く、力も強かった。ザワザワと猫が追いかけてくる音がしたので、そこにあった天にもとどかんばかり

の高い木に登り、できるだけうまく身を隠しました。猫どもは森じゅうわたしを捜しまわりましたが、見つけられませんでした。みんな疲れてしまって、たがいに引き返そうと言いました。『だがな』とみんなを指揮している、狐色の片目の大猫が言いました。『おまえたちは目が二つがありながら、ちゃんと見ていないのだ。おれにはひとつしかないが、あいつが木の中にいるのが分かっておる』頭領がこう言うと、一匹の猫が木に登りました。そいつがわたしに近づいて来たので、わたしは持っていた武器を抜いて殺しました。『よぉし、わしが行く！』と片目が言いました。『仲間の敵討だ。みんな木の根元に集まって掘れ。悪者を引きずりおろせ』猫どもは木のまわりに集まって、根を掘り、最初の支根を切ると、木がゆれて倒れそうになりました。わたしは叫び声をあげました。無理もないことだったのです。森の近くに司祭がいて、十人の男をひきつれてなにごとかとしらべに来ました。司祭が言いました。『進退極まった男の叫び声がしたから、それに答えてやらねばならん』

なかでも賢い男が言いました。『また聞こえるまでじっとしていましょう』
「猫どもはまた荒々しく掘りはじめ、つぎの支根を切りました。わたしはまた叫び声をあげました。まことに弱々しいとは言えない声でした。『たしかに』と司祭は言いました。『男が窮地におちいっている――さぁ、行こう』男たちは動きだしました。猫どもは木に登り、そして三つめの支根を切ると、木は横倒しに倒れました。わたしは三度めの叫び声をあげました。屈強な男たちは急ぎました。猫どもが木を倒したのを見ると、男たちは鋤をもって襲いかかりました。男たちと猫どもの争いとなり、ついに猫が逃げました。わたしは最後の一匹が逃げるまで身動きもしませんでした。それから家に帰りました。これまででいちばん恐ろしい体験でした。明日ノルルウェー王から絞首刑にされるより猫に引き裂かれるほうが怖いです」
「おう！　コナル」と王は言った。「おまえは雄弁だ。その話で息子の命は助かったぞ。それよりももっと怖かった話をすれば、二番めの息子を助けてやろう。そうすれば息子二人の命は無事だ」
「それでは」とコナルは言った。「そうしていただく条件で、今夜牢に入れられて王さまのなすがままにされるより怖い目にあったことをお話しましょう」

「聞こう」と王は言った。

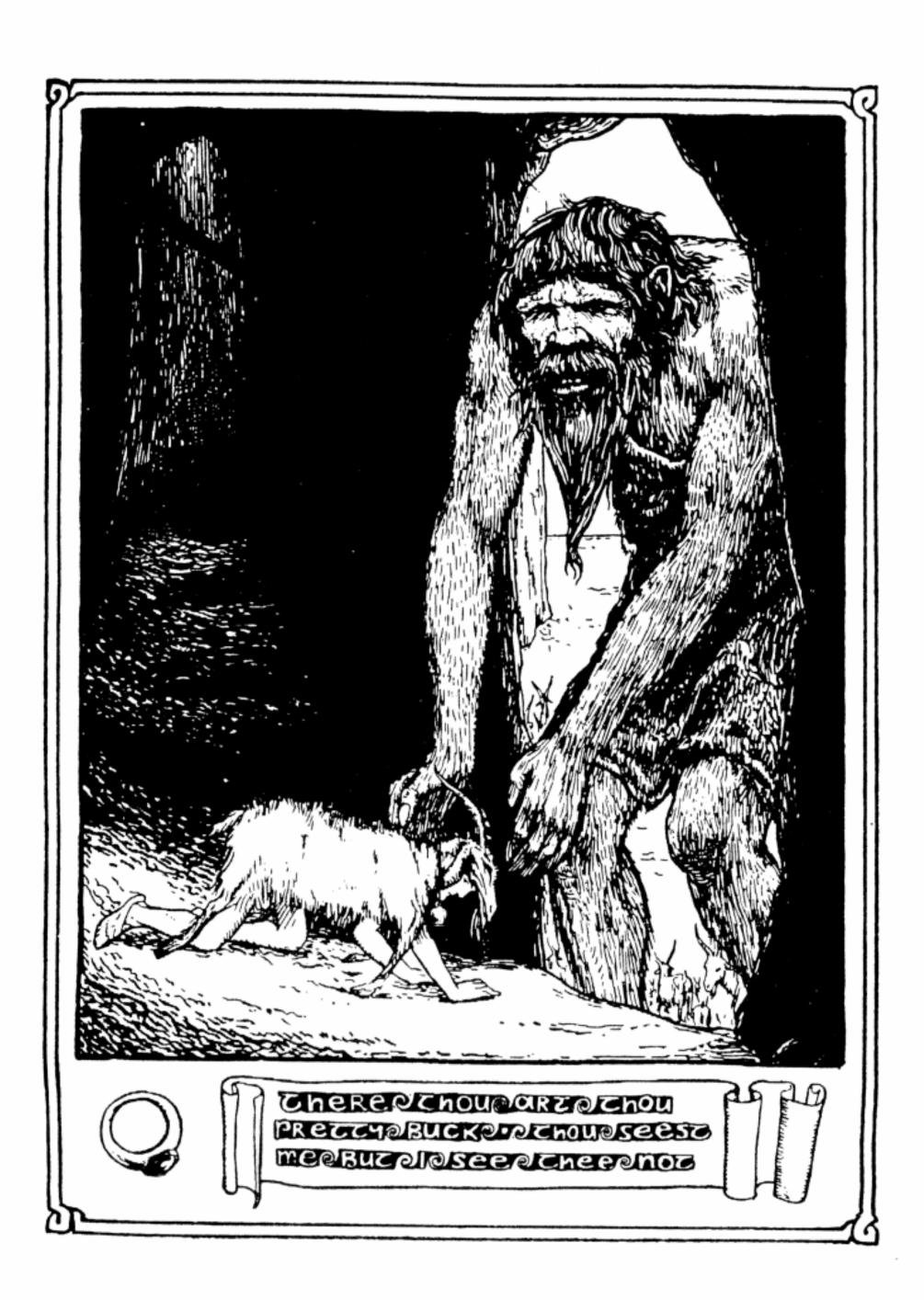
「それはわたしが」とコナルは言った。「とても若いころのことで、狩りに出かけました。父の土地は海のそばにあり、岩ごつごつの洞穴と亀裂だらけの荒地でした。海岸を歩いていると、二つの岩の間から煙がたち昇っているように見えました。なんのしるしだろうと思って、見ていると、なんとまぁ、落っこちてしまいました。そこにはヒースがいっぱい生えていたので、骨一本も皮一枚もけがひとつしませんでした。そこからどうやったら出られるか分かりませんでした。前のほうは見ないで、落ちてきた上のほうばかり見て――ふたたび上にはもどれないのだと思っていました。死ぬまでそこにいなければならないと思って恐怖におびえました。がたと大きなもの音がしました。なんと大きな巨人が雄ジカを先頭に二十四匹の山羊をつれて来たのです。巨人は雄ジカをつなぐと、わたしのほうに来て言いました。『よう！　コナル。わしのナイフはひさしい間おまえのやわらかな肉を待ちわびて袋の中でさびついておったぞ』『ふん！』とわたしは言いました。『おれをばらばらに切ってもたいしたことないぞ。ほんの一食分だけだ。ところで、おまえさん、見たところ目がひとつだな。おれは上手な医者だから、もう一方の目も見えるようにしてやるぜ』巨人は中に入って大きな釜を火にかけました。わたしがもう一方の目も

見えるようにしてやるから、湯をわかせと言ったのです。わたしはヒースを取って来て、砥石がわりにし、巨人を釜の中にまっすぐ立たせました。悪い目がよくなるように治療しているふりをして、良い目に取りかかって、両方とも悪くしてしまいました。たしかに、悪い目を見えるようにするよりは良い目をだめにするほうがやさしかったのです。

「巨人の目が全然見えなくなり、わたしが逃げてやると言うと、巨人は湯の中から飛び出して洞穴の入り口をふさぎ、目の復讐をしてやると言いました。わたしは一晩じゅうそこにうずくまって、巨人に居場所をさとられないように息をひそめていました。

「朝になって小鳥が鳴きだし、夜が明けたと分かると、巨人は言いました。――『眠っているのか？　起きて、わしの山羊を外に出せ』わたしはシカを殺しました。巨人は叫びました。『おまえはわしのシカを殺しているな』

「『ちがう』とわたしは言いました。『ロープがかたいから、はずすのに手間取っているのだ』わたしは山羊を一匹放しました。すると、巨人はそれを愛撫しながら言いました。『おまえはふかふか毛の白山羊だな。おまえにはおれが見えるが、おれにはおまえが見えないんだ』わたしは山羊を一匹ずつ放しながら、シカの皮をはぎま

There thou art thou
pretty buck thou seest
me but I see thee not

した。最後の山羊が出て行くまえに皮はすっかりはげて袋のようになりました。そこでわたしはシカの足のかわりにわたしの足を入れ、前足のかわりに手を入れ、頭のかわりにわたしの頭を入れて、頭の上には角をつけて、巨人にシカだと思わせました。わたしは外に出ました。出て行こうとしていると、巨人がわたしに手をかけて、言いました。『おまえ、かわいいシカだな。おまえにはわしが見えるが、わしにはおまえが見えない』外に出て、見晴らしがよくなると、ぁぁ、王さま、ほんとうにうれしくなりました！　外に出て、皮を脱ぎすて、巨人に言いました。『ざまぁみろ、外に出たぞ』

「『あぁ！』と巨人は言いました。『よくもやりやがったな？　おまえは丈夫だから、出られたのだ。ここに指輪があるから、おまえにやる。取っておけ。役にたつぞ』

「『おまえからは受け取らない』とわたしは言いました。『投げてよこせ。自分で取るから』巨人は指輪を平らな地面に投げました。わたしは指輪を拾って指にはめました。巨人が『ぴたっとはまったか？』ときいたので、わたしは『はまった』と言いました。そうすると、巨人が言いました。『指輪よ、おまえはどこにいる？』するど、指輪が言いました。『ここにいる』巨人は指輪の声のするほうへどんどんやって来ました。それで、わたしは前よりもひどい事態になったと思いました。わたしは

短剣を抜きました。指を切り落として、できるだけ遠くの深い海に投げやりました。巨人は叫びました。『指輪よ、おまえはどこにいる？』すると、指輪が、海の底から答えました。『ここにいる』巨人は指輪を追って飛び込み、海に入ってしまいました。巨人が溺れるのを見たときは、王さまがわたしの命と二人の息子の命とをお許しになって、もうわたしを苦しめないとおっしゃったときのように、大喜びしました。

「巨人が溺れ死ぬと、洞穴の中に入って、巨人が持っていた金や銀を全部取って、家に帰りました。家に帰ると、みんな大喜びしました。ごらんください、その証拠にいまもこの指はございません」

「ほんとうに、コナル、おまえは話し上手で頭がいい」と王は言った。「たしかにおまえの指はない。おまえの二人の息子は助かったぞ。だが、明日息子が絞首刑になるのを見るよりつらい目にあった話をすれば、長男の命を助けてやろう」

「それから、父が」とコナルは言った。「嫁を見つけてくれ、わたしは結婚しました。狩りに行きました。海辺を歩いていると、海の真ん中に島が見えました。そこに舟があって、前と後にロープが引っ張ってあり、中には貴重な品がたくさん積んでありました。いくらか分け前にあずかろうと思って舟をしらべました。片足を舟

に入れると、もう一方の足は地についているのに、頭を上げて見ると、なんと舟は沖に出てどんどん進んで島に着きました。舟からおりると、舟はもとのところにもどって行きました。どうしたらいいのか分かりませんでした。島には食べものも着るものもなく、家らしいものもありませんでした。丘の上に出ました。それから谷におりました。谷底に子どもを連れた女が見えました。女は裸の子どもを膝の上にのせ、ナイフを手にしていました。女はナイフを赤ん坊ののどに突きさそうとしました。すると、赤ん坊が女の顔を見て笑いました。女は泣きだし、ナイフをうしろに投げ捨てました。わたしは、味方ではなくて、敵の領地に入りこんだのだと思いました。大きな声で女にききました。『ここでなにをしているのだ？』すると女が言いました。『なんでここに来たのです？』わたしはなんで来たかを逐一話してやりました。『じゃあ』と女は言いました。『わたしが来たのといっしょですわ』女はいま自分が住んでる場所へわたしを案内しました。中に入ると、わたしは女にききました。『どんな事情で子どもの首にナイフをあてていたのだ？』『この島の巨人に赤ん坊を食べさせないと、わたしの前途はないのです』ちょうどそのとき、巨人の足音がしました。『どうしよう？　どうしよう？』女は泣きました。大釜のほうへ行ってみると、さいわい熱くなかったので、ちょうど巨人が入って来たとき、わたしは

その中に入りました。『赤ん坊は煮えたか？』と巨人は叫びました。『まだです』と女は答えました。わたしは釜の中から『ママ、ママ、ぼくもうすぐ煮えるよ』と叫びました。すると、巨人は大声で『ハイ、ホウ、ホガラッチ』と笑い、釜の下に薪をくべました。

「わたしは早く出ないとやけどしそうでした。運命はわたしに味方して、巨人は釜のそばで寝てしまいました。釜の底でわたしはやけどしました。巨人が眠ったのに気がつくと、女は蓋の穴にそっと口をつけて、わたしに生きているかききました。わたしは生きていると答えました。頭をあげると、蓋の穴が大きかったので、するりと通り抜けました。尻を持ち上げるまではうまくいきました。尻の皮が底に残りましたが、外に出ました。釜から出たものの、どうしていいのか分かりませんでした。女は巨人を殺せるのは巨人の武器しかないと言いました。わたしは巨人の槍を引き抜きにかかりましたが、巨人が息を吸うたびにのどの奥に吸い込まれるのではないかと思い、息を吐くたびにはるか遠くのもとの場所に吹きもどされるのではないかと思いました。しかし、いろいろと災難はふりかかりましたが、巨人から槍を抜き取りました。わたしはまるで大風のさなか、わら束の下にいるようなものでした。槍が扱えなかったのです。顔の真ん中に目がひとつという恐ろしい形相の巨人を、

わたしのような者が攻撃するのはあまり楽しいことではありませんでした。わたしはできるだけ上手に矢を引いて、巨人の目に当てました。巨人はこれを感じると、頭を上げたので、矢尻が洞穴の天井にあたり、矢が後頭部まで突き抜けました。巨人はその場に倒れ冷たくなって死にました。あぁ、王さま、お分かりでしょう、いかにわたしが喜んだか。わたしと女は外のきれいな土地に出て、夜を過ごしました。わたしは乗って来た舟を取りに行くと、荷はもとのままあり、女と子どもを乗せて陸まで運びました。そして家に帰りました」

このときノルウェー王の母が火をくべながら、コナルが子どもの話をするのを聞いていた。

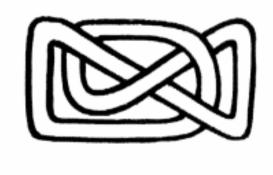
「あなたでしたか？」と王母は言った。「あのときの人は」

「そうです」とコナルは言った。「わたしでした」

「まぁ！　まぁ！」と王母は言った。「あれはわたしだったのですよ。あなたが命を救ってくれた子どもがこの王です。あなたは命の恩人ですわ」彼らは大喜びした。

王が言った。「おう、コナル。おまえはいろいろ大災難をくぐり抜けて来たのだなぁ。もう鹿毛はおまえのものだぞ。わしの宝蔵のいちばん貴重な宝を袋にいっぱいつめて行くがよい」

その夜はみんな寝た。コナルは早起きしたが、王母はそれよりも早く起きて、準備をしてくれた。コナルは鹿毛と金、銀、宝石のいっぱいつまった袋をもらった。コナルと三人の息子たちは喜びの国エリンへ帰った。金、銀は家におき、馬をつれて王のもとへ行った。王とコナルは仲直りした。コナルは妻のところへ帰り、宴会の準備をした。それこそまさに宴会らしい宴会だったよ、息子に弟。

訳注（1）領臣―封建制度下で土地を所有していた。

悲しみの始まり

悲しみの終わり

ディアドラの悲話

むかし、アイルランドにマルカム・ハーパーという男がいた。この男は正直な善人で、かなり裕福だった。妻はいたが、子どもはいなかった。マルカムは予言者が町へ来たと聞いて、根がまっすぐな善人だったから、予言者が家の近くへ来ればいいのにと思った。呼ばれて来たのか、自分から来たのか、予言者はマルカムの家へやって来た。

「おまえさんは予言をするのかね？」

「はい、すこしばかり。予言をご希望で？」

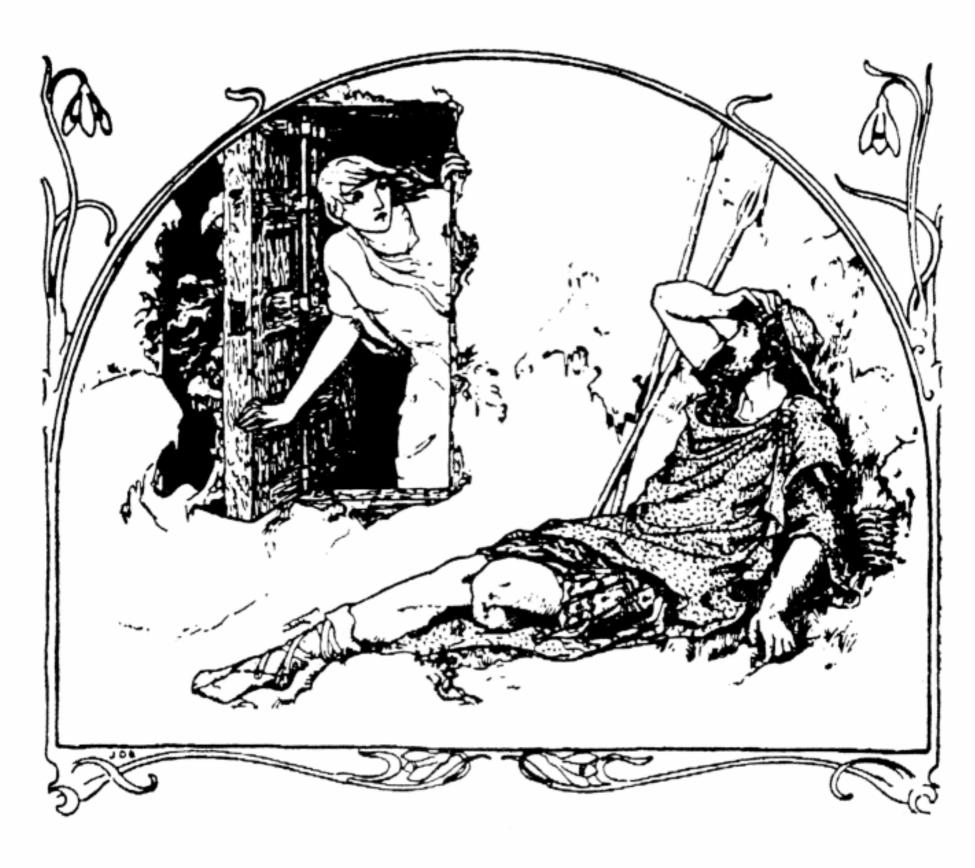
「では、わしのために予言をするのがいやじゃなかったら、すすんでしてくれるのだったら、おまえさんに予言をしてもらいたい」

「よろしい、いたしましょう。なんの予言をおのぞみで？」

「そうだな、わしがしてもらいたい予言というのは、教えてもらえるものなら、わ

しの運命がどうなるかということだ」
「では、そとに出てきます。もどってからお伝えします」
そこで、予言者は家のそとへ出て行って、まもなくもどって来た。
「さて」と予言者は言った。「わたしの予知能力で分かりましたのは、あなたの娘御のためにエリンの時代と民族がはじまっていらいのおびただしい血が流されることでございます。もっとも有名な三人の英雄が娘御のために首を失います」
しばらくして、マルカムに娘が生まれた。彼は自分と乳母いがいは家に人を寄せつけなかった。彼は乳母に頼んだ。「この子が人の目にふれない、この子のことが人の耳に入らない遠くはなれた隠れ家でこの子を育ててくれないか？」
女が引き受けたので、マルカムは三人の男を雇い、だれにも知らせずまた気づかれないように、人里はなれた大きな山へ彼らをつれて行った。そこの円い緑の塚の真ん中に穴をあけ、その穴にはおおいをかけて、そこにわずかの人間が住めるようにした。その作業が終わった。
ディアドラと養母はだれにも知られず、疑われず、なにごともなく山のなかの小屋に暮らして、ディアドラは十六歳になった。ディアドラは白い若木のように成長した。沼地のトウシンソウのようにまっすぐで美しかった。彼女はアイルランド広

しといえども、いちばん姿がよく、器量がよく、気立てがよかった——まえはどんな顔色だったにせよ、顔をみつめられると、ぽーっと真っ赤になるのだった。
　ディアドラをあずかっている女は自分のもっている知識と技術をすべて彼女に教えてやった。根から生えるどんな草の葉も、森でさえずるどんな小鳥でも、天から光るどんな星も、ディアドラが知らない名前はなかった。だが、ひとつだけ、養母はディアドラにこの世の男と話をさせたり、関わりをもたせたくなかった。しかし、くろい雲がたれこめ、荒れ模様の陰気な冬の夜、ひとりの狩人がつかれて山道を歩いていた。道に迷って仲間とはぐれてしまったのだ。男はつかれて山をうろうろしていたが、眠気におそわれたので、ディアドラが住んでいる美しい緑の丘のそばに横になり、眠ってしまった。男は飢えのためと動きまわったのとで気を失い、寒さにかじかんで、深い眠りにおちいった。ディアドラのいる緑の丘のそばで寝ていて、男は気になる夢を見た。妖精が音楽を奏でている砦のなかで暖まりたいと思った。狩人は夢のなかで叫んだ、だれかなかにいたら、一生のお願いだから、入れてくれと。ディアドラはその声を聞いて、養母に言った。「あら、お母さん、あれはなにが叫んでいるのでしょう?」「なんでもないよ、ディアドラ——空の小鳥が迷って、おたがい捜しあっているだけだよ。こんもりとした林に行かせようよ。ここには小鳥

JDB
Deirdre.
O Nurse what cry is that?
Only the birds of the air calling one to the other.—
There is no home for them here
Let them go by to the thicket

のかくれ場はないもの」「まぁ、お母さん、小鳥が後生だからなかに入れてとたのんでいるわ。お母さんはいつもおっしゃるわ、神の御名においで頼まれたことはなんでもすべきだって。寒さでかじかんでいる小鳥を入れてやらないで、飢え死にさせるのなら、お母さんの言葉や信仰はたいしたことないのね。でもわたしはお母さんから教わった言葉や信仰を信じているから、自分で小鳥を入れてやるわ」

そしてディアドラは立ち上がって、とりはずしのできるド

アからかんぬきをはずすと狩人をなかに入れた。彼女は入って来た男のために、すわる場所に椅子を、食べる場所に食べものを、飲む場所に飲みものをもって来た。
「あぁ、そこに入って来た人、一生のお願いだから、口をきかないで！」と年配の女が言った。「いんうつな冬の夜に家があって暖炉で暖まれたら、口を閉じて、舌を静かにさせておくのはたいしたことではないでしょう」
「分かりました」と狩人は言った。「そうしましょう――口を閉じて、舌を静かにさせておきましょう。ぼくはこの家に入れてもらって、あなたのもてなしを受けるのですから。だがあなたの父上と祖父君の手にかけて、あなたご自身の両手にかけて誓いますが、この世のだれかほかの人があなたがここに隠しているこの美しい人を見たら、きっとその人はあなたとこの美人をほうってはおかないだろう」
「あなたはだれのことをおっしゃっているのですか？」とディアドラがきいた。
「よろしい。お話しましょう、娘さん」と狩人は言った。「それはウシュネの息子ヌーイシュと、彼の二人の兄弟アレンとアーデンです」
「もし見かけたら、その人たちはどんな様子をしていますか？」
「そう、見たところこの男たちの顔と姿形は」と狩人が言った。「髪は烏の黒い色、肌は波間に漂う白鳥の白い色、頬はまだらの赤子牛の血の色、足の速さと跳躍のみ

ごとさは急流をのぼる鮭と灰色の山腹を走るシカそのもの。ヌーイシュの背丈はほかのエリン人より頭ひとつ高い」

「そんな男たちのことはどうでもいいから」と養母が言った。「ここから出て、べつの道へ行っておくれ。光と太陽の王よ！　ほんとうに誓って、あなたとあなたを入れた娘を恨みます！」

狩人はそこを出ると、まっすぐコナハー王の宮殿へ行った。もしおさしつかえなければ、王にお話したいととりつがせた。王は伝言に応じて男と話しに来た。「おまえの旅の理由はなんだ？」と王は狩人にきいた。

「王さま、ひとつお耳に入れたいことがございます」と狩人は言った。「わたくしはエリン最高の美女を見ましたので、そのことをお話しにまいりました」

「その美女とはだれだ？　おまえは見たというが、おまえが見るまではだれも見たことはないその女にどこに行けば会えるのだ？」

「たしかに、わたくしは見ました」と狩人は言った。「しかし、わたくしは見ましたが、女がどこに住んでいるかわたくしから聞き出さないかぎりだれも女には会えません」

「では、女の住まいへわしをつれて行ってくれるか？　つれて行けば、ほうびは知

らせた分とあわせてたっぷりとらせよう」と王が言った。
「はい、王さま、ご案内いたしましょう、先方はあまりのぞんでいないようでございますが」と狩人は言った。
アルスター王コナハーは側近の者を呼びにやって、自分の目的を話した。岩穴の小鳥の歌や林の鳥の音楽は朝が早い。それよりも早くアルスター王コナハーはさわやかでおだやかな五月の心地よい薄明かりの夜明け、わずかばかりの親しい友とともに起きた。ディアドラのいる緑の丘から彼女をつれて来ようと一行が進む道には、木にも花にも茎にも露がしとどに宿っていた。出発したときはしなやかに跳び敏捷な足どりの若者たちも、道程が遠く、足場がわるいために、小屋についたときは足もともおぼつかなく、ふらふらとよろめいた。「さぁ、むこうの、あの谷底に女の住んでいる小屋がありますが、わたくしはこれいじょう母親には近づきたくありません」と狩人は言った。
コナハーは側近とともにディアドラの住んでいる緑の丘までおりて行き、小屋の戸をノックした。養母は答えた。「王さまの命令か王さまの軍隊でないかぎり、今夜は小屋からでられません。わたしの小屋の戸を開けさせようとなさっているのはどなたかお聞かせ願えればありがたいのですが」「わしだ。アルスター王のコナハーだ」

かわいそうに養母はドアのところにいるのがだれだか分かると、いそいで立ち上がり、王と入れるだけの従者をなかに入れた。
　王は捜し求めて来た女を目の前に見たとき、ディアドラのように美しい女は昼の間も夜の夢でも見たことがないと思った。彼は心臓全体の重みの愛を彼女に与えた。ディアドラは英雄たちの肩にかつがれ、彼女と養母はアルスターのコナハー王の宮廷につれて来られた。
　コナハーは彼女を愛していたので、彼女がいやでも応でも即刻その場で結婚したいと思った。だが彼女は王に言った。「わたくしは一年と一日の猶予をいただきとうございます」彼は言った。「それは許そう、むずかしいことだが。一年たったらかならず結婚すると約束するなら」彼女は約束した。コナハーは女の家庭教師と、ディアドラと寝起きをともにし、あそび相手や話し相手になる陽気で慎ましい美しい侍女を数人つけてやった。ディアドラは女としての勤めや妻としての分別をわきまえていた。コナハーはこれほど気にいった女を自分の目で見たことはないと思った。
　ディアドラと侍女たちはある日家のうしろの丘のうえで、景色をたのしみながら日光浴をしていた。すると、旅をしている三人の男がこちらへ来るのが見えた。ディアドラはやって来る男たちを見て、不思議に思った。男たちが近づいたときディ

アドラは狩人のことばを思い出した。彼女は思った、これがウシュネの三人の息子なのだわ、こちらがヌーイシュ、エリンじゅうの男より頭ひとつ分だけ高いから。三人兄弟は丘のうえの若い娘たちに注意もはらわず、目もくれず、通りすぎた。とつぜん、ヌーイシュへの愛がディアドラの心を襲ったので、彼のあとを追わずにはいられなかった。彼女は衣服の紐をしめると、侍女たちはそこにのこしたまま、丘のふもとを通りすぎた男たちのあとを追った。アレンとアーデンはアルスター王コナハーの女のことを聞いていた。もし兄のヌーイシュがその女を見れば、とくに女は王と結婚していないから、彼女を自分のものにするだろうと、彼らは思った。彼らは女が来るのに気がついて、まだ先はながいのに、夕暮れが迫っているから急ごうとたがいに声をかけあった。彼らは急いだ。彼女は叫んだ。「ウシュネの息子、ヌーイシュよ、わたしをおいて行くのですか？」「なんとよくとおる高い声だろう？――いままで聞いたこともないいい声だ。いままで聞いた声のなかでもっともぼくの心をうつ高い声だ」「コナハーの海白鳥の鳴き声にちがいない」と弟たちが言った。「ちがう！　あれは女の悲しい叫び声だ」とヌーイシュは言って、だれが叫んでいるのか見とどけるまではさきへ進まないと断言し、うしろをふり向いた。ヌーイシュとディアドラの目があった。ディアドラはヌーイシュに三度キスをし、弟たちに一

回ずつキスをした。ディアドラは動揺していたので、炎のように真っ赤になり、流れのそばで揺れ動くポプラのように急速に色が出てはまた消えた。ヌーイシュはこのように美しい女は見たことがないと思った。ヌーイシュは彼女いがいには、どんな物にも幻影にも生きものにも与えたことのない愛をディアドラに与えた。

それからヌーイシュはディアドラを肩にたかだかとのせ、弟たちに自分たちのペースで歩けと言ったので、弟たちは自分たちのペースで歩いた。ヌーイシュは自分がエリンにとどまるのはよくないと思った。伯父の息子のアルスター王、コナハーは、たとえ結婚していないといっても、女のことで彼の敵になってしまったのだ。そこで、彼はアルバ、つまり、スコットランドへむかった。ネス湖のそばに着いてそこに住んだ。彼は自分の家の入り口から急流の鮭を、窓から灰色の峡谷のシカを殺すことができた。ヌーイシュとディアドラとアレンとアーデンは塔に住み、そこにいる間は幸せだった。

やがて、ディアドラがアルスター王コナハーと結婚しなければならない期限がきた。コナハーは、彼女がヌーイシュと結婚していようがいまいが、剣にかけてディアドラをつれもどす決意だった。そこで彼は楽しい大宴会を準備した。彼はエリンのすみずみまで親戚の者を宴会に招く言葉を伝えた。コナハーは、たとえ自分が命

令してもヌーイシュは来ないだろうと思った。そこで心にうかんだ計画というのが、父の弟のファーハー・マク・ローを呼びにやって、彼をヌーイシュのところに使いにやることだった。彼はそうした。コナハーはファーハーに言った。「ウシュネの息子ヌーイシュに伝えてください。わたしがエリンのすみずみまでくまなく友人や親戚を招く宴会を準備している、ヌーイシュとアレンとアーデンが宴会に加わらなければ、わたしは昼は休まない、夜は眠らない、と」

ファーハー・マク・ローと彼の三人の息子は旅に出た。ヌーイシュが住んでいるネス湖のそばの塔に着いた。ウシュネの三人の息子はファーハー・マク・ローと三人の息子を愛想よく歓迎して、エリンからの知らせはなにかときいた。「おまえにとてもいい知らせを持って来た」と偉丈夫の英雄は言った。「アルスター王コナハーはエリンのすみずみにいたる友人や親戚のために豪華な大宴会を準備している。彼は足もとの大地にかけて、頭上の大空にかけて、西へ行く太陽にかけて、ウシュネの息子たち、すなわち彼の父の弟の息子たちが故国に、生まれた地に、そして宴会に戻ってこなければ、昼は休まず、夜は眠らない、と誓った。だから、おまえたちを招待するためにわれわれをよこしたのだ」

「一緒にまいりましょう」とヌーイシュは言った。

「まいります」と弟たちが言った。

しかし、ディアドラはファーハー・マク・ローと一緒に行きたくなかった。彼女はヌーイシュを彼と一緒に行かせまいとしきりに嘆願した――彼女は言った。

「ヌーイシュ、わたしは夢を見ました。その夢を解釈してください」とディアドラは言った――そして歌った。

「あぁ、ウシュネの息子ヌーイシュよ、聞け
　夢がわたしになにを教えたかを。

「南から三頭の白シカが
　海を越えて飛んできた、
その口中には蜜蜂の巣の
　蜜のしずくをふくんでいた。

「あぁ、ウシュネの息子ヌーイシュよ、聞け、
　夢がわたしになにを教えたかを。

「わたしは見た、三羽の灰色のタカが南から
　海を越えて飛んでくるのを。
その口中には赤い、赤いしずくをふくんでいた
　わたしには命よりだいじなもの」

ヌーイシュが言った。

「ディアドラよ、それは女の恐怖心、
　夜の夢にすぎない。

「あぁ、ディアドラ、もしぼくらが行かなければ、コナハーが宴会に招待した日が、ぼくらにとって不吉な日となろう」

「おまえが行って」とファーハー・マク・ローが言った。「もしコナハーが親切にしたら、おまえも親切に答えるのだ。もし彼がおまえに怒りを見せたら、おまえも彼に怒りを見せなさい。そのときはわしと三人の息子は、おまえの側につく」

「ぼくらはそうします」とデアリング・ドロップが言った。「ぼくらはそうします」とハーディ・ホリーが言った。「ぼくらはそうします」とフィアラン・ザ・フェアが言った。

「わしには三人の息子がいる。三人の英雄だ。おまえを危険や危害がおそったときは彼らがそばにいる。わしは息子たちと行動をともにする」そしてファーハー・マク・ローは武器のまえで誓った、ウシュネの息子の行く手に危害や危険がたちあらわれたら、剣やかぶと、槍や盾、刀や鎖かたびらがどんなにりっぱでも、彼と三人の息子はエリンで生きたからだに首をのこしておくようなことはしない、と。

ディアドラはアルバを離れたくなかったが、ヌーイシュとともに行った。ディアドラは滝のように涙を流して泣きながら、歌った。

「なつかしい国、かの国よ、
　森と湖の国アルバ、
汝との別れにわが胸はいたむ、
　されどわれはヌーイシュとともに行く」

ファーハー・マク・ローは、ディアドラが疑っても、ウシュネの息子たちをつれて行くまでは立ち止まりもしなかった。

　コラク舟は海に乗り出す、
　　帆を上げて。
二日めの朝は着く、
　エリンの白い岸に。

　ウシュネの息子たちがエリンに上陸するとすぐ、ファーハー・マク・ローはアルスター王コナハーに、王の望む男たちが来たから彼らに親切にするようにと伝えさせた。
「なるほど」とコナハーは言った。「わしはウシュネの息子たちを迎えにやったが、彼らが来るとは思っていなかった。だから受け入れる準備はまったくできていない。むこうの下に外国人を泊める家があるから、きょうはそこに彼らをつれて行け。わしの館はあす彼らが来るまえに準備する」
　しかし館に登って行った者は、下の外国人宿舎にいる人をどうするつもりかきけ

ないのでひさしく待ちわびた。「ノルウェー王の息子ゲルバン・グレッドナッハよ、おまえが下へ行って、ディアドラの顔色はいぜんとおなじように美しいかわしに伝えよ。もしそうなら、刀の刃と、剣の先にかけて、彼女をつれ出そう。もしそうでなかったら、ウシュネの息子ヌーイシュに彼女をあたえよう」とコナハーは言った。

ノルウェー王の陽気で魅力的な息子ゲルバンはウシュネの息子たちとディアドラが泊まっている外国人宿舎におりて行った。彼はドアの小穴からのぞいた。さて、彼が目を注いだ女はだれかに見られるといつも頬が真っ赤になるのだった。ヌーイシュはディアドラを見て、だれかがドアのかげから見ているのだと分かった。彼は目の前のテーブルからさいころをひとつ取ると、小穴から放って、陽気な伊達男ゲルバン・グレッドナッハの目を射ぬき、後頭部まで貫通させた。ゲルバンはコナハー王の宮殿に戻った。

「おまえは出て行くときは陽気で魅力的だったのに、帰って来たら、陰気で生彩がない。どうしたのだ、ゲルバン？　彼女を見たのか？　ディアドラの顔色はいぜんとおなじだったか？」とコナハー王はきいた。

「たしかに、ディアドラを見てきました。しっかりと見てきました。わたしがドアの小穴から彼女を見ておりますと、ウシュネの息子ヌーイシュがさいころを手にし

てわたしの目を射ぬきました。だが真実かけて申しますと、彼に目をとられようとも、もう一方の目でまだ彼女を見ていたいというのがわたしの本心でございました、王さまの急げとのご命令がなければ」とゲルバンが言った。

「それは本当だな」とコナハーは言った。「三百人の勇敢な英雄を外国人宿舎へくだらせて、ディアドラをここへつれて来させ、あとの者は殺させるのだ」

コナハーは三百人の血気さかんな英雄に、外国人宿舎におりて行って、ディアドラをつれて来たら、あとの者は殺せと命令した。

「追っ手が来るわ」とディアドラが言った。

「そうだ。だが、ぼくが出て行って、追っ手を阻もう」とヌーイシュが言った。

「きみではなくて、ぼくらが出て行こう」とデアリング・ドロップとハーディ・ホリーとフィアラン・ザ・フェアが言った。「父は故国へむけて発ったとき、きみを危害や危険から守ることをぼくらにまかせたのだ」最高に高貴で、最高に男らしく、最高に眉目秀麗で、美しい茶褐色の髪をした勇敢な若者たちは、激しい闘いに適した武器を身に着け、激しい試合に適した武具に身を固め突進していった。けものや鳥や爬虫類、ライオンやしなやかな四肢をもつ虎、褐色の鷲や苦しめ悩ます鷹や獰猛なクサリヘビの絵が描かれた武具はきらきらとあざやかに威勢よく炎のように輝

いた。そして若い英雄たちは追っ手の隊をすっかり打ち倒した。
コナハーは急いで外に出て、怒って叫んだ。「そこの闘いの場でわしの部下を殺したのはだれだ？」
「ぼくたちファーハー・マク・ローの三人の息子だ」
「よし」と王は言った。「おまえたちが今夜わしの側につけば、おまえの祖父に自由な橋を与えよう。おまえの父に自由な橋を与えよう。おまえたち三人兄弟にそれぞれ自由な橋を与えよう」
「だが、コナハー王、ぼくらはその申し出は受け入れないし、それをありがたいとも思わない。そんな条件であなたからなにか受け取るよりは父のところへ帰って、ぼくたちのいまの英雄らしい行為を話すほうがずっといい。ウシュネの息子ヌーイシュとアレンとアーデンはぼくらの親戚でもあり、あなたともおなじくらい親戚だ、あなたは彼らの血を流したがっているが。あなたはぼくらの血も流したいのだな、コナハー王」そう言って高貴な、男らしい、美しい茶褐色の髪の眉目秀麗の若者たちはなかに戻った。「ぼくらはこれから」と彼らは言った。「家に帰って、あなたが王の手にかからず無事だったことを父に告げよう」そろってさわやかで背が高く、しなやかで美しい若者たちは父のもとへ帰って、ウシュネの息子たちが無事だった

と告げた。これは朝の薄明かりの昼と夜の別れのときだった。ヌーイシュはその宿舎を出てアルバへ戻ろうと言った。

ヌーイシュとディアドラ、アレンとアーデンはアルバへ戻るために出発した。王が追っていた一行がいなくなったことが王に知らされた。王はおかかえの魔術師のなかでもっともすぐれたドルイド僧ドゥアナン・ガッハを迎えにやって、彼にこう言った。

「ドルイド僧ドゥアナン・ガッハよ、わしはおまえにたくさんの金を使って学問や不思議な魔術を学ばせてきたのに、あの連中はなんの心配もなく、わしへの配慮も顧慮もなく、連中においつくチャンスもなく、連中を阻む力もなく、きょうわしから逃げて行くのか」

「はぁ、わたくしが彼らを阻止しましょう」と魔術師は言った。「王さまがつかわした追っ手の一行が戻るまで」そして魔術師はだれも通りぬけられない木を彼らの前においた。しかしウシュネの息子たちは立ち止まりもためらいもせず、木を通りぬけた、ディアドラはヌーイシュの手をしっかり握って。

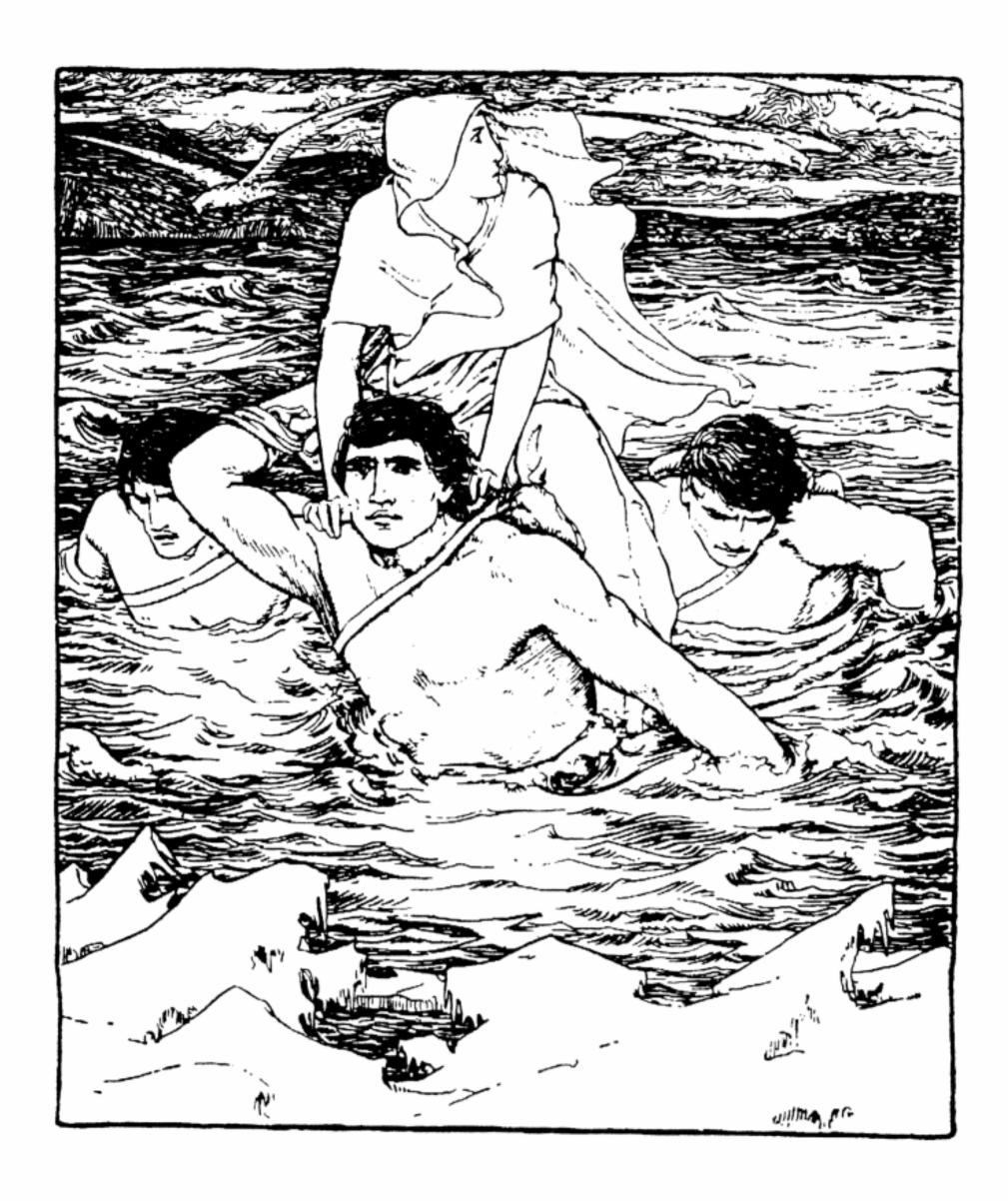
「あれがなんの役にたつのだ？　まだだめだ」とコナハー王は言った。「あいつらは足も曲げず、歩みも止めず、わしには注意も尊敬もはらわず、行ってしまった。今

夜のわしにはあいつらを見失わず追いつづける力がないし、引き返させる機会もない」

「べつの計略をためしてみましょう」とドルイド僧は言った。彼は緑の平原のかわりに灰色の海を彼らの前においた。三人の英雄たちは服をぬいで頭のうしろに縛りつけ、ヌーイシュはディアドラを肩のうえにのせた。

　　彼らが両腕を流れにのばせば、
　　　彼らには海も陸もおなじもの、
　　灰色の荒海は
　　　緑の平らな牧草地におなじ。

「あぁ、ドゥアナンよ、その計略がいいといっても、英雄たちは戻ってこないではないか」とコナハーは言った。「彼らはわしに注意もはらわず、敬意もはらわず、行っしまった。今夜のわしには彼らを追う力も戻らせる力もない」

「これで止められないからには、べつの方策をこうじてみましょう」とドルイド僧は言った。ドルイド僧は灰色にうねる海を固いごつごつの小山だらけに変えた。あ

る尾根には鋭い剣が待ち受け、べつの尾根にはクサリヘビの猛毒がひそんでいた。そのときアーデンが疲れてもうだめだと叫んだ。「さぁ、アーデンよ、ぼくの右肩にすわるんだ」とヌーイシュが言った。アーデンは来てヌーイシュの右肩にすわった。アーデンはながい間その姿勢でいたが死んだ。彼が死んでもヌーイシュは放そうとしなかった。つぎにアレンが気がとおくなりもうだめだと叫んだ。ヌーイシュは彼の祈りを聞いたとき、耳をつんざく断末魔の叫びをあげて、アレンに自分につかまれ、陸までつれて行くからと言った。アレンはまもなく弱って死に、握る力もつきた。ヌーイシュはあたりを見回し、愛する二人の弟たちが死んだのを見て、自分も生きようが死のうがどうでもよくなった。苦しい断末魔の悲鳴をあげると彼の心臓がはり裂けた。

「彼らは死にました」とドルイド僧ドゥアナン・ガッハは王に言った。「わたしは王さまのお望みどおりにいたしました。ウシュネの息子たちは死んで、もう王さまを悩ますことはございません。奥方はすっかり王さまのものになりました」

「ドゥアナン、おまえに祝福を、そしてわしにはいい結果がもたらされんことを。おまえを教育し学問させるのに使った金は惜しいとは思わない。さぁ、洪水を引かせて、わしにディアドラを見せてくれ」とコナハー王は言った。ドルイド僧ドゥア

ナン・ガッハが平原から洪水を引かせると、ウシュネの三人の息子がそろって生命の息吹もなく死んで緑の草原にあい並んで横たわり、ディアドラがそのうえに身をかがめて涙の雨を降らせていた。

ディアドラが嘆いた。「美しい人、愛する人よ、花のように美しい。まっすぐで強い愛する人よ。高貴で節度ある愛する戦士よ。妻に愛された青い瞳の美しい人よ。あなたのすんだ声はアイルランドじゅうの森をとおって、逢引きの場にいるわたしの耳に心地よくひびいた。これからのわたしは食べることも笑うこともできない。コナハー王よ、悲しみの波はつよいが、悲しみそのものはもっとつよいのです」

それから人々は英雄たちの遺体のまわりに集まって、コナハーにどうしようかとたずねた。彼が下した命令は、小さな穴をひとつ掘って、三人の兄弟をそのなかに並べていれよというものだった。ディアドラは墓のそばにすわったまま、墓掘りに穴を大きくゆったりと掘るように頼みつづけた。兄弟の遺体が墓のなかに入れられると、ディアドラは言った。

「さぁここへ来て、わたしの恋人、ヌーイシュよ、

アーデンはアレンのそばに寝かせましょう。
もしも死者に感じる感覚があるのなら、
ディアドラにも場所をあけてくれたでしょう」

墓掘りたちはディアドラの言うとおりにした。彼女は墓のなかにとびこむと、ヌーイシュのそばに横たわり、彼のそばで死んだ。
王は彼女の遺体を墓からひきあげて、湖の反対側に埋葬するように命令した。王の命令どおりにされ、墓穴が閉じられた。そのあとすぐディアドラの墓から一本のモミの枝が、ヌーイシュの墓からも一本のモミの枝が生えてきて、二本の若枝は湖の上で結ばれてからみあった。王は枝を切るように命令した。こんなことが二度あったが、三度目に、王と結婚した妻がこの意地悪な行いと死者の遺骸にたいする復讐をやめさせた。

ダヴェッド公パウエル

ダヴェッド公パウエルはダヴェッド(1)七州の君主だった。ある時パウエルは、宴会の準備がととのった本拠地のナルベルス宮殿に、大勢の家来たちとともにいた。最初の食事のあと、パウエルは宮殿の上にあるゴーセズ・アルベルスという丘の上まで歩いて行った。

「殿」と廷臣のひとりが言った。「この丘は不思議な丘でございますね。ここに腰をおろした者はかならず傷を負うか、殴打されるか、不思議な現象を目にするかしなければ、ここから帰れません」

「これだけ大勢の家来にかこまれているから、傷を負おうが、殴られようが恐れはしないが、不思議な現象とやらは見たいものだ。だから、行って丘の上にすわってみよう」

彼は丘の上にすわった。そこにすわっていると、大きな白馬にのり、光り輝く金

の衣装をまとった女が丘につながる道から来るのが見えた。馬はゆっくりとおちついた足どりで丘のほうへむかっているようだった。
「みなの者」とパウエルは言った。「おまえたちのなかにあの女がだれか知っている者はいないか？」
「ございません、殿」と家来たちは言った。
「だれかあの女を迎えに行って、なに者かきいてこい」
ひとりの家来が立ち上がった。家来が道に出て女を迎えると、女は通り過ぎて行った。そこで徒歩のまま大急ぎで後を追った。彼が速度をあげればあげるほど女はいっそう離れて行くのだった。追ってもむだだと分かったので、家来はパウエルのところへもどって来て言った。「殿、あの女を徒歩で追いかけることはだれにもできません」
「まさしくそのとおりだ」とパウエルは言った。「宮殿へもどり、目についたいちばん速い馬をつれて来てあの女を追うのだ」
そこで家来は馬をつれて来ると先へ進んだ。ひらけた平らな野原にさしかかると、馬に拍車をかけた。馬をせかせればせかせるほど、女は彼から離れて行った。しかも女の歩調は最初と変わらなかった。馬に元気がなくなった。馬の足に力がなくな

ったので、家来はパウエルのいる場所に引き返した。
「殿」と彼は言った。「だれがあの女を追ってもむだでございます。この国にはこの馬より速い馬はございませんが、追うことはできませんでした」
「まさにそのとおりだ」とパウエルは言った。「あれはなにかの幻影にちがいない。もう宮殿にもどろう」それで宮殿にもどり、その日はすんだ。あくる日起きて、時間がたち、食事になった。朝食のあと、パウエルが若い家来に言った。「昨日とおなじ仲間で、丘の上に行こう。さぁ、おまえは、野原にいるなかでいちばん速い馬を引いて来い」若者は言われたとおりにした。一行は馬をつれて山に登った。すわっていると、昨日とおなじ馬にのって、おなじ衣装を着た女がおなじ道をやって来るのが見えた。
「見ろ」とパウエルが言った。「昨日の女だ。おまえが、なに者かたずねて来るのだ」
「殿」と彼は言った。「よろこんでいたします」
そのとき女が彼らのほうに向かって来た。そこで若者は馬にのった。彼が鞍にまたがらないうちに女は通りすぎた。ふたりの間は離れていたが、女のスピードは前の日ほど速くなかったので、彼は馬を側対歩で歩かせた。馬がゆっくり歩いてもすぐ女に追いつくだろうと思ったのだ。しかし思惑どおりにはいかなかったから手綱

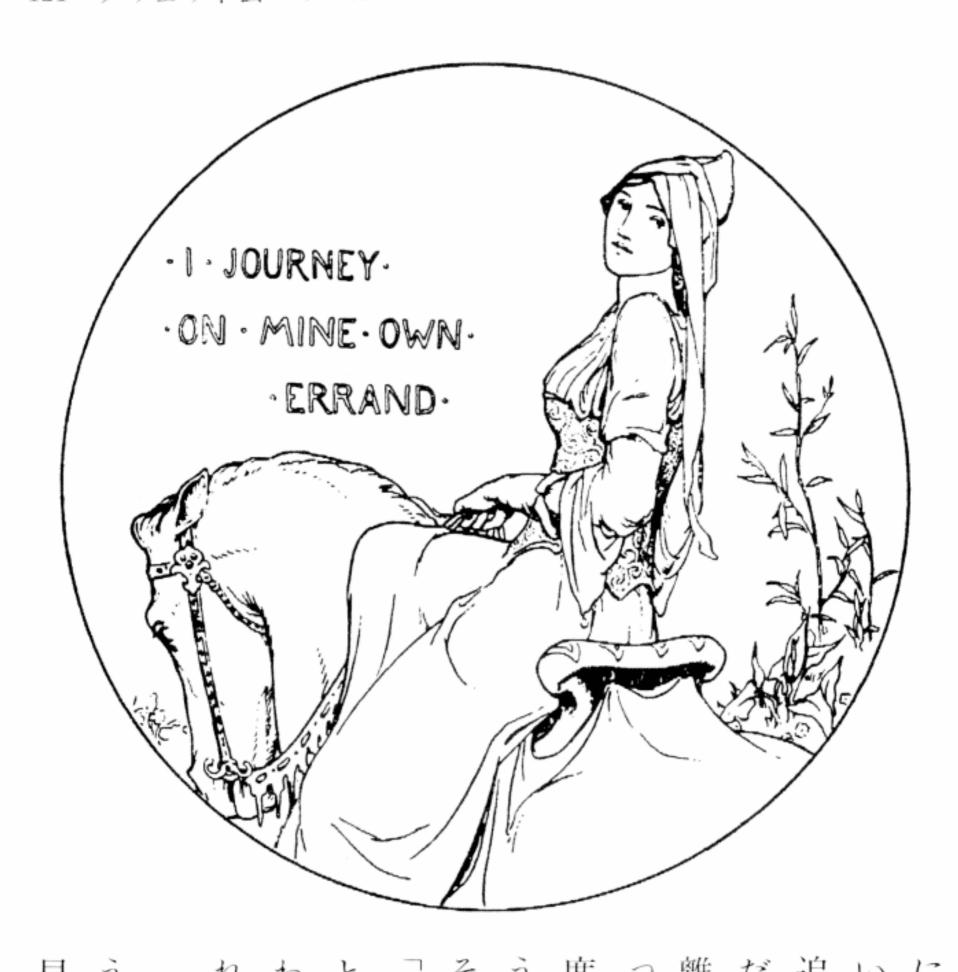
をゆるめた。それでも側対歩のときより距離は縮まらなかった。馬をせかせればせかせるほど女は彼から遠ざかっていくのだった。それかといって女が前よりも速く走っているわけでもなかった。追ってもむだだと思ったので、パウエルのいる場所へもどった。「殿」と彼は言った。「馬はごらんのとおりしか走れません」

「たしかにだれが追っても、むだだ。おそらくきっと」と彼は言った。「あの女は急いでいるのできけないが、この平原にいるだれかに用があるのだろう。宮殿へ戻ろう」一行は宮殿へ戻り、その夜は飲めや歌えで楽しくすごした。

あくる日、楽しくすごすうちに食事の時間になった。食事がすむとパウエルが言った。「昨日と一昨日丘の上まで行った者たちは、どこにいる?」

「殿、ごらんください。ここにおります」と彼らは言った。

「さぁ、丘の上へ行ってすわろう。それからおまえは」と彼は馬の世話をしている小姓に言った。「わしの馬に鞍をおいて、あの道まで急いで行け。拍車も一緒に持って行くのだ」若者はそのとおりにした。彼らは行って丘の上へすわった。そこへ来てまもなく、女がおなじ道から、おなじ様子で、おなじ歩調でやって来るのが見えた。

「おい、小姓」とパウエルは言った。「女が来たから、馬をくれ」彼が馬にのるとすぐ女が通りすぎた。彼は女のほうに向きを変えてそのあとを追った。馬が楽しそう

に跳ねまわるままにさせていたが、二、三歩で、女に追いつくだろうと思った。だが、最初とおなじで、距離はいっこうに縮まらなかった。それで馬を最高の速度に駆りたてたが、女を追うのはむだだと分かった。そこでパウエルは言った。
「あぁ、女よ、おまえのもっとも愛する人にめんじて、わたしのために止まってくれ」
「よろこんで止まりましょう」と女は言った。「もっと早くそう頼んだほうが馬の

ためによかったでしょうに」そして女は止まり、顔をおおっていた頭巾をうしろにずらせた。彼をじっと見つめて話しはじめた。
「女よ」と彼はたずねた。「どこから来たのだ、どこへ旅をしているのだ？」
「わたしはある用があって旅をしているのです」と女は言った。「あなたにお会いできてとてもうれしいですわ」
「わたしもおまえに会えてうれしい」と彼は言った。彼は思った、これまで見たどんな少女も美女もこの女の美しさにはくらべものにならない、と。「女よ」と彼は言った。「おまえの旅の目的はなにかおしえてくれまいか？」
「お話しいたしましょう」と女は言った。「わたしの目的はあなたをお捜しすることでした」
「ほう」とパウエルは言った。「わしにとってはとてもうれしいことだ、おまえがたずねて来るとは。で、おまえはなに者なのだ？」
「殿、申しあげましょう」と女は言った。「わたしはリヒアンノンと申し、ヘヴェイス・ヘーンの娘でございます。わたしは気にいらぬ夫をおしつけられそうになりました。でも、そんな夫は無用でございます、わたしはあなたを愛していますから。あなたに拒まれなければ、そのようなものはいりません。わたしがここへまいった

のはあなたのお答えをお聞きするためでございます」
「天にちかって申そう」とパウエルは言った。「これがわしの答えだ。もし世界じゅうの貴婦人や乙女のなかから選んでよいなら、わしはきっとおまえを選ぶ」
「まことに」と女は言った。「もしそれがあなたのご本心なら、わたしがほかの男のものにならないうちに、わたしと会うと誓ってください」
「早くその日がくればどれほどうれしいことか」とパウエルは言った。「どこを指定してもよろこんでおまえと会おう」
「十二カ月後のきょう、ヘヴェイスの宮殿で、わたしと会ってくださいませ。あなたをお迎えするために宴会の準備をさせましょう」
「よろこんで」と彼は言った。「この約束をまもろう」
「殿」と女は言った。「どうぞお元気で、お約束をお忘れなく。では、わたしはまいります」
たがいに別れたあと、彼は家臣たちのもとへもどった。家来たちが女のことをどんなにたずねても、彼は話題をそらすばかりだった。それから一年がすぎたとき、彼は百人の騎士たちに、ヘヴェイス・ヘーンの宮殿へ行く準備をさせた。宮殿へやって来ると、うれしいことに、人がおおぜい集まり、喜々として彼の来訪の準備に

おおわらわだった。宮殿じゅうが彼の命令にしたがった。

飾りつけられた広間に彼らは食事のために行き、すわった。パウエルのとなりはヘヴェイス・ヘーンとリヒアンノンだった。ほかの者は階級に応じてすわった。食べかつ飲み、たがいに語った。食事がすんでお祭り騒ぎがはじまったころ、繻子（サテン）の衣装を着た貴公子然とした背のたかいとび色の髪の若者が入って来た。広間に入ると、若者はパウエルとその騎士たちにあいさつをした。

「貴公に心よりごあいさつ申しあげる」とパウエルは言った。「どうぞこちらへおすわりなされ」

「いや」と若者は言った。「わたしは請願者です。お願いがあってまいったのです」

「どうぞご随意に」とパウエルは言った。

「殿」と若者が言った。「わたしはあなたに用があるのです。あなたにお頼みしたいことがあってまいったのです」

「どんな頼みでも、わしにできることなら、なんでもいたそう」

「あぁ」とリヒアンノンが言った。「なぜあなたはそうお答えになったのです？」

「貴顕のかたがたのまえでたしかにそうお答えになりましたね？」と若者がきいた。

「貴公」とパウエルは言った。「頼みとはいったいなんなのだ？」

「わたしがいちばん愛している女性が今夜あなたの花嫁になるのです。その女性をこの場の宴会もろともに、あなたから譲っていただきたくて、まいりました」

パウエルはおしだまったまま、自分の答えをしきりに反省した。

「お好きなだけお黙りになるとよろしいわ」とリヒアンノンが言った。「あなたほどご自分の才気を悪用なさった方はいませんわ」

「姫よ」と彼は言った。「わしはあの男がなに者か知らなかったのだ」

「ごらんください、この人こそわたしの意に反しておしつけられそうになった男なのです」と彼女が言った。「グアウールといって、クリードの息子です。巨大な権力と富とを手にしている人です。あなたはわたしを彼に与えるとおっしゃったのですから、そうしなければなりません、恥をかきたくなければ」

「姫よ」と彼は言った。「わしにはどうもあなたの答えが解せない。あなたのおっしゃるとおりにはできない」

「わたしを彼に与えても」と彼女は言った。「わたしは彼のものにはなりませんわ」

「どうすればそういうことができるのだ？」とパウエルはきいた。

「あなたの手に小さな袋をお渡ししますから」と彼女は言った。「大事に持っていてください。彼はあなたにはとてもできない祝宴や支度を要求するでしょう。家臣た

ちにはわたしが宴会を開きます。これにかんしてはあなたからそのように答えてください。わたしのほうは、今夜から十二カ月間彼の花嫁になる約束をします。一年たったら、あなたは袋を持ってここに来て、あなたの百人の騎士をむこうの上の果樹園に入らせてください。彼が宴会を楽しんでいる最中に、あなたはぼろに身を包み、この袋を持って、ひとりで入って来てください。そして袋いっぱいの食べものがほしいと言うのです。わたしはこの中に七つの国ぜんぶの食べものや酒を入れてもすこしもいっぱいにならないようにします。食べものをたくさん入れたあとで、彼は袋がいっぱいになったかときくでしょう。そしたらあなたは、金持ちで高貴な生まれの男が中に入って両足でおさえつけながら『中にたっぷり入ったぞ』と言わなければいっぱいにならないと言うのです。わたしは彼が袋の中に入って食べ物を踏むようにしむけます。彼が中に入ったら、袋を引っくり返し、彼をさかさにして、袋の紐を結ぶのです。それから首に角笛をかけておいて、袋の中に彼を入れて縛ったらすぐ、角笛を吹いてください。それがあなたと騎士たちの合図です。騎士は角笛の音を聞いたら、宮殿におりて来るようにしておきます」

「殿」とグアウールは言った。「わたしの要求にお答えになるのがふさわしいでしょう」

「貴公はわしに出来ることを要求したから、それを聞き入れよう」とパウエルは答えた。
「あなた」とリヒアンノンが若者に言った。「ここにあるご馳走はわたしがダヴェッドの人たちや召し使いや兵士たちに与えたものです。ほかの人にやるわけにはいきません。あなたのための宴会は、この宮殿でわたしがあなたの花嫁となる一年後の今夜開きましょう」
それでグアウールは自分の領地に行き、パウエルもダヴェッドへもどった。ふたりともヘヴェイス・ヘーン宮殿の祝宴のときまで一年暮らした。クリードの息子グアウールは自分のために催される宴会に出かけて行った。宮殿にやって来ると、大喜びで迎え入れられた。アンニーヴァンの首長パウエルも、リヒアンノンに言われたとおり袋を持って、百人の騎士を引きつれ、果樹園にやって来た。パウエルはぼろの服を身にまとい、足には大きな古いぼろ靴をはいていた。食事がすんで浮かれ騒ぎがはじまったと分かると、彼は広間へ向かった。広間へ入ると、クリードの息子グアウールとその仲間に、男も女もへだてなくあいさつした。
「弥栄(いやさか)の恵みを!」とグアウールは言った。「おまえに天のみしるしあれ!」
「殿」とパウエルは言った。「殿に天の報償のあらんことを! お願いがあってまい

りました」
「なんでも申せ。正当な願いなら、よろこんで聞き入れよう」
「もっともなお願いでございます」とパウエルは答えた。「貧窮ゆえのお願いです。わたしの願いと申しますのは、ごらんのこの小さな袋にいっぱい食べものをちょうだいしたいのです」
「それは当然の要求だ」と彼は言った。「よろこんでとらせるぞ。食べ

ものを持って来い」
大勢の召し使いが立ち上がって、袋に入れはじめた。だが、いくら入れてもはじめと変わらずなかなかいっぱいにならなかった。
「おい」とグアウールは言った。「袋はいっぱいになったか？」
「なりません、天にちかって申しますが」と彼は言った。「いくら入れようとも、領土と財宝とを持った人が両足で袋の中の食べものを踏みつけて『中にたっぷり入ったぞ』と言わなければだめでございます」
するとリヒアンノンがクリードの息子グアウールに言った。「急いでお立ちください」
「よろこんで立とう」と彼は言った。彼は立ち上がって両足を袋の中に入れた。するとパウエルが袋を引っくり返したので、グアウールは袋に入ったたまままさかさになった。パウエルは急いで袋を閉め、紐を結び、角笛を吹いた。するとそれを聞いた彼の家来が宮殿におりて来た。グアウールと一緒に来ていた軍勢を全部捕まえ、牢獄に入れた。そこでパウエルはぼろ服とぼろ靴を脱ぎすてた。パウエルの騎士たちは入ってくるなりひとりずつ袋をたたいて、「これはなーんだ？」とたずねた。
「ターヌキだ」と彼らは言った。このようにふざけて、めいめいが足とか棒で袋を

たたいた。みんなで袋をおもちゃにした。入って来た者はひとりのこらずたずねた。

「なんの遊びをしているのだい？」

「袋のタヌキごっこさ」と彼らは言った。これが最初の袋のタヌキごっこだったのだ。

「殿」と袋の中の男が言った。「わたしの声が聞こえますか、わたしは袋の中で殺されるようなことはしておりません」

ヘヴェイス・ヘーンが言った。「公よ、彼がそう言うのももっともだ。彼の言うことに耳をかたむけてやるのが筋だ。彼にこんな仕打ちをすべきではない」

「なるほど」とパウエルが言った。「あなたのご忠告どおりにしましょう」

「お聞きください、わたしもご忠告いたします」とリヒアンノンが言った。「あなたはいま請願者と吟遊詩人を満足させなければならない立場にあります。どうでしょう、あなたのかわりに彼にその応対をさせることにして、いままで受けた仕打ちにたいしてぜったい復讐しないと誓わせたら。これでお仕置きは十分でしょう」

「わたしはよろこんでそうします」と袋の中の男が言った。

「わたしもよろこんでそれを受け入れよう」とパウエルは言った。「ヘヴェイスとリヒアンノンがそう言うのなら」

「ではそう願いましょう」と彼らは答えた。
「承知しました」とパウエルは言った。
「あなたは誓約書を求めるべきだ」
「われわれは彼の味方だ」とヘヴェイスが言った。「彼の家来が自由の身になって彼のかわりに答えられるようになるまでは」これで彼は袋から出され、家来たちは釈放された。「さぁ、グアウールに誓約書を出させよう」とヘヴェイスが言った。「どんな誓約をとったらいいかは分かっている」そしてヘヴェイスは誓約書の項目を挙げた。
　グアウールは言った。「さぁ、あなたが誓約書を作成してください」
「リヒアンノンが言ったとおりで十分だ」とパウエルは答えた。それで誓約書にはすべての項目が書き込まれた。
「殿、じつは」とグアウールが言った。「わたしは大怪我をしております。打撲傷もあちこちあります。薬をつけなければなりません。お許しがあれば、出て行きたいのですが。かわりに貴族たちをおいて行ってあなたの要求に答えさせます」
「どうぞどうぞ」とパウエルは言った。「そうしてください」それでグアウールは自分の領地へ帰って行った。

広間はパウエルと彼の家来と宮殿の人々のために整えられ、みんなはテーブルについた。十二カ月まえにすわったのとおなじように、その夜もすわった。食べ、興じ、陽気で平和な夜をすごした。

明くる朝の夜明けに、「殿」とリヒアンノンが言った。「起きて吟遊詩人たちに贈りものをしてください。今日は賜金を惜しみなく与えてくださいな」

「よろこんでそうしよう」とパウエルは言った。「今日だけでなく祝宴がつづいているあいだは毎日」パウエルは起きてみんなを静かにさせると、請願者と吟遊詩人たちになにが望みか申せと言った。これがすむと宴会はひきつづき、これがつづいているあいだは彼はだれの要求も拒まなかった。宴が果てると、パウエルはヘヴェイスに言った。「殿、お許しがいただけたら、明日ダヴェッドに出発します」

「よろしい」とヘヴェイスは言った。「おまえに弥栄あれ！　リヒアンノンがあとから行く日も決めてくれ」

パウエルは言った。「一緒にまいります」

「一緒に行くのか？」とヘヴェイスは言った。

「はい」とパウエルは答えた。

あくる日彼らはダヴェッドにむかって出発し、二人のために祝宴の準備ができて

いるナルベルス宮殿まで旅をした。着くと、国の大勢の首領と貴婦人たちがやって来たので、リヒアンノンはもれなく腕輪や指輪や宝石といった高価な贈りものをした。その年もあくる年もふたりの治世は栄えた。
　四年めに男の子が生まれた。夜赤ん坊の守りをする女たちがやとわれた。リヒアンノンが眠ると女たちも眠った。目を覚ますと、赤ん坊がどこにいるか捜した。だが、どこにもいなかった。女たちは恐ろしくなったので、共謀して、リヒアンノンが目の前で子ども殺したと言いたてた。
「後生だから」とリヒアンノンは言った。「わたしにぬれぎぬを着せないで。主はすべてをご存じなのよ。恐ろしくてそう言っているのなら、おまえたちを弁護すると神に誓うわ」
「まことに」と女たちは言った。「だれかを守るために自分たちの身に災いがふりかかるようなことはぜったいしません」
「誓って言うけど」とリヒアンノンは言った。「真実を言って、災いがふりかかることはありませんよ」彼女がどんなになだめたり、おどしたりしても、女たちの答えはおなじだった。
　アンニーヴァンの首長、パウエルと家来たちが起きた。この事件はかくせなかっ

た。話は国じゅうに広まって、貴族たちみんなの耳に入った。それで貴族たちがパウエルのところへ来て、重大な罪を犯したのだから妻を離縁するよう求めた。しかしパウエルは貴族たちには妻の離縁を要求する理由はないと答えた。

リヒアンノンは教師と賢者を呼んだ。女たちと争うよりは罪を償うほうを好んだので、罪を償うことにした。彼女に科せられた罰というのは、七年間ナルベルス宮殿にとどまること、門の外の乗馬台の近くに毎日すわること、まだその話を知らないと思われる人がそこへ来れば話してきかせること、客や旅人がのぞめば背負って宮殿の中まで運ぶことだった。だが、これはだれものぞまなかった。それで一年の大部分がすぎた。

さてこの頃グエント・イス・コイドの領主はテイルニオン・トゥラヴ・ヴリアントだった。彼は世界最高の男だった。彼の家にはどの雌馬も雄馬もかなわない王国一の美しい雌馬がいた。この馬は毎年五月一日の夜に子どもを産んだが、その子馬がどうなったかだれも知らなかった。ある晩テイルニオンは妻と話していた。「おまえ」と彼は言った。「うちの馬は毎年子どもを産むのに、子馬が一匹もいないとはわれわれもじつに馬鹿な人間だ」

「それはどうしょうもないでしょう？」

「今夜は五月一日だ」と彼は言った。「子馬を奪っていくのが何者かあきらかにしなければ、わしは天罰を受けるだろう」彼は武装すると夜警をはじめた。テイルニオンは大きなもの音を耳にした。騒ぎがしずまると、大きな爪が窓から家の中に入って来て子馬のたてがみをつかんだ。テイルニオンは剣を抜いて腕を肘から切り落とした。肘から下が子馬とともに家の中に残った。それから大きなもの音と泣き声が同時に聞こえた。ドアを開けてもの音のするほうへ飛び出したが、真っ暗だったので、もの音の原因はなにか分からなかった。だが、彼は走ってあとをつけた。そのとき、ドアを開けっぱなしにしておいたのを思いだして引き返した。すると、なんと、ドアのところに産着にくるまり、繻子(サテン)のマントをかけられた男の赤ん坊がいた。赤ん坊を抱きあげると、赤ん坊のわりに力が強かった。

彼はドアを閉めて妻のいる部屋へ行った。「おまえ」と彼は言った。「眠っているのか？」

「いいえ、あなた」と彼女は言った。「眠っておりましたが、あなたが入ってらしたので、目が覚めました」

「見てごらん、赤ん坊だ。よかったら、おまえにやろう」と彼は言った。「おまえには子どもがいないから」

「あなた」と彼女が言った。「なに事があったのです？」
「こういう次第だ」とテイルニオンは言った。事の顛末をすべて妻に話した。
「まぁ、あなた」と彼女は言った。「赤ん坊にはどんな服がかけてありました？」
「繻子(サテン)のマントだ」と彼は言った。
「では、この子は高貴な家柄の子ですわ」と妻が答えた。
二人は赤ん坊に洗礼を受けさせた。儀式はそこで行われた。二人がその子につけた名前はゴールデン・ロックスだった。赤ん坊の頭の毛は金のようなブロンドだったのだ。赤ん坊は宮廷で育てられ一年たった。一年未満で彼はしっかり歩けるようになった。大柄な体格の三歳の子よ

りも大きかった。子どもは二年めもそこで育てられ、六歳の子とおなじ大きさだった。満四歳にならないうちに、彼は馬丁にうまく頼みこむと馬を引いて水を飲ませに行った。

「あなた」と妻がテイルニオンに言った。「あの子を見つけた晩にあなたが助けた子馬はどこにいるのですか？」

「馬丁に言っておいたよ」と彼は言った。「世話をするように」

「あなた」と彼女は言った。「あの子馬を馴らしてあの子にやればいいんじゃありませんか？　あの子を見つけた晩に生まれてそれをあなたが助けたのですから」

「その事ではおまえに賛成だ」とテイルニオンは言った。「おまえがあの子に子馬をやってくれ」

「あなたに」と彼女は言った。「天の報償がありますように！　わたしがあの子にやりますわ」

それで馬は子どもに与えられた。それから彼女は馬丁や馬を世話している者のところへ行き、よく馬の世話をして、男の子が乗れる時期までに調教しておくように命じた。

このようなことが起こっている最中に、彼らはリヒアンノンの話と彼女が処罰さ

れたといううわさを聞いた。テイルニオン・トゥラヴ・ヴリアントはリヒアンノンの処罰の話を聞いて、可哀そうに思ったので、宮廷にやって来る多くの人たちにその話をくわしく問いただした。テイルニオンは悲しい話を聞いてしばしば悲嘆にくれ、すっかり考えこんでしまうのだった。それから、しげしげと男の子を眺めた。見れば見るほど、この子とアンニーヴァンの首長パウエルは父子のように似ているようだった。そもそも彼はむかしパウエルの家臣だったので、その顔はよく知っていた。そこで彼は他人の子だと分かった子どもを手もとにおくのはよくないと思い悲しくなった。それで妻と二人きりになるとさっそく話した。子どもを手もとにおいてそのためにリヒアンノンのような立派な女性に罰を受けるような苦しみをさせてはいけない、あの子はアンニーヴァンの首長、パウエルの息子なのだから。テイルニオンの妻は彼とおなじ意見で、子どもをパウエルに返そうと言った。「あなた、そのことで三つの徳が」と彼女は言った。「わたしたちは得られますわ――リヒアンノンさまを苦しみから救うことで感謝の贈りものが来ますし、パウエルさまのご子息を育ててお返しすることで感謝されます。三つめは子どもの気立てがよければわたしたちの里子になって、わたしたちのために出来るかぎりのことをしてくれるでしょう」この意見どおりに事は決まった。

さっそくあくる日、テイルニオンは二人の騎士をともにして旅支度をした。四人めの仲間である男の子はテイルニオンからもらった馬に乗って一行とともに行った。ナルベルスへむかって旅をして、まもなく着いた。宮殿へ近づくと、リヒアンノンが乗馬台のそばにすわっているのが見えた。彼女と向きあう位置まで来ると、「首長よ」と彼女が言った。「これから先へは入らないでください。わたしが一人ずつ宮殿の中まで運んで行きます。わたしは自分の息子を殺して食べたためにこのような罰を受けているのです」

「あぁ、美しい奥方さま」とテイルニオンが言った。「あなたに背負われるなぞ、めっそうもない」

「ぼくもだ」と少年が言った。

「まったくそのとおりです」とテイルニオンが言った。「われわれはいやです」彼らが宮殿まで進んで行くと大喜びされた。パウエルがダヴェッドの居城から帰って来たので、宴会の準備ができていた。一行が広間へ入り手足を洗うと、パウエルはテイルニオンを見て喜んだ。一行はつぎの順序で席についた。パウエル、テイルニオン、リヒアンノン、パウエルのもう一方の側にテイルニオンの二人の随身、その二人の間に少年がすわった。食事がすむと、酒を汲みかわし、談笑した。テイルニオ

ンは馬と少年のことを話し、妻と二人でその子を自分たちの子として養育したことを述べた。「ごらんください、奥方さま、これがあなたのご子息でございます」とテイルニオンが言った。
「あなたさまのことで、嘘をついた者はわるい人間です。あなたのお悲しみを耳にして、わたしは心を痛めました。この少年がパウエルさまのご子息だと気づかない者はこの中にはひとりもいないと信じます」とテイルニオンが言った。
「ひとりもいない」とみんなが言った。「そのことに確信のもてない者は」
「天にちかって申します」とリヒアンノンが言った。「もしこれが本当なら、わたしの悲しみはこれですっかり終わりです」
「奥方さま」とペンダグラン・ダヴェッドが言った。「よくぞご子息にプラデリ（悲しみの終わり）と名づけられました。アンニーヴァンの首長、パウエルのご子息にはプラデリの名こそふさわしい」
「あのもし」とリヒアンノンが言った。「この子のほんとうの名前のほうが似つかわしいのではございませんか？」
「どんな名前だ？」とペンダグラン・ダヴェッドがたずねた。
「ゴールデン・ロックスという名をわたくしどもはつけました」

「プラデリに」とペンダランは言った。「この子の名はしよう」

「よりふさわしいのは」とパウエルが言った。「息子が生きていたといううれしい報せを聞いた母親の言葉からこの子の名をとることであろう」それで名前は決まった。

「テイルニオン」とパウエルが言った。「この子をここまで育ててくれたから天の恵みがあろう。それにこの子は立派な血筋だから自分で恩返しをするであろう」

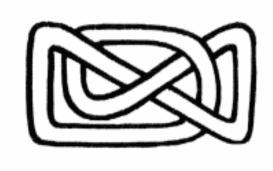
「殿」とテイルニオンが言った。「お育てしたのはわたくしの妻でございます。妻はどこのお子との別れを悲しんでいる者はございません。このお子にはわたくしと妻のことを憶えていただきとうぞんじます」

「天もご照覧あれ」とパウエルは言った。「わしが生きているかぎり、おまえとおまえの領地はわが領地と同様守り抜いてやるぞ。あの子が力をつけたときはわしよりも適任となろう。もしおまえとわが家臣どもがよければ、今日まではおまえが育てたが、これからはペンダラン・ダヴェッドにあの子を育てさせることにしよう。おまえたち二人はあの子の随身であり里親になるのだ」

「それは名案でございます」とみんなが言った。それで子どもはペンダラン・ダヴェッドの子になり、国の貴族もついて行った。テイルニオン・トゥラヴ・ヴリアントと彼の随身は愛と喜びにひたりながら国の領地へ向かった。彼は美しい宝石や立

派な馬や最高の犬を与えると言われたが、どれも受けとらなかった。
　それで、みんなそれぞれの領地にもどった。アンニーヴァンの首長パウエルの息子プラデリは相応の行きとどいた養育を受け、王国じゅうでもっとも美男子で、あらゆる競技にもっとも秀でた、立派な若者に成長した。かくて歳月はすぎ、アンニーヴァンの首長パウエルの生涯は終わった。

訳注　（1）ダヴェッド―ウェールズ南西部の州。

ダーマットとグラーニアの運命

【第一章】
クーアルの息子フィン、グラーニアを妻に望む

ある日、クーアルの息子フィンは、アレンの丘で朝早くおきて、友も従者も連れず、宮殿の前の緑の芝生にすわった。身内の者が二人ついて来た、息子のオシーンとドバー・オバスキンの息子ジャリングだった。
オシーンが彼にたずねた。「王様、なぜこんなに早くいらっしゃったのですか？」
「十分な理由があるのだ」とフィンが答えた。「〃黒膝のガラッド〃の娘マニッサが死んでから、わしには妻がいない。慰め励ましてくれる妻がいないわしのような生活は淋しくて、夜もよく眠れない。だから、わしは早く起きるのだ」
するとオシーンが言った。「妻が欲しいのなら、なぜもらわないのですか？　海に囲まれた緑のエリンの国内に、あなたの目の光をあてさえすれば、合意の上でも、力ずくでも、どんな娘でもお連れしします」

それからジャリングが言った。「わたしは、どこからみてもあなたの妻にふさわしい娘のいる所を知っています」
フィンがそれはだれかとたずねると、ジャリングは答えた――
「その娘とはグラーニアです。百人の戦士コンの息子アートの息子コーマック王の娘です。エリンじゅうの娘のなかで一番美しく、一番教養があり、話し方も作法も一番つつましい」
「わしとコーマックとは長い間争って来た」と、フィンが言った。「だから、彼は娘とわしの結婚を許さないかもしれない。だが、わしの名代でおまえとオシーンがタラへ行ってその娘をくれと言ってくれ。もし王が拒んだら、それでよい。わしが行って断られるよりは我慢もできよう」
「行きますとも」とオシーンが言った。「だがぼくたちが戻って来るまでは誰にも言わないほうがいいでしょう」
そこで二人の英雄はフィンに別れを告げて出かけた。タラに着くまでは二人がどうなったか消息がわからなかった。たまたまこの時、王は会議を開いていて、タラの首長や貴族たちがまわりに集まっていた。ふたりの戦士は到着すると、歓迎を受け、その日の会議は延期された。王は二人が重大な用事で来たのだと思ったからだ。

食べかつ飲んだあとで、王は人ばらいをすると、二人に用件を話すように言った。そこで、オシーンが王の娘のグラーニアをクーアルの息子フィンの嫁にもらいに来たことを告げた。

すると王が言った。「エリンじゅうにわしの娘との結婚を望まない王侯貴族の若者はいない。娘はそれをことごとく断った。娘が断ったため、わしが恨まれたり非難されたりしている。娘はいつもわしなのだ。だからこんどはお二人に娘の前へ行ってもらおう。返事をする役目はいつもわしなのだ。わしは娘が自分の口から返事をするまではなにも言うまい。だから、娘が断ってもわしの責任ではない」

そこで宮殿の日当たりのいい所にある女たちの部屋へ行った。王女の部屋に入ると、王が娘の寝椅子にすわって言った――

「娘や、この二人はクーアルの息子フィンの身内のかただ。おまえをフィンの妻にと望んでおられる」

グラーニアはそのことをあまり大事なこととも思わず、答えた。「その方がお父さまの義理の息子にふさわしいかどうかわたしにはわかりませんが、もしふさわしい方なら、わたしの夫にもふさわしいのではないでしょうか？」

二人の使者はこの答えに満足して、出て行った。コーマックは二人のために宴会

を開いた。宮殿の首長や貴族たちとともに飲み食いして楽しんだ。それから王は、二週間後に花嫁を迎えに来るようにフィンに伝えるがよいと言った。

そこで二人の英雄はアレンに戻って、求婚の次第を報告した。すべて物事には終わりがあるように、この二週間もゆっくり過ぎていった。二週間たつと、フィンはフェーナ騎士団の七つの常備軍隊の隊長に護衛させ、タラへむかって行進した。王はフィンをうやうやしく迎え、フェーナを歓迎し、エリンの貴族たちとともにミコルタの大宴会場でもてなした。王は王座につき右にはフィンを、左には妃であるアタン・オブ・コルカの娘エッタを、母妃の左となりにグラーニアをすわらせ、客とともに饗宴を楽しんだ。他の者は階級と世襲に従って着席した。

【第二章】
ダーマット・オディナ、秘かにグラーニア姫と結婚

さて、宴の最中に、フィンのドルイド僧の一人である詩人の次長（ダラ）が、たまたまグ

ラーニアの近くにすわっていた。王女の先祖の業績について数々の歌をうたった。そのあとで、ふたりの楽しい会話がはじまった。しばらく話をしてから、グラーニアは、たずねた――

「今日の宴会は何のためなの？　なぜフィンは身内を連れてわたしの父王を訪ねてきたの？」

次長（ダラ）はこの質問に驚いて、答えた。「姫にお分かりにならないのでしたら、わたしにはなお分かりません」

グラーニアは答えた。「何の用事でフィンはタラに来たのか、教えて欲しいわ」

「そんな質問をなさるのはおかしい」とドルイド僧は言った。「姫を妻にするために来たのだとご存じなかったのですか？」

グラーニアはこれを聞いて長い間黙っていた。再び口を開いた――

「もしフィンがわたしを息子のオシーンかオスカー青年の妻にというのなら、べつに不思議とも思いませんわ。でも、彼の妻にというので驚きました。だって、わたしの父より年上ですもの」

それからグラーニアは黙ってもの思いに耽っていた。しばらくして、ドルイド僧に言った――

「皆さんいい方ばかり、でも、フィンの息子のオシーン以外はだれも知らないわ。オシーンの右側にいる勇士はどなたですの？」
「あの騎士は」と、ドルイド僧が答えた。「ガル・マック・モーナ、ザ・テリブル・イン・ザ・バトルです」
「ガルの右側の若い英雄はどなた？」とグラーニアがたずねた。
「オスカーです、オシーンの息子の」とドルイド僧が答えた。
「オスカーのとなりにすわっている上品で血色のいいお顔の隊長はどなた？」と王女がたずねた。「駿足のキールタ・マック・ロナンです」とドルイド僧が答えた。
「キールタ・マック・ロナンのとなりには金髪で、そばかす肌の、髪の真っ黒い英雄がすわっています。やさしく、ハンサムで、男らしいお顔だち、それにいいお声。ねえ、どなたなの？」
「輝く顔のダーマット・オディナです。女の子に人気があり、精神が高潔で、勇敢で、気前がいいから、フェーナじゅうで愛されています」
「ダーマットの上座にすわっているのは誰ですか？」とグラーニアがたずねた。
「ジャリング、ドバー・バスキンの息子です」とドルイド僧は答えた。「勇敢な英雄にしてドルイド僧、医者でもあります」

グラーニアは侍女を呼んで、言った。「わたしの部屋にある宝石と金彫の大杯を持っておいで」

侍女が大杯を持って来た。グラーニアはそれに縁まで注いで言った――

「これをわたしからといってフィンに持って行き、飲んでくださいと言うのだよ」

侍女は言われたとおりにした。フィンはぐっと飲んだ。王に杯をまわすと、王が飲んだ。そのあと、妃が飲んだ。ふたたび、グラーニアは侍女に、王の息子の〝リフィーのカーブリ〟にも杯を持って行くように命じた。そして彼女は飲ませたいと思う人につぎつぎと金彫の杯から飲ませた。しばらくすると、飲んだ者は死の眠りのような深い眠りにおちいった。

そこで、王女は席を立つと、そっと広間の向こうへ行き、ダーマット・オディナの近くにすわると、目を伏せて、低い声で言った――

「ダーマット、わたしがあなたを愛すれば、その愛に報いてくれますか？」

ダーマットは最初おどろきかつ呆れた。それから一瞬のうちに、自分でも気づかないうちに彼の心は喜びに踊った。だが、自分の首長への義務を考え、心を固くすると、冷たい顔をして、にべもなく答えた――

「フィンの婚約者を、わたしは愛しません。たとえ愛されたとしても、愛すること

は出来ません」

なおも目を伏せたままグラーニアは言った。「あなたがそうおっしゃるのは、心からではなくて、義務からだとよく分かっています。わたしの気持ちはよく分かっているはずです。わたしは女にしては大胆に言わなければなりません。フィンはわたしを妻にと求めてやって来ました。でも、彼は老人です、わたしの父より年上です。わたしは彼を愛していません。ダーマット、わたしは、あなたを愛しています。お願いです、わたしをこのいやな結婚から救ってください。わたしのあなたへの愛は一時の気まぐれだと思わないで、そもそもの始まりを聞いてください。

「マック・ルーガ＝フェーナ組が〝リフィーのカーブリ〟＝タラ組を相手にして、タラの芝生でハーリング(1)の試合が行われた日、わたしは日の当たるわたしの部屋の窓から、試合を見ていました。あの日あなたは、試合に出ないで、お友だちとすわっていました。でもとうとう味方の側が負けそうになって、あなたは立ち上がりました。近くにいた人からハーリング・スティックをひったくると、選手のなかに突入していきました。あなたはタラ側のゴールに三度もいれてからまたすわりました。その時わたしの目も心もあなたに奪われたのです。それで、きょう宴会の席であなただとわかりました、ドルイドに聞くまでは名前は知りませんでしたが。あの時わ

たしはあなたにわたしの愛を与えたのです――それまでは誰にも与えたことはなかったし、これからもないでしょう」

　ダーマットは心乱れた。彼はこらえた、が、こらえてもむだだった。心から王女を愛さないではいられなかったのだ。それでも彼はその思いをひた隠しにした。首長への忠誠が勝っていたからだ。冷たく厳しい顔とことばで、彼は返事をした――「あなたがフィンを愛さないのは不思議だ、この世のだれよりもそれにふさわしい人なのに。さらに不思議なのは、タラには王侯貴族もいるのにわたしに目をむけたことだ。彼らはみんなわたしよりはあなたの愛にふさわしい人ばかりだ。あなたがわたしの妻になるなどありえない。たとえわたしが同意しても、エリンではどんな強固な要塞もどんな遠い荒野も、フィンの復讐から守ってはくれない」

　するとグラーニアが言った。「わたしにはあなたの気持ちが分かっています。あなたは自分の心に逆らっているのです。ダーマット、あなたにギーサ(2)を誓わせ、ドルイドの魔法をかけましょう――真の英雄には破れない誓いです。フィンやほかの人が目を覚まさないうちにわたしを妻にして、このいやな結婚からわたしを救うと誓ってください」

　ダーマットはなおも譲らず、答えた。「あなたがわたしに課したギーサの誓いは邪

悪なものだ。悪い結果になることをおそれます。姫よ、あなたは知らないのですか、フィンはタラで寝る時は大門の鍵をもつ特権があるのです。だから、たとえわれわれが望んでも、要塞を出る事はできないのです」

「わたしの部屋から行ける小門があります」と、グラーニアが言った。「そこから外に出られます」

「それはいけません」とダーマットは答えた。「わたしは小門を通って王の館に入ったり、出たりしないとギーサの誓いをたてています」

するとグラーニアが答えた。「本当の英雄は、戦士が学ぶべきことを訓練されているから、城塞の高い塀も槍の柄を使って飛びこえると聞きました。あなたがフェーナのなかでも一番優秀な戦士だということは先刻承知です。わたしは小門から出ます。たとえあなたがついてこなくても、わたしはタラから出て行きます」

そう言うと、彼女は宴会場から出て行った。

そこで、ダーマットはどう行動すべきか思い悩んで友人たちに相談した。まず、フィンの息子オシーンに、王女が課した重いギーサの誓いをどうしたらいいかたずねた。

「その誓いなら、君に責任はない」と、オシーンは答えた。「グラーニアについて行

けばよい。だが、フィンの策略には気をつけたまえ」
「オスカー君」ダーマットはきいた。「君はどうしたらいいと思う？　ぼくには重いギーサの誓いが課せられているのだ」
「グラーニアについて行くべきだ」と、オスカーは答えた。「誓いを守るのを恐れる者は騎士の風上にもおけない」
「キールタ、君はどんな助言をしてくれるかい？」と、ダーマットはキールタ・マック・ロナンにきいた。
「そうだな」と、キールタは答えた。「王女がおれに愛をくれたのなら、おれは世界中の富だって投げ出すよ。君はついて行くがいい」
最後にダーマットはドバー・バスキンの息子ジャリングにきいた。「ジャリング君、この難問の判断をしてくれ」
ジャリングは答えた。「君がグラーニアと結婚すれば、その結果、君は死ぬことになる。考えただけでも悲しいことだ。だが、たとえそうなろうとも、ギーサの誓いを破るよりは王女について行ったほうがいい」
ダーマットはなおも心迷いながら、最後にきいた。「みんな、ぼくへの助言はこれでいいのだな？」

すると全員がいっせいに答えた。「そうだ」
そこで、ダーマットは立ち上がり、よろい、かぶとを身につけ、盾と重い二本の槍と剣をとった。涙ながらに親しい友人たちに別れを告げた。彼らとはしばらく会えないと分かっていたのだ。前途に見えるのは苦難と危険だった。
それから、内側の土塁が高く盛りあがり外の城壁の見えるところまで出てきた。二本の槍の先を下にして、巧みな戦士らしくそれに体重をかけると、二度かるがると跳躍して、城壁と堀を飛びこえ、外の芝生に二本足でぴたっと着地した。そこには王女が彼を待っていた。彼はまだよそよそしく、厳しい声と態度で言った――
「姫よ、この結婚はかならず不幸な結果になります、あなたにとっても、わたしにとっても。あなたはフィンを選んでわたしを捨てたほうがいい。これからはフィンの怒りを逃れて、家もなく休息もなくさ迷うのです。戻りなさい、姫よ、いまからでもいい、あの小門から戻りなさい。まだ誰も目を覚ましていないでしょう。フィンには何があったか分からないでしょう」
しかし、グラーニアはおとなしく悲しげだったが、すこしも動ぜず答えた。「戻りません。死が連れにくるまで、わたしはあなたと別れません」
それでとうとうダーマットは折れて、それ以上あらがわなかった。厳しい態度と

声をあらため、王女にむかってやさしく言った――

「グラーニア、あなたにはもうわたしの気持ちをかくすまい。ふさわしくないが、あなたの夫になろう。死ぬまであなたをフィンとその家来から守ってみせる」

二人は忠誠を誓い、夫婦としていつまでも変わらぬ愛を厳（おごそ）かに誓った。

訳注

（1）ハーリングーアイルランド式ホッケー。

（2）ギーサー聖誓・呪文・禁止命令の意で、自発的に誓う場合もあるし、他人から課せられることもある。当時の騎士たちは、その称号を受ける日に、自分の命にかえてでも守るべきある種の誓約をするならわしがあった。この誓約は王や貴族たちが居並ぶなかでおごそかになされた。自分の命や親友の命を失うことになってもそれを破るものはいなかった。誓約を破ることは一生涯不名誉の烙印を押されるにひとしかったからである。

【第三章】逃亡と追跡

グラーニアはダーマットを、父の馬が草を食んでいる囲いのある牧草地まで連れて行き、二頭の馬を馬車につなぐよう言った。彼は言われたとおりにし、彼とグラーニアは馬車に乗ると、西をめざして猛スピードで走り、アスローン[1]に着いた。

浅瀬にさしかかると、ダーマットが言った。「フィンはまちがいなくぼくらを追いかけて来る。ぼくらに馬があるから、跡をつけるのは簡単だ」

するとグラーニアが答えた。「タラからこんなに遠くなったから、ここで馬車をおりましょう。これからさきは歩きます」

そこで二人は馬車をおり、ダーマットは馬を一頭ひいて渡ると、浅瀬より上のほうに二頭を別々の岸においた。グラーニアを強い腕で抱きあげ、足の裏やマントの裾が濡れないようにそっと渡した。上流にむかって、一マイル（約一・六キロ）歩き、

それから南西に向きをかえ、〝二つのテントの森(2)〟に着いた。世にもうっそうとした森の真ん中で、ダーマットは枝を切って小屋を作り、二人は休んだ。彼は森の動物を捕って来てグラーニアに食べさせ、きれいな泉の水を飲ませた。

ここで、クーアルの息子フィンがどうなったかを話そう。王と客たちが翌朝早くに眠りから覚めると、ダーマットとグラーニアの姿がなかった。フィンは嫉妬の炎に取りつかれて、すさまじい怒りにかられ、しばらくは力も失せてしまった。それから追っ手を差し向けた。クラン・ナビンだった。彼はその一族にダーマットとグラーニアの跡をつけよと命じた。アスローンまでは簡単にたどっていけた。フィンと伴の者がその後につづいた。だが浅瀬にさしかかると跡を見失った。フィンはもう怒りっぽくなっていたので、すぐさま跡を見付けださなければ、一族を一人のこらず、浅瀬の淵で縛り首にすると言った。

それで追跡者たちは恐れをなして、上流のほうを捜すと、川の両岸に一頭ずつおいていかれた二頭の馬が見つかった。さらに一マイル行くと、ダーマットとグラーニアが川から逃れて行った地点にさしかかった。彼らは馬から下りて南西の方へ跡

をつけ、さらに、フィンとフェーナがついて来た。クラン・ナビンが跡の方向を示すと、彼は言った――
「ダーマットとグラーニアがどこにいるかよく分かった。〝二つのテントの森〟にかくれていることはたしかだ」
フィンがこう言った時、たまたまオシーンとオスカーとキールタとジャリングがそこにい合わせていて、心配した。彼らはダーマットを愛していた。脇へ行って相談した。オシーンが言った――
「フィンが言うのにまちがいはないようだ。彼は千里眼の持ち主だし、軽々に断定する人ではない。だから、ダーマットが不意を襲われないように、警告をしてやる必要がある。ぼくの意見は、オスカー、おまえがフィンの猟犬ブランを見つけて、ダーマットへの警告をもたせ、〝二つのテントの森〟へ行かせることだ。ブランは自分の主人よりダーマットのほうを愛しているから」
そこでオスカーはブランを秘かに呼んで、用事を言い付けた。ブランは賢そうな眼で、耳をぴんとたてて聴いた。オスカーの言うことをよく理解した。それからフィンに見られないように一軍の後に走り戻ると、一度も見失うことなく跡を付け、〝二つのテントの森〟に着いた。ダーマットとグラーニアは小屋のなかで眠っていた

ので、ブランはダーマットの胸に頭を入れた。
ダーマットはびっくりして飛び起きた。ブランを見ると、グラーニアを起こして言った——
「ブランが来た。フィンの犬だ。フィンが近くに来ていることの警告だ」
するとグラーニアが震えて言った。「では警告通り逃げましょう！」
だがダーマットは答えた。「ぼくはこの小屋を離れない。たとえ、遠くへ逃げても、フィンからは逃れられない。今のうちに彼の手に落ちたほうがいい。でも、ぼくの許しがなければ、この砦には入れない」
グラーニアはひどく恐怖に襲われた。だが、ダーマットが陰気にうちしおれているのを見ると、それ以上強制しなかった。
ふたたびオシーンは三人の仲間に言った。「ブランはフィンをだませなかったかもしれない。あるいはなにか悪いことがあってダーマットを捜しだせなかったかもしれない。もう一度警告をだす必要がある。キールタの伝令ファーガーをここに呼んでくれ」
キールタはファーガーを連れてきた。
さて、このファーガーは叫び声が三つの州に聞こえるほどの大声の持ち主だった。

ダーマットに聞こえるようにこの男に三回叫ばせた。ダーマットはファーガーの叫び声を聞くと、眠っているグラーニアを起こして言った――

「キールタの伝令ファーガーの叫び声がする。あの男がいればキールタがいる。キールタがいればフィンがいる。ぼくの友人が警告をしてくれたのだ、フィンが来ている、と」

また、グラーニアは震えて言った。「警告通り、逃げましょう！」

だが、ダーマットは答えた。「ぼくは逃げない。フィンとフェーナ団に追いつかれるまでこの森を離れない」

グラーニアはとても怖かった。しかし今度もダーマットは陰気で厳しい顔をしたので彼女はそれ以上無理強いはしなかった。

訳注　（1）アスローン―アイルランド中央部、シャノン河畔にある。

（2）二つのテントの森―ゴールウェイ州にあった。

【第四章】
七つの狭門を固く閉ざす

　さて、話かわってフィンはといえば。彼と一団は前進し、〝一つのテントの森〟までやってきた。クラン・ナビンを探りに行かせた。彼らはどこよりもうっそうとしたところまで来ると、越えることのできない塀に行き当たった。
　ダーマットは小屋のまわりの草木をはらい、誰にもはいれない塀で囲っていたのだ。森のなかの七つの違う方向にむけて、強い棒に若枝を編みこんだ七つの狭い入り口がついていた。
　クラン・ナビンは高い樹の枝に登って、塀の上からのぞいた。するとダーマットが女といるのが見えた。彼らが戻ってくると、ダーマットとグラーニアは森にいたか、とフィンがたずねた。彼らは答えた――
「たしかにダーマットはいました。彼といっしょに女もいました。それがグラーニ

ア様かどうかはわかりません。われわれは王女を存じませんから」
「ダーマットに不幸がふりかかれ、あいつの味方をする者にも！」とフィンが言った。
「彼がこの森にいることはわかった。わしを傷つけた片をつけさせるまでは、彼をここから出さない」
それでオシーンが言った。「父上、あなたは嫉妬のために目がくらんでおられる。そうでなければ、ダーマットがこの平原であなたを待っているなどと思うはずがない。あなたの怒りを避ける砦といったら〝二つのテントの森〟しかないのだから」
これにたいしてフィンは、かんかんになって答えた。「オシーン、そう言ってもなんの得にもならんぞ。ダーマットへのおまえの友情もなんの役にもたたぬ。わしにはよく分かっていたのだ、ファーガーの叫び声が三回聞こえた時、ダーマットへの警告の合図に叫ばせたのはおまえだ、と。おまえがわしのブランをやって警告したことも知っておる。だが、いくら警告してもどうにもならん。わしを傷つけた償いをするまではここを出られんのだ」
するとオスカーが言った。「お祖父さま、たしかにダーマットがここであなたを待っていると思うのはおろかなことです。だって、あなたが彼の首を求めているこ

とぐらい彼には分かっているのですから」

オスカーがこう言った時、一行は塀のところに着いた。フィンは答えた。「では、誰がこんなに木を切り払って、ここに強力な囲いを作り、狭い入り口をつけたのだ？だが」と彼は言いそえた。「わしはべつのやり方で真実を見付けだそう」彼は声をはりあげて、叫んだ。「ダーマット、教えてくれ、どちらが本当のことを言っているか、オスカーか、それともわしか」

ダーマットはよびかけられれば、隠れたくなかったので、中から答えた。「王よ、あなたは判断を誤ったことはない。グラーニアとぼくはここにいます。だが、ぼくの許しがなければ、誰も入れません」

フィンは囲いのまわりに部下を集め、狭い入り口にそれぞれ一隊ずつ配置し、包囲させた。各隊に言った。「もしダーマットがこの入り口から逃げようとしたら、しっかり捕らえておくのだ」

グラーニアはこの準備の様子を見、フィンの言葉を聞くと、恐怖に襲われ、ひどく震えながら泣いた。ダーマットは妻をあわれに思って、慰めた。三回キスをして、もう大丈夫だから元気をだすように言った。

フィンはこれを見て――彼はすこし離れた小塚に立って、部下と一緒に小屋を見

ていたのだ――嫉妬の炎に心臓を焼かれる思いだった。彼は言った――

「断じてダーマットを逃がさない。これほど傷つけられたからには彼の首をとる！」

さて、ブラフのアンガスはデダナーン族随一の賢者で魔術にすぐれていたが、ダーマットの里親だった。子供のころから彼を育て、勇士の技や修業を教えこんでいた。一人息子を愛する父親のように彼を愛していた。

ダーマットが窮地に陥っていることがアンガスにわかった。それで冷たい東風の翼に乗って、〝二つのテントの森〟に着くまで、休まず旅をした。フィンとその家来に気づかれずに小屋の中に入った。ダーマットは老人を見て、喜びにうち震えた。アンガスは、ダーマットとグラーニアにあいさつもそこそこに言った。「息子よ、どうしてこういうことになったのだ？」

ダーマットは答えた。「タラ王の娘、グラーニア姫が、ぼくに重いギーサの誓いを課して妻にしてくれと言ったので、そうしました。姫の父王の館から逃げて来ました。するど、クーアルの息子フィンがぼくを殺そうと追いかけて来ました。彼は姫を自分の妻にしたいのです」

すると、アンガスが言った。「さあ、子どもたちよ、わしのマントの下にかくれるがよい、片方に一人ずつ。フィンに知られんように、二人をここから連れ出してや

ろう」
しかし、ダーマットは答えた。「グラーニアを連れて行ってください。ぼくは行きません。でも、ぼくはこの場所を離れます。生きていれば、後から行きましょう。ぼくが殺されたら、姫は父王のもとへ送って、ぼくを大にしたことで、姫の待遇をかえないように言ってください」
それから、ダーマットは王女にキスをして自分は敵を恐れていないから、元気をだすようにと言った。ダーマットは王女をマントの下にかくすと、ダーマットに行き先を告げ、フィンとフェーナ団に知られず囲みから出ていった。彼らは南へ向かい、その途中のことはわからないが、いまはリメリックといわれている〝二本柳の森〟までやって来た。
さて、ダーマットはというと。アンガスとグラーニアが出て行くと、よろいをまとい、尖った武器を手にした。塔のように高く真っすぐ立ったまま、しばらく黙って、瞑想した。それから、七つの入り口のひとつに行って、誰がいるかときいた。
「ここにいるのは君の敵ではない。オシーンとオスカーとクラン・バスキンの手の者だ。出てきたまえ、誰も君に危害は加えない」
「ぼくはフィン自身が守っている戸を探さなければならない」と、ダーマットは答

えた。「君たちのところへは出ていかない」

彼は二つめの戸へ行って誰がいるかたずねた。「キールタ・マック・ロナンとクラン・ロナンだ。この戸から出たまえ。君のために死ぬまで戦おう」

「君たちのところへは出ていかない」と、ダーマットは答えた。「ぼくに親切にしたために君たちにフィンの怒りをかうような目にあわせたくない」

彼はべつの戸へ行って、誰がいるかたずねた。

「コナン・オブ・ザ・グレイ・ラッシィズとクラン・モーナだ。われわれはフィンの味方ではない。君を愛している。われわれのところへ出てきたまえ。誰も君を傷つけはしない」

「この戸からは決して出ていかない」とダーマットは答えた。「フィンはぼくを逃がすようなことがあれば、君たちをみな殺しにしかねない！」

彼はべつの狭い入り口へ行って、誰がいるかとたずねた。

「ここには君の親友がいる。マンスター・フェーナ団の団長クアンとその手の者だ。君とわれわれは同郷者だ。必要とあらば、君のために戦っても命は惜しくない」

「ぼくは君のところへは出ていかない」とダーマットは言った。「ぼくに親切にすれば、かならずフィンの不興をかう」

彼はべつの狭い戸へ行って、誰かとたずねた。
「フィン、大声のグロアの息子、アルスター・フェーナ団の団長だ。それにアルスター軍団だ。君とわれわれは同郷者ではないが、われわれは君を愛しているのだ、ダーマット。さあ、われわれのところへ出て来たまえ。誰が君に危害を加えたりするものか」
「君のところへは出ていかない」とダーマットは答えた。「君はぼくの忠実な友だ、君の父上もそうだった。ぼくのために君をフィンの敵にしたくない」
彼はべつの狭い戸へ行って、誰かとたずねた。
「おまえの友ではない！　ここにはクラン・ナビンが立っておまえを見張っておる。ちびのイード、のっぽのイード、必殺ゴンナ、大声のゴハン、追跡者クアン、その軍団だ。われわれはおまえを愛していない。この戸から出てくれば、われらの剣と槍にものを言わせてやろう！」
ダーマットは答えた。「這いつくばりの卑しい犬め！　ぼくがこの戸から出ていかないのはおまえらを恐れてではない。おまえら裸足のやくざな追っ手の血で、ぼくの槍を汚したくないからだ！」
そして彼はべつの狭い戸口へ行って、誰かとたずねた。

「フィンだ。クーアルの息子、アートの孫、トレンモア・バスキンの曾孫だ。レンスター・フェーナ軍団と一緒だ。ここでおまえを待っているのは愛ではない。おまえが出てくれれば、骨も肉もはいでやる！」

「探していた戸をやっと探しあてたぞ！」とダーマットは叫んだ。「フィンよ、あなたが立っているその戸からぼくは出ていくのだ！」

それからフィンは、死ぬほど辛くとも、ダーマットを通してはならぬと部下に言いつけた。しかし、ダーマットは見張りの手薄なところに目をつけると、二本の槍を使って、軽々と空中に飛び上がって塀を越え、外の空き地に降り立った。そしてひた走りに走って、たちまちのうちに剣も槍も届かなくなった。彼の威圧的な形相におじけづいて、誰ひとりあとを追おうとする者はいなかった。

それから南に向きをかえ、〝二本柳の森〟まで休みなく進んで行くと、アンガスとグラーニアが、暖かい小屋のなかで、猪をハシバミの串に刺して燃えさかる炎の前で焼いていた。ダーマットはあいさつした。グラーニアは彼を見ると、心からあふれる喜びではじけんばかりだった。彼は二人に事の次第を報告した。その夜は食事をして、翌朝、日の光がこの世に満ちるまで平穏に眠った。

アンガスは夜明けとともに起きて、ダーマットに言った。「息子よ、わしは行く。

だが、フィンはなおも追って来るだろう。忠告しておくが、わしがいなくなったら、このとおりにするのだ。幹がひとつしかない木の中に入って行ってはいけない。入り口がひとつしかない洞穴に入ってはいけない。港がひとつしかない島に上陸してはならない。煮炊きをした場所で食べてはならない。食べた場所で寝てはならない。今夜寝た場所で明日の晩寝てはならない！」

そしてアンガスは別れを告げた。二人は別れを悲しんだ。

【第五章】
三人の海の勇士と三匹の猛犬がダーマットとグラーニアを追う

アンガスが行ってしまった後、ダーマットとグラーニアは西へむかって立った。シャノン川を右にして進み、いまローン川(1)といわれているラフ・ストリーム・オブ・ザ・チャンピオンズに着いた。そこで休んだ。ダーマットは槍で鮭を殺し、ハシバミの串にさして、近くの川岸で焼いた。グラーニアとともに川を渡り、アンガスに

いわれたとおり、向こうの岸で食べた。食べおわると、さらに西に寝場所を探した。そこで大男に会った。

翌朝早く起きて、なおも西に進み、フィンリアのグレイ・モアに着いた。そこでダーマットはあいさつをして、おまえは誰かとたずねた。すると相手が答えた——

「わたしの名前はモダンです、金をもらって仕える主君を捜しています」

「もしぼくの従者になったら」とダーマットがたずねた。「おまえに何ができる！」

「昼はあなたに仕え、夜はあなたを守ります」と、モダンが答えた。

そこで、モダンが昼は仕え夜は守り、ダーマットが金を払うことで、ふたりは合意の契りをかわした。

それから三人が西に向かい、カラ川(2)に着くと、モダンはダーマットとグラーニアをいとも軽々と抱きあげ、どこも濡らさず川を渡した。そこからさらに西のべハ川(3)へ行き、そこでも同じようにモダンはふたりを抱えて渡した。トン・トマ(4)という砂州の上の丘、すなわちクラ-ケン-アミド丘に洞穴を見つけた。モダンはダーマットとグラーニアのために、洞穴の奥にやわらかいイグサとカバの枝先で寝床をこしらえた。このあと彼は近くの森へ行き長く真っすぐなナナカマドの木の枝を切ってきた。その枝に髪の毛と針をつけ、針にヒイラギの実を刺して、川の淵に立った。す

ると、三ふりで、三匹の鮭がつれた。竿は翌日のためにしまった。針と髪の毛は飾り帯の中にしまって、ダーマットとグラーニアのところに戻った。それから魚を焼いてみんなで食事をした。モダンはいちばん大きな鮭をダーマットに、二ばんめのをグラーニアにやり、自分はいちばん小さいのをとった。そのあとダーマットとグラーニアは洞穴の中にはいって寝た。モダンは朝の光が満ちあふれるまで入り口で見張りをした。

　ダーマットは朝早く起きると、グラーニアに、モダンが寝ている間、洞穴の入り口で見張りをするように言って、近くの小高い丘にあたりの様子を見に行った。丘の頂上に登って、四方八方を見渡した。しばらくすると、黒い船団が西の方から近づいて来るのが見えた。岸近くまで来ると、九、九、八十一隊が、ダーマットが立っている丘の真下に上陸した。彼はその方へ行って、何者なのか、どこから来たのかきいた。

「われわれは英仏海峡から来た三人の海の勇士で、この船団の首領だ」と相手は答えた。「われわれの名前は、黒足（デュコス）、白足（フィンコス）、強足（トレンコス）だ。クーアルの息子フィンの頼みでここに来た。ダーマット・オディナとかいう大将が彼に謀反をして、いまは無法者となり国じゅうの砦から砦へ逃げている。われわれの船団で海岸を警備してくれと

フィンに頼まれた。フィンは内陸を監視しているから、このならず者はもう処罰をまぬがれられぬ。さらに、聞いたところでは、このダーマットなる者は勇敢で危険だというので、ここに連れて来た三匹の猛犬を放って彼の跡を追わせ、隠れ家を嗅ぎ出させるつもりだ。この三匹は火にも燃えない、水でもおぼれない、武器にも傷つかない。さあ、貴殿は何者か名乗ってくだされ、ダーマット・オディナの消息をきいてはいまいか」

「じつは昨日見かけた」と、ダーマットは答えた。「ぼくは彼をよく知っているから、忠告しておくが、用心して追跡したほうがいい。ダーマットに会えば、なみの人間ではたちうちできない」

それから彼は、船にワインがあるかときいた。彼らはあると答えた。すると彼は飲みたいから大樽を持って来てくれと言った。そして飲んだら、勇士の技を見せてやると言った。そんなわけで、二人の男が、酒樽を取りに船に行った。それを持って来ると、ダーマットは両腕で抱えあげて飲んだ。他の者も同じように飲んで、樽を空にした。

すると、彼は言った。「ダーマットに習った勇士の技をお見せしよう。わたしと同じようにやれる者があなたがたのなかにいたら、相手になろう。これで、万一不運

にもダーマットに出会えば、どんな男を相手にすることになるかがわかる」

そう言うと、大樽を丘の頂上まで引き上げて、険しい崖っぷちに置いた。それから、その上に跳び乗って、樽を巧みに崖からずらすと、その上に立ったまま、なめらかな丘の斜面を谷底までころがした。見知らぬ男たちが見ている前で、これを三回くり返した。

だが、彼らは嘲笑して言った。「それが勇士の技というのか？　おぬしは勇士の技を見たことがないな！」

そう言うと中の一人が立ち上がり、同じ技をしようと丘の頂上まで大樽を引き上げた。そして崖っぷちに置いて、跳び乗った。すると、立っている間にダーマットが樽を足で押して動かした。それが動いたとたんに、男はバランスを崩し、樽が丘の斜面をころがっている間に、崖から落ち、尖った岩角にぶつかると粉々になって死んだ。

べつの男が同じことを試みて、同じように落ちて岩の間で死んだ。結局、敗北を認めようとしない五十人の男がその技を試みて一人のこらず崖から落ちて死んだ。それで残りの者は、暗澹たる傷心の思いで船に乗り移った。

ダーマットは洞穴に戻り、グラーニアは彼を見て心から喜んだ。モダンは洞穴を

出て、前と同じように竿に髪の毛と針をつけて、三匹の鮭を釣った。洞穴に戻ると、ハシバミの串にさして焼いた。三人は食事をし、それからダーマットとグラーニアが眠っている間、気持ちよい朝の光が世界に満ちるまで、モダンは見張りをした。

ダーマットは夜明けとともに起きて、モダンが眠っているあいだ見張りをするようにグラーニアに言い、昨日の丘に行ってみると、三人の海の戦士が海岸にいた。彼らにあいさつをして、また勇士の技を競うかときいた。しかし彼らはダーマットの消息のほうをききたいと言った。そこで彼は言った――

「今朝彼に会ったばかりだという男に会った。わたしが彼から習った勇士の技をお見せしよう、万一彼に会えば、どういう男を敵にまわすことになるかがわかるだろう」

こう言うと、かぶとと上着とよろいを脱ぎすて、たくましい肩にはシャツだけの姿になった。マナナーン・マック・リールから貰った槍ガ-ボーを手にすると、先を上にしてしっかりと地面につきさした。そして少し後ろに下がってから、槍にむかって走りながら、鳥のように地面から飛び上がると、槍先にふわっと止まった。そして再び飛び降りて、かすり傷ひとつ負わず地面に立った。

するとと見知らぬ戦士の一人がたちあがって、言った。「それを勇士の技というのな

ら、おぬし今までに本ものの技を見たことがないな！」

そう言うが早いか、槍をめがけさっと駆出し大きく跳びあがった。が、尖った槍先にどさっと落ちて、それが心臓につき刺さり、死んでしまった。べつの男がその技を試みて、同じように死んだ。彼らがそれをやめた時は、五十人の男がダーマットの槍で死んでいた。それで、もうその技はよすから、槍を地面から引きぬいてくれとダーマットに言って、船に乗った。

ダーマットは洞穴に帰った。モダンは三匹の鮭を釣った。ダーマットとグラーニアは食事をして朝まで眠った。モダンは見張りをした。

翌朝、ダーマットは森から二股の強い木を二本切って来ると、それを持って丘へあがった。三人の海の勇士が部下とともに浜辺にいた。彼らにあいさつをして、言った——

「きょうはダーマット・オディナに習った勇士の技を披露しにやってきた。ダーマットに会った時の心構えが出来るというもんだ」

彼は棒をしっかりと地面に立てると、ブラフのアンガスからもらった長剣モラルタを、刃を上にして柄のほうを一本の木の股に、剣先をもう一本の木の股に、つるでしっかりと結びつけた。そして、一跳びで飛び上がると、刃の上にそっと止まっ

た。柄から剣先まで、先から柄まで、巧みに三回歩いた。そしてかすり傷ひとつ負わずかるがると地面に飛び降りた。それから見知らぬ勇士にその技をやってみよと言った。

一人が立って言った。「エリンの男がやった技でわれわれに出来ないものはない」彼は自分の足で止まらんものと飛び上がった。だが、鋭い刃の上にどさっと落ちて、身体がきれいにまっ二つに切れた。べつの男が同じことをやって、これも死んだ。彼らがそれをやめた時は、前二日の一日平均の死者と同じ人数がダーマットの剣で死んでいた。

船に戻りかけながら、彼らはダーマット・オディナの消息は聞いていないかたずねた。すると彼が答えた――

「きょう彼に会った。これから捜しに行こうと思っている。朝になったら、連れて来よう」

それから彼は洞穴に帰った。グラーニアと食事をして、その夜は寝た。モダンが見張りをした。

あくる朝、ダーマットは夜明けとともに起きて、こんどは闘いの身仕度をした。重いよろいを着けた――それを着けた者は横からも上からも下からも傷を負うこと

がなかった。ブラフのアンガスからもらったモラルタを左腰に帯び――一太刀ですべてを倒す剣だ。把手の厚い二本の槍ガーデルグとガーボーをとった――これで傷ついた者は回復することがない。

それからグラーニアを起こして、モダンが眠るから自分が戻るまで見張りをするように言った。彼女は彼の重装備を見て、恐怖にうち震えた。これが彼の闘いの準備のしきたりだとわかったからだ。それできょうはどうするつもりなのか、フィンの追っ手にみつかったのかとたずねた。だが、ダーマットは彼女の恐怖を静めるため軽く話題をそらして、言った。「準備をしていたほうがいいのだ。敵が来た時にそなえて」それで彼女は安心した。

彼は丘へ行き、前と同じように、見知らぬ戦士たちと浜辺で会った。彼らはダーマット・オディナの消息が分かったかと聞いた。

彼は答えた。「あいつは近くにいる。ぼくはたった今会ったばかりだ」

「では」と彼らは言った。「われわれを彼の隠れ家に連れて行ってくれ。彼の首をクーアルの息子フィンに持って行く」

「それでは友情を仇でかえすことになる」と、彼は答えた。「ダーマット・オディナはぼくの友人だ。彼の身は今ぼくの武勇で守っている。言っておくが、彼を裏切る

ような真似はしない」
　彼らは怒って答えた。「おまえがダーマット・オディナの友人なら、おまえはフィンの敵だ。おまえの首をとって、ダーマットの首と一緒にフィンに持って行こう」
「そうたやすくいくものか」と、ダーマットは答えた。「ぼくの手と足を縛りでもしないかぎり。だがぼくは自由だから、いつもどおり身を守れる」
　そしてモラルタを鞘から抜き払うと、前に躍り出て、迫り来る敵に向かって行き、先頭の者を一刀両断に切り捨てた。それから羊のなかの狼か、雀のなかの鷹のように敵のなかへ、下へ、上へと突き進み、敵を切り殺し、ついにわずかに残った数人は、ほうほうのていで船に逃げて行った。

訳注　（1）ローン川―アイルランド南西部、キラニー湖からディングル湾へ注ぐ。
（2）カラ川―キラニーの西二〇マイル（約三二キロ）。
（3）ベハ川―カラ川の西約一・五マイル（約二・四キロ）。
（4）トン・トマー―ディングル湾内の砂州。

【第六章】
三人の海の勇士と三匹の猛犬のその後

この後ダーマットはかすり傷ひとつ負わず洞穴へ帰った。彼とグラーニアは食べてから寝、モダンは朝まで見張りをした。朝になるとダーマットは前の日と同じように重装備で丘に行き、船の上方に立つと槍で盾をたたいて鳴りひびかせ挑戦した。浜辺じゅうに、そしてまわりの山にこだました。すると、デュコスがただちに武装して岸に現れ、ダーマットと一騎打ちをした。

さて、ダーマットは敵をすぐには殺したくなかった。もっとひどい罰を下したかった。そこで彼はデュコスに迫って行った。二人の勇士は武器を投げ捨てて、頑丈な腕で互いの腰を摑んだ。二人はおし黙ったまま、ひねったりひっぱたり組み合ったりした。するとぴんと張った腱が音をたてた。足元で地面がゆれた。のたうちまわる二匹の大蛇のようでもあり、怒り狂った二頭のライオンのようでもあり、角を

絡みあわせて相手をもちあげようとする猛々しい二頭の雄牛のようでもあった。このように英雄たちは戦った。ついにダーマットがデュコスを肩にもちあげ、力つき呻いている相手を地面にたたきつけた。そしてただちに捕まえて、かたい鉄紐で縛った。

つぎにフィンコスがダーマットにかかって来て、そのあとにトレンコスが来た。だが、ダーマットはふたりとも打ち負かして同じ紐で縛った。それから苦痛で身悶えしている三人に言った——

「おまえらの首をはねることもできるのだが、おまえたちの苦しみを長びかせたい。おまえらが死ぬまでだれもこの紐を解くことはできないぞ！」

ダーマットは洞穴に戻った。グラーニアと食事をしてその夜は寝た。モダンが見張りをした。朝になると、ダーマットは一部始終をグラーニアに話した。最初の三日間は毎日五十人の異国人が死んだこと。四日めはそれをさらに上回る人数を殺したこと。三人の海の勇士を打ち負かしてかたい鉄紐で縛ったこと。

「丘の上に縛ったままにしてきた」と、彼は続けて言った。「殺してはいない。彼らの苦しみを早く終わらせるよりは長引かせたいのだ。ぼくの縛った紐を解くことの出来る人間はエリンに四人しかいない。オシーンとオスカーとマック・ルーガとコ

ナン・ムールだ。このうちの誰も彼らを自由の身にしたりはしない。おそらくフィンは彼らのことを聞いてさぞかし衝撃をおぼえるだろう。だが、われわれがここにいるのが分かるから、この洞穴を出て、彼とそれから三匹の猛犬から逃げなければならない」

そこで三人は洞穴を出て、東へ旅をし、フィンリアのグレイ・モアにやって来た。グラーニアが疲れた時や、切り立った崖を歩く時は、疲れを知らぬモダンがそっと抱きかかえて行った。彼らはこんなふうに旅をして、スリーブ・ロッハー[1]の広いヒースの中腹に着いた。山の真ん中を曲がりくねって流れる川のそばの草の上に腰をおろして休んだ。

さて、異国の海の勇士はというと。生き残った者たちが船から上陸して、丘へあがってみると、三人の首領が手と足と首をきつく縛られていた。解こうとしたが、紐はいっそうきつくなるばかりだった。彼らが必死で解こうとしていると、フィンの使いの女が、ツバメのように、イタチのように、はたまた山腹を吹く冷たい突風のような速さでやってきた。近くまで来てあいさつしたあと、死体を見て、誰がこんな恐ろしい人殺しをしたのかとたずねた。

「まず、聞きたいが」と彼らは言った。「そう言うおまえは何者か？」「わたしはブ

ラック・マウンテンのジャルドゥリ、クーアルの息子フィンの使いです」と彼女は答えた。「フィンの命令であなたたちを捜しに来たのです」

するとと彼らが言った。「この人殺しの犯人が何者かは知らないが、顔形はよく分かっている。背が高い、色白でハンサム、くったくのない顔立ち、カールの黒髪の戦士だ。彼は三日間われわれを相手に戦った。仲間が殺されたのは悲しいが、それ以上に悲しいのは、われらの三人の首領がかたく縛られて、紐を解けないのだ」

「まぁ、あなたたちは！」とジャルドゥリが言った。「最初から捜し方がまちがっていました。その男こそダーマットだったのです。さあ急いで三匹の猛毒犬を放って彼の跡を追わせなさい。わたしは戻ってフィンがあなたがたと合流するようにしましょう」

それで彼らは三匹の犬を連れてくると、放ってダーマットの跡を追わせた。そしてドルイド僧の一人を残してがんじがらめの三人の首領につきそわせると、自分たちは犬の後を追い、洞穴まで来た。ダーマットとグラーニアのやわらかい草の寝床があった。そこから東へ行きカラ川とフィンリアのグレイ・モアとローン川を越えて、とうとうヒースの茂る広いスリーブ・ロッハーにたどりついた。

山の中の川岸にグラーニアとモダンとすわっていたダーマットが西のほうを見る

と、異国の兵の絹の旗が遠くから丘に近づいてくるのが見えた。先頭を行軍する緑のマントの三人の戦士は、三匹の猛犬の鎖を握っていた。ダーマットは、犬を見ると、嫌悪と憎悪がこみあげてきた。モダンはグラーニアを抱きあげて、ダーマットとともに上流にむかって一マイル歩き、山の中に入って行った。

緑のマントの戦士は彼らを見ると、三匹の犬のうちの一匹を放った。グラーニアはそのしわがれた吠え声が谷間に聞こえた時、ひどく怯えた。しかしモダンは、自分がこの犬の始末をするから、怖がることはないと言った。後ろをむき、飾り帯の中から小さい子犬を取り出し手のひらにのせた。怒り狂った大きな猟犬が口を大きく開けて来るまで子犬はじっとしていた。子犬はモダンの手から跳び降りると、猛犬の喉からおりて心臓を引き裂いた。犬は倒れて死んだ。それから、子犬はモダンの手に跳んで戻った。モダンはガードルの下に隠した。

そのあと三人は、モダンがグラーニアを抱いて、さらに一マイル上流にむかって山の中を歩いた。しかし二匹めの犬が放たれ、まもなく追いついた。それでダーマットが言った――「この犬にはガージャルグを使ってみよう。ブラフのアンガスからもらったこの槍にはどんな魔法もきかない。それに、聞くところによると、どんな魔法を使っても動物の喉だけは無傷というわけにはいかないそうだ」

モダンとグラーニアが立って見ている間に、ダーマットが槍の絹の紐に指を入れて投げると、槍先が犬の喉に落ちて、犬の内臓があたりに散らばった。ダーマットは前に跳びだして槍を引き抜き、モダンとグラーニアの後を追った。

さらに一マイル歩いた後、三匹めの犬が放たれた。グラーニアは犬が近づいてくるのを見て、震えながら言った――

「これがいちばん獰猛だわ。わたし怖い。気をつけて、ダーマット、この犬に油断しちゃだめよ！」

グラーニアがそう言っている間に、犬はデゥバンズ・ピラーストーンという所で追いついた。後ろを振りかえって犬を見ながら、ダーマットはグラーニアの前に出て彼女を守った。犬は大きく飛び上がりダーマットの頭を超えてグラーニアを捕まえようとした。しかしダーマットは超えていこうとする犬の後足をつかんで振り回し身体を岩に打ちつけて脳味噌をたたき潰した。

それから細長い指をガージャルグの絹の紐に入れると、先頭の緑のマントの騎士に向かって槍を投げ、殺した。今度はガーボーを投げて二人目の戦士を倒した。そしてモラルタを抜き、三人目に跳びかかって、首をはねた。

異国の兵は指導者が殺されるのを見て、総崩れになりあちこち逃げ惑った。ダー

マットは剣と槍で襲いかかり、蹴散らし、殺した。だから、敵は木の上を飛びこえるか、地下に隠れるか、水底にもぐるかでもしなければ、逃れられそうになかった。ブラック・マウンテンのジャルドゥリはこの大混乱を見て恐怖に襲われ、恐ろしさのあまり気が狂ったように戦場から逃げだし、三人の首領が縛られている丘へ走って行った。

さて、フィンは。三人の海の勇士がどうなったか、トン・トマのむこうの丘にかたく縛られていることが彼に知らされた。そこですぐさまアレンを出発して、最短距離をとって丘に到着した。三人の勇士を見て、心から悲しんだ。ダーマットに鉄の枷で縛られるとじわじわと苦しみながら死んでいき、オシーンとオスカーとマック・ルーガとコナン・ムール以外には誰もそれを解くことができないのを、フィンは昔から知っていたのだ。

フィンは紐を解いて首領たちを解放してくれるようにとオシーンに頼んだ。

「それは出来ません」と、オシーンは答えた。「ダーマットは、彼が縛った戦士を解放してはならないと、ぼくにギーサの誓いをさせたのです」

つぎにフィンはオスカーに頼んだ。しかし、この若い戦士は答えた。「ダーマット・オディナを傷つけようとする者をぼくは解放しません。もっと重い枷をかけたいく

らいだ」
マック・ルーガとコナンに頼んだが、彼らも同じように断った。
こんな話をしているうちに、女使者ブラック・マウンテンのジャルドゥリが、息を切らしおぼつかない足取りで、恐怖のあまり目の玉が飛び出して、こちらへ向かって走って来るのが見えた。フィンはどんな報せを持って来たのかときいた。
「たいへんです、王さま、悲しい不幸な報せでございます！」そして彼女は見たことをすべて――ダーマット・オディナが三匹の猛毒犬を殺し、異国の兵を大勢殺したこと――を話した。
「やっとのことで」と彼女は叫んだ。「やっとのこと無傷で、わたしはこの報せを持ってまいりました！」
これを聞いた三人の首領は、桎梏の窮屈さと苦しさのため疲れ果てたのが重なって、即座に死んだ。フィンは大きな三つの墓に彼らを埋葬させた。その上にはオガム文字(2)で名前を刻んだ墓石が置かれ、葬儀がいとなまれた。それからフィンは悲しみと恨みに満ちて、北のかた緑の丘のアレンをさして、部下とともに行進した。

訳注　(1) スリーヴ・ロッハー――ケリー州、キャッスルアイランド近くの山。

（2）オガム文字―古代アイルランド語碑文に用いられた特種なアルファベット。六五〇年ころまで使用された。

【第七章】むっつり巨人のハルヴァンとドーロスの森の妖木

話は変わって、ダーマットとグラーニアのほうは。スリーヴ・ロッハーから東へ旅をし、ハイ・コナル・ガヴラを通って、シャノン川を左にし、いまはリメリックといわれている〝二本柳の森〟に着き、ここで休んだ。ダーマットは野生のシカを殺し、みんなでその肉を食べ、清らかな泉の水を飲み、その夜は寝た。あくる朝、モダンは二人に別れを告げた。ダーマットとグラーニアは彼が去ったのを悲しんだ。モダンはとてもやさしく、彼らに忠実に仕えたからだ。

その日、彼らも〝二本柳の森〟を出た。その後どうしたのか消息がとだえたが、当時ノルウェーのむっつりハルヴァンが守っていたモイのハイ・フィクラ(1)の地方に

あったドーロスの森に着いた。

さてつぎはノルウェーのむっつりハルヴァンの話。ある時、クルックト・ティースのレン湖畔(2)の平原で、デダナーン対フェーナ団のハーリングの試合が行われた。試合は三日三晩つづいたが、どちらも相手側のゴールに一度も入れることが出来なかった。デダナーンはフェーナ団を負かすことが出来ないとみてとると突然、試合を中止し、湖から引き上げ、一団となって北へ向かった。

デダナーン族は、試合中とその後の旅の間、妖精の国から持って来た赤い木の実とリンゴと真っ赤なナナカマドの実を食料にしていた。こういう実にはさまざまなかくれた効能があった。デダナーン族はリンゴや木の実をエリンの土にふれさせないように気をつけていた。しかし、モイのハイ・フィクラのドーロスの森を通っていた時、赤いナナカマドの実がひとつ地に落ちた。デダナーンたちはそれに気付かず、通りすぎた。

この実から、大きなナナカマドの木が生えてきて、妖精の国で育っているナナカマドの木と同じ力を持つようになった。その実は蜜の味がし、それを食べた者はワインか古いはちみつ酒でも飲んだようにすっかり陽気になる。百歳の人間はそれを三つ食べればたちまち三十歳にもどる。

さて、デダナーン族はこの木のことを聞き、それの効力を知ると、自分たち以外の誰にもそれを食べさせたくなかった。それで、自分たちの種族の巨人をやって、その木を監視させた。それがノルウェーのむっつりハルヴァンだった。だから、誰もその木には近付かなかった。それというのも、このハルヴァンは腹黒いカインの一族の巨人で、がっしりした力持ちだったからだ。太い骨、大きな肉厚の鼻、曲がった歯、黒い額の真ん中には大きな赤い火のような目がひとつ。身体に締めている鉄の帯には大きな棍棒を鎖で結びつけていた。おまけに彼は魔法に長けていたので、火には焼けない、水には溺れない、武器には傷つかない。彼を殺す方法はただひとつ、彼自身の棍棒で三回殴ることだった。彼は昼間は木の根元にすわって見張りをし、夜は木の枝の上に自分で作った小屋に寝た。

ダーマットはそこに行けば、フィンの追跡から無事に逃れられると分かっていたから、この土地へやって来た。ハルヴァンはフェーナ団の誰にもハイ・フィクラでは狩りをさせなかったのだ。それに巨人を恐れて、誰もうっそうとしたドーロスの森には近づかなかった。だから、ナナカマドの周囲の土地は何マイルにもわたって荒野だった。

ダーマットはグラーニアを安全な隠れ場所にのこして、大胆にも巨人が木の根元

にすわっているところへ行き、ハイ・フィクラの森で暮らしたい、野生の動物を獲って食料にしたいと言った。これを聞いた巨人は、赤い目で睨みつけて言葉少なにぶっきらぼうに言った。好きな所に住んで狩りをしてよい、ナナカマドの実を採って食べさえしなければ。

ダーマットはドーロスの森の茂みの泉の近くに狩り小屋をたてた。まわりの土地を切り開き、強いつるを編みこんだ頑丈な杭で囲い、狭い入り口をひとつつけて、閂でしっかり閉めた。二人は、ダーマットが毎日ドーロスの森で狩りをして獲ってくる野生の動物の肉を食べ、泉の水を飲んで、しばらくは平和に暮らした。

さて、話かわってクーアルの息子フィンは。アレンへ戻ってまもないある日のこと、親衛隊とともに宮殿の前の修練場にいるところへ、ひときわ背の高い、立派な顔立ちの二人の人物に率いられた五十人の騎馬隊が東の方から近づいて来た。近くまで来ると、丁寧にお辞儀をして、王にあいさつをした。フィンが何者で、どこから来たのかと尋ねると、彼らは答えて――

「われわれはあなたの敵だが、今は和平を望んでいる。われらの名前はアート・マック・モーナの息子アンガスとアンダラ・マック・モーナの息子イードだ。われらの父はノッカの闘いに加わって、あなたの父上クーアルが戦死した時、あなたの父

の敵に味方した。そのためあなたはのちにわれらの父をふたりとも殺した。その息子のわれわれはクーアルの死後生まれたのだから本当は無実なのに追放された。だが、われわれはいま頼みがあって来た。われわれと仲直りをして、われらの父親がフェーナ団のなかで占めていた地位をわれらに与えていただきたい」

「その頼みを聞き入れよう」と、フィンが答えた。「わが父の死の償いをするならば」

「できるものなら喜んで償いをしたいのだが」と彼らは答えた。「だが、われらには金もなければ、銀もない、家畜もない、与えるような富はこれっぽちもない」

するとオシーンが言った。「王よ、彼らに償いを求めてはなりません。父親が死んだだけでもりっぱな償いではありませんか」

しかし、フィンは答えた。「オシーンよ、わしは思うに、もしわしが誰かに殺されたとしたら、償いにかんしておまえを満足させるのはむずかしくはないだろう。だが、ノッカでわしの父を相手に戦った者は、その息子も、わしとは仲直りできない、フェーナ団に入ることもできない、わしの要求する償いをしなければ」

そこでふたりのうちのアンガスが尋ねた。「王よ、どのような償いを要求なさるのですか」

「ふたつあるうちのひとつだけだ」とフィンが答えた。「すなわち、ある戦士の首

か、わしの片手いっぱいのナナカマドの実だ」

「モーナの息子たちよ、君たちに助言しよう、これに従えば、立場が有利になる」とオシーンが見知らぬ二人連れの首領に話しかけた。「その助言とは、この和平を望まず、国へ戻ることだ。いいか、王が君たちに求めている首とはダーマット・オディナの首だ。フェーナ団のなかでももっとも危険な相手だ。たとえ君たちの二十倍の人数がいても、彼は防御できる。君たちが彼の首を取ろうとすれば、彼は君たちふたりの首を取るだろう。それにまた、いいか、フィンが君たちに求める実はドーロスのナナカマドの実だ。どちらが危険か甲乙つけがたい。ナナカマドの実はデダナーン族のものだから、ノルウェーのむっつり巨人のハルヴァンが夜も昼も見張っている」

しかしふたりの首領はオシーンから聞いたことには動かされず、母国に帰るよりは償いを果たして死んだほうがいいと言った。そこで部下をオシーンに預けて、彼らは探索に出ていった。〝一本柳の森〟を通り、そこからモイのドーロスまで行き、ダーマットとグラーニアの足跡をみつけ、その跡をつけて、狩り小屋までやって来た。ダーマットには外の声と足音が聞こえた。武器をさっと取ると、入り口まで行って、誰だとたずねた。

「アンダラ・マック・モーナの息子イードとアート・マック・モーナの息子アンガスだ」と答えが返ってきた。「われわれはレンスターのアレンから、ダーマット・オディナの首か、ドーロスのナナカマドの実か、どちらかをもらいに来た。クーアルの息子フィンが彼の父を殺した罰としてどちらかを持って来いと命令したのだ」

ダーマットはこれを聞き、笑って言った。「たしかに聞いてうれしい知らせではない。ぼくがダーマット・オディナだから。だが、友よ、ぼくは首はやりたくない。君たちにとっても、首を取るのはむずかしかろう。それから木の実のほうだが、これもおなじく手に入れがたい。むっつり巨人のハルヴァンと戦わねばならないからだ。この男、火でも焼けない、水にも溺れない、武器にも傷つかない。だが、クーアルの息子フィンの支配下に入った者こそ災難だ。思うに君らは無益な探索に出かけて来たのだ。万一、君らがフィンの求めるふたつのうちひとつを持って行ったとしても、結局フィンは君らの求める地位など与えはしないだろう。さて、ふたつのうちどちらを先に取りたいかな、ぼくの首か、それともナナカマドの実か？」

彼らは答えた。「まずおまえと戦おう」

そこでダーマットは戸を開けて、闘いの準備をした。彼らは闘いのやり方をつぎのように取り決めた。武器を捨てて、素手で行うこと。もしモーナの息子たちがダ

ーマットに勝てば、その首をフィンに持って行く。しかしもし、逆に彼らがダーマットにうち負かされれば、彼らの首は同様にダーマットのものになる。だが、闘いはじつにあっけなく終わった。このふたりの首領はダーマットの手にかかると子どものようだった。彼はふたりをきつく縛った。

さて、グラーニアはナナカマドの実のことを聞くと、それを食べてみたくてたまらなくなった。危険なことだと分かっていたから、最初はそれをおし殺して、黙っていた。しかしもう隠せなくなって、その実を食べなければ、死にそうだとダーマットに言った。これにはダーマットも困り果てた。彼は巨人のハルヴァンと争いたくなかった。だが、その実を食べなければ、グラーニアは気が変になりそうだったので、頼んで分けてもらうか、力ずくで奪うかして、とにかく実を取ってくるとグラーニアに言った。

モーナの息子たちはこれを聞き、言った。「縄を解いてくれれば、一緒に行って、巨人との闘いに加勢をしよう」

しかし、ダーマットは答えた。「たいした加勢にならないと思う。この巨人をひと目見ただけで、君らは力がぬけるだろう。だが、その逆であっても、君らの助けは求めない。戦うからには、助太刀なしで戦うのだ」

すると彼らが言った。「たとえ、そうであってもわれわれを行かせてくれ。われらの命はいまは君のものだ。死ぬまえにこの願いをききいれて、君がその巨人と戦う様子を見させてくれ」

彼はこれには同意した。

そこで、ダーマットはモーナの二人の息子を従えて、まっすぐナナカマドの木へ行った。巨人は木の根元で眠っていた。彼はひどい一撃をお見舞いして巨人をおこした。すると巨人は頭をあげ、真っ赤な大きな目でにらみつけ、言った――

「これまでわれわれの間では平和が保たれておったのに、争いを望むのか？」

「争いを望むのではない」とダーマットは答えた。「だが、わしの妻の、コーマック・マック・アート王の娘、グラーニア姫がこのナナカマドの実を食べたがっているのだ。もし食べられなければ、彼女は死ぬ。だからぼくは来たのだ。お願いだから姫に実をすこし分けてくれ」

しかし、巨人は答えた。「姫と子どもが死にかけていようが、一個の実でその命が助かろうが、わしはやらんぞ！」

それでダーマットは言った。「ぼくは汚い手は使いたくない。だから、おまえを起こし、穏便にすませようと思って堂々と要求をのべたのだ。だが、いいか、おまえ

がいいと言おうが言うまいが、ナナカマドの実を手に入れるまではこの場を去らぬぞ」

巨人はこれを聞くと立ち上がって、棍棒をつかむとダーマットに三発お見舞いした。英雄はそれをやっとかわしたが、多少の傷はまぬがれなかった。盾は堅固で、腕も強かったのだが。しかし今度はしっかりと見極めて、相手の巨人が剣と槍で攻撃されるものと予想しているのをみてとると、英雄は突然、武器を投げ捨て、相手の不意をついてとびかかっていった。巨人の体に腕をまわして、肩で持ちあげると、どすんと地面に投げた。それから、棍棒をつかみ、三回打った。最後の一撃で脳味噌が飛び出した。

ダーマットは疲れ、息を切らして、地面に腰をおろして休んだ。すると闘いを最初から最後まで見ていたモーナの息子たちは、巨人が殺されたのを見て、喜んでかけよった。ダーマットは彼らに、死体を森のなかに引きずって行き、グラーニアが見て、怖がるといけないから、見えないところに埋めるように言った。彼らがそれをすませると、姫を呼びに行かせた。彼女が来ると、ダーマットは言った。「ほら、ナナカマドの実だよ、グラーニア。取ってお食べ」

しかし彼女は答えた。「わたしは、夫の手で摘んだ実しか食べません」

それでダーマットは立ち上がって、実を摘んだ。グラーニアは心ゆくまで食べた。それからモーナの息子たちにも摘んでやって、言った。

「さあ、友よ、好きなだけ取って、フィンに償いを支払うがよい。もしそうしたければ、ノルウェーのむっつりハルヴァンを殺したのは君たちだと彼に言ってもいいぞ」

彼らは答えた。「フィンが要求した片手いっぱい分だけ持って行こう。それ以上は持ってはいかない。それだけでも惜しいくらいだ」

そう言って彼らはダーマットに篤くお礼をのべた。自分たちではとても手にいれることができなかった実をもらったのだから。彼らの命は彼のものだったが、彼はそのことはおくびにも出さず、自由に帰してやった。彼らはダーマットとグラーニアに別れを告げたあと、去って行った。

そのあと、ダーマットは狩り小屋を出て、グラーニアとともに、木の枝のなかのハルヴァンの小屋に住んだ。木のいちばん上の実がいちばんおいしいことが分かった。それに比べると、下の枝のは苦味があった。

モーナの息子たちがアレンに着くと、フィンは、どうだったか、代償を持って帰ったかとたずねた。彼らが答えるには――

「ノルウェーのむっつり巨人ハルヴァンは殺されました。あなたの父上クーアルの死の代償として、ここにドーロスのナナカマドの木の実を持ってまいりました。あなたとは和睦をするので、フェーナ団のしかるべき地位につけていただきたい」

フィンは実をとって、それが本物であることを確かめた。三度匂いをかいでから言った。「たしかにこれはドーロスのナナカマドの木の実だ。だが、これはダーマット・オディナの手を経ている。むっつり巨人のハルヴァンを殺したのはダーマットだ。おまえたちではない。この実をわしに持ってきてもおまえたちにはなんの得にもならない。おまえたちが求めている和睦も、フェーナ団の地位もわしは与えない、おまえたちがわしの父の死にたいして公正な代償を支払うまでは。おまえたちは自分の力でこの実を取ってきたのではない。そのうえ、おまえたちはわしの敵と和睦を結んだ。わしがドーロスの森へ行って、ダーマットがナナカマドの木の近くに住んでいるかどうか見てこよう」

この後、彼はフェーナの七個師団の選り抜きの男たちを集めて、ハイ・フィクラのドーロスまで行進した。ダーマットの跡を追ってナナカマドの木の根元まで行くと、誰もその木を見張っていなかった。それで好きなだけ食べた。

さて、彼らがその木のところへ来たのは正午だった。太陽が暑かったので、フィ

ンが言った。「夕方になって暑さが収まるまでこの木の下で休もう。ダーマットが木の枝のなかにいるのはよく分かっている」

するとオシーンが言った。「ダーマット・オディナが木のうえであなたを待っていると考えるとは、あなたの心は嫉妬のためによほど眩んでいるらしい。あなたが彼の首を求めていることは彼にはよく分かっているのだから」

フィンはこれには答えず、チェス盤と駒を持ってこさせた。彼とオシーンはゲームを始めた。オスカーとマック・ルーガとドバー・オバスキンの息子ジャリングがオシーンの近くにすわってアドバイスした。フィンは彼ら全部を相手に戦った。彼らはしばらくのあいだ用心深くたくみに試合をして、ついにオシーンが一手動かすのみとなった。するとフィンが言った。「あと一手でおまえが勝つぞ、オシーン。だが、おまえの助けっ人にその手を教えてもらってもいいぞ」それで、オシーンは困った。

ダーマットは木の枝にすわって最初からゲームを見ていた。彼は独り言を言った。「かわいそうにオシーン、窮地におちいっているな。近くでアドバイスしてやれないのが残念だ」　グラーニアは近くにすわっていたので、彼の言葉が聞こえた。彼女は言った。「オシーンが勝とうが負けようがどうでもいいわ。それよりはフェーナ団

の七個師団が取り囲んであなたを殺そうと待ち構えているほうが恐ろしいことだわ」
するとダーマットはグラーニアの言葉にはかまわず、木の実を一つ摘むと、オシーンの駒にねらい定めて投げた。動かすべき駒だった。それでオシーンはその駒を動かしてフィンに勝った。
ふたたびゲームがはじまり、同じ局面になって、あとひと手動かせばオシーンが勝つばかりになった。だが、その動かしかたがむずかしかった。またもやダーマットが木の実を投げて、正しい駒にあてた。オシーンはそれを動かしてゲームに勝った。
みたびゲームは続行し、ダーマットは前と同じように駒にあてた。オシーンはみたびゲームに勝った。そこで、フェーナ団が大きな歓声をあげた。
「オシーン、おまえがゲームに勝ったのは不思議でもなんでもない」とフィンは言った。「オスカーの最高の助けとジャリングの熱意、マック・ルーガの技、それに加えて、ダーマット・オディナというプロンプターがいたのだからな」
「あなたの心が猛烈な嫉妬のために曇らされている証拠です」とオスカーは言った。
「ダーマット・オディナがあの木の中にいてあなたに殺されるのを待っていると思うのは」

「ダーマット、真実を言っているのはどっちだ」フィンは上を見て言った。「オスカーか、それともわしか？」

「フィン、あなたの判断がまちがったことはありません」とダーマットが木の中から答えた。「たしかにぼくは、ここにグラーニア姫と一緒にいます、ノルウェーのむっつり巨人ハルヴァンの小屋の中に」

フィンとほかの者が見上げると、枝の隙間からふたりがはっきりと見えた。

しかし、グラーニアは危険を察知して、ひどく恐怖にかられ震えて泣きだした。そこでダーマットは、かわいそうに思い、彼女を慰め三回キスをした。

これを見て、フィンが言った。「エリンじゅうの者の目の前でおまえがグラーニアを奪いタラから連れ去ったあの夜は、わしはこれよりもずっと悲しい思いをしたのだ。だが、このキスだけでも、おまえにはその首で償いをさせてやるぞ！」

ここで、フィンはダーマットを殺したい一心で立ち上がると、家来たちに木をとり囲んで隙間ができないように手を組めと命令した。そして死ぬほど苦しくともダーマットを逃がしてはならぬと警告した。それをすませると、木に登って行ってダーマットの首をとって来た者、あるいはダーマットを下りさせた者には甲冑と武器一式、それにフェーナ団における名誉ある地位を与えると言った。

スリーヴ・クアのガルヴァァがまっさきに言った。「見よ、われこそ適任だ！　わが父を殺したのはダーマットの父、ドンだ。今こそその復讐をしよう」

そして彼は木に登った。

さて、ダーマットが絶体絶命の窮地におちいっていることが、ブラフのアンガスに分かった。そこで彼はダーマットを助けるためにフェーナ団に知られないように木のところへやって来た。ダーマットとグラーニアは老人を見て大いに喜んだ。

ガルヴァァが枝から枝へ登って小屋に近づいた時、ダーマットは足で一撃したので、ガルヴァァは地面のフェーナ団の間に墜落した。すると、フィンの家来がその場で首をはねた。というのも、アンガスが彼にダーマットの姿をさせていたのだ。だが、殺されたあとで、もとの姿に戻ったので、みんなは死んだのがスリーヴ・クアのガルヴァァだと知った。

そこでスリーヴ・クロットのガルヴァァが言った。「わが父を殺したのはダーマットの父ドンだ。今こそダーマットに復讐しよう」

そう言って彼は木に登った。だがアンガスが一撃を加えたので、彼はダーマットの姿をして地面にふっ飛んだ。家来たちが彼にかかって殺した。すると、フィンが言った、彼らが殺したのはダーマットではなくてスリーヴ・クロットのガルヴァァだ

と。

つぎに、スリーヴ・ゴラのガルヴァが出て、自分の父がダーマットの父に殺されたと言った。そしてダーマットの首を取って復讐しようと、木に登りはじめた。しかし、ダーマットはほかのふたり同様、彼も投げ飛ばした。アンガスはしばし彼にダーマットの姿をさせた。それで家来たちは彼を殺した。

そういう次第でとうとう九人のガルヴァが倒れた。つまり、スリーヴ・クアのガルヴァ、スリーヴ・クロットのガルヴァ、スリーヴ・ゴラのガルヴァ、スリーヴ・ムーカのガルヴァ、スリーヴ・モアのガルヴァ、スリーヴ・ルーガのガルヴァ、アハーフリーのガルヴァ、スリーヴ・ミヒのガルヴァ、ドロム-モールのガルヴァ、だ。これを見て、フィンの心は悲しみと苦しみでいっぱいになった。

そこで、アンガスが、この危険な場所からグラーニアを連れて行こうと言った。ダーマットは喜んで言った。「彼女を連れて行ってください。ぼくは夕方まで生きていればあとから行きます。だが、フィンに殺されれば彼女をタラの父上のところへ連れて行って、大事にしてくれるように頼んでください」

それから、ダーマットは愛する妻にキスをした。アンガスは自分のマントを彼女に着せかけると、フェーナ団に知られないように木からはなれて、まっすぐボイン

のブラフへ行った。

アンガスとグラーニアが行ってしまうと、ダーマットは木の中からフィンに話しかけた。「ぼくはもう木から下りる。ぼくは自分が殺される前にあなたの家来をたくさん殺すだろう。あなたがぼくを殺そうと企んでいることは分かっている。今殺されようと先に殺されようと恐れはしない。たとえ無傷でこの場を逃れたとしても、しょせん逃げ道はないのだ。エリンにはあなたの怒りを避ける場所はない。この広い世界の遠い国にぼくをかくまってくれる友もいない。これまでぼくはなんども彼らを一人残らず打ち負かし殺してきたからだ、それもあなたのために。フェーナが窮地におちいったり、危機に瀕したりすれば、ぼくはかならずフェーナとあなたのために命を賭けた。その上、戦いに出れば、ぼくはいつも先頭に立った。戦場から引き上げる時はいつもしんがりだった。もうぼくは命をながらえたいとは思わない。だが、ぼくの死にたいしては、かならずあなたに高い代償をしはらわせてやる。あなたの家来を壊滅させて復讐をしてやる」

「ダーマットの言うことは本当だ」とオスカーが言った。「彼をあわれんで許してやってください。彼はもう十分に苦しんだのです」

「わしが生きてるかぎり、あいつに和平も許しも与えない」とフィンが言った。「あ

いつがわしに与えた損害に対して、わしが要求している代償を支払うまではな。つまりそれはあいつの首だ」

「そんなことを言うとは恥さらしもこの上ない。れっきとした嫉妬のしるしだ」とオスカーが答えた。「ぼくはこれからダーマットの身体と生命をぼくの騎士道と勇気の保護のもとにおく。真の勇士として誓う、たとえ天空がぼくの上に落ちてこようとも、地が裂けてぼくを呑み込もうとも、誰にもダーマット・オディナを傷つけるようなことはさせないぞ！」

それから上を見て言った。「下りてきたまえ、ダーマット。君をここから無事に出してやろう。ぼくが生きているかぎり、誰にもきみを傷つけさせることはしない！」

そこでダーマットは、男たちが幹近くに立っている側を選ぶと、姿を見られないように密生した枝を歩いて行き、槍の柄に体重をかけると、軽くふわりと下に飛び降りて、まるく手をつないで立っている男たちの輪の外側に立ったので、一瞬のうちに剣も槍も届かなくなった。オスカーは彼の側につき、脅すように後ろを向いたので、フィンの家来はだれも追わなかった。

そして、ふたりの英雄はともに行き、シャノン川を渡った。ボインのブラフに着くまではなにがあったか語られていないが、ブラフでアンガスとグラーニアに会っ

た。グラーニアはダーマットが傷ひとつ負っていないのを見て、われを忘れるほど喜んだ。ふたりの勇士はアンガスの歓迎を受けた。ダーマットは彼とグラーニアに一部始終を語った。グラーニアはダーマットが死ぬほどの危険を切り抜けたことを聞いて、失神しそうになった。

訳注（1）ハイ・フィクラースライゴー州にあった。
（2）クルックト・ティースのレン湖ーキラニー湖のこと。

【第八章】魔女の攻撃

さて、フィンのこと。ダーマットとオスカーが出ていってから、彼の心は怒りと苦しみでいっぱいだった。彼はダーマットに復讐するまでは、休まないと誓った。ドーロスの森をあとにすると、東へむかって行進し、アレンに着いた。さっそく彼

は腹心の臣下に、いちばんいい船の準備をして、航海に必要な食料と飲みものを積み込むように命令した。そして船に乗りこみ、航海に出た。彼の乳母が住んでいる約束の国に着くまでは途中どうだったかなにも分かっていない。

彼があらわれると、乳母は喜んで迎えた。彼が食べ、飲んだあとで、乳母は航海の理由をたずねた。なにか重大なことで来たのが分かっていたからだ。そこで彼はダーマット・オディナが彼にたいしてなにをしたか残らず話した。そしてどうしたらいいか彼女に助言を求めに来たのだと言った。「というのも」と彼は言った。「人間の知恵と力ではどうしてもあいつを死においやることができないのだ。彼に勝つのは魔法しかない」

そこで、老婆はあした一緒に行って、彼に魔法をかけてやろうと言った。これを聞いてフィンは大喜びし、その晩は休んだ。あくる日、フィンと部下と乳母は出かけた。ボインのブラフに着くまではどのようにして行ったのか語られていない。エリンの人々は彼らがそこへ来たのを知らなかった。魔女はドルイドの魔法で霧をかけたので、誰にも彼らの姿は見えなかったのだ。

たまたまダーマットはその日森でひとり狩りをしていた。オスカーは前の日にブラフを出ていた。このことが魔女に分かると彼女は魔法で、青白い平らな睡蓮の葉

を、真ん中に穴の開いた大きな挽き臼に変え、それに乗って空中に飛んで行った。そして、森の上に舞い上がり、英雄の真上に来るまで、見通しのきく、冷たい風の上で漂っていた。それから、平らな挽き臼の上に立ち上がると、穴から猛毒の矢をダーマットめがけて投げはじめた。ダーマットはこれまでとは比較にならない苦痛を受けた。魔女が毒の呪文を吹きかけたので、矢は盾や鎧さえ突き抜けて体にささったのだ。

ついに、魔女を殺さなければ、死をまぬがれないとみてとると、彼はガージャルグをつかみ、体をそらして、その槍を挽き臼めがけて投げた。槍は穴を通って、魔女に突きささった。魔女はダーマットの足元に落ちて死んだ。それから彼は魔女の首をはね、ブラフのアンガスに持って行った。彼とグラーニアにいまたいへんな危険を脱出したことを話した。

【第九章】
終（つい）の平和と休息

あくる朝アンガスは起きると、フィンのところへ行って、ダーマットと和睦しないかとたずねた。フィンは、英雄にたいしてなにをやっても負けてばかりで、そのうえ乳母や大勢の部下を失ったので、自分は争いに疲れた、ダーマットがどんな条件を出しても和睦したいとアンガスに言った。

アンガスはつぎにタラの、コンの孫コーマック王のところへ行った。彼に同じようにダーマットに和睦と許しを与えるかたずねた。するとコーマックは喜んでそうする、と言った。

それから彼はダーマットのところへ来て言った。「おまえには平和のほうがいい。フィンとコーマックと和睦しないか？」

するとダーマットは答えた。「喜んで和睦しましょう。勇士とグラーニア姫の夫に

ふさわしい条件が許されるならば」

アンガスがその条件とはなにかときくと、ダーマットは答えた。「ぼくの父が持っていた領地です。つまり、エリンの王へ借地料も貢税も納めなくてよいオディナの領地です。[1] それとベン-ダミスの領地、[2] つまりレンスターのドゥカーンです。このふたつをフィンがぼくに与えて、そこではフィンもフェーナ団も狩りをしないこと、ぼくの許可なしには。それからエリンの王は、娘の持参金として、ケッヒ-コランの領地を与えること。この条件なら、ぼくは和睦する」

アンガスはこの条件を持って、フィンのところへ、そのあとで王のところへ行った。ふたりはその条件を認めて、ダーマットがおたずね者だったあいだ彼らにとった行為をすべて許した。それで彼らは和睦した。そしてコーマックはべつの娘をフィンに妻として与えた。

ダーマットとグラーニアはフィンとコーマックから遠くはなれたケッヒ-コランの領地へ行って住んだ。ふたりは館を作った。ラース-グラーニアだ。そこでなん年も平和に暮らした。グラーニアはダーマットとの間に息子四人、娘一人を産んだ。彼の財産は年々増えていき、人々は、金も銀も宝石も、羊も牛も彼ほど持っている金持ちはいないと言った。

訳注　（1）オディナの領地―ケリー州にあった。
（2）ベン―ダミスの領地―ウィックロー州にあった。

【第十章】ダーマットの死

さて、なん年もたって、ある日グラーニアはダーマットに言った。「わたしたちは家も財産も大きくなって、人もこんなにふえたのですから、このように世間から離れたところに住むのはふさわしくありません。とくにつかわしくないのは、エリンでいちばん有名な二人、わたしの父王とクーアルの息子フィンが、この館に一度も来ていないことです」

たしかに、彼女は、ダーマットとともにタラを去って以来、父に会っていなかったので父が恋しかった。

「なぜそんなことを言うのだ、グラーニア？」とダーマットは言った。「今われわれ

は和睦を結んでいるけれども、それでもあの二人はぼくの敵なのだ。だから、彼らとは離れて暮らしているのだ」

するとグラーニアが言った。「お二人の敵意は、時がたったからきっとやわらいでいますわ。だからお二人にご馳走をしてほしいの。そうすれば、友情と愛情を取り戻せるわ」不幸にもダーマットは同意した。

まる一年間彼らは大宴会の準備をした。準備ができると、王とその家臣、フィンとフェーナ団の七個師団長を招待するために使者が遣わされた。そこで彼らは随身に家来に馬に犬を引きつれてやって来て、ラースーグラーニアに一年間滞在し、狩りをしてご馳走を食べた。

一年たったある晩、みんながとうに休んだころ、ふとダーマットの耳に夜の静寂のなかから遠くで犬の吠える声が聞こえた。彼ははっと眠りから覚めた。グラーニアもおびえて飛びあがった。そして彼にしがみついて、なにを見たのかたずねた。

「犬の声が聞こえた」とダーマットは答えた。「しかも真夜中に聞こえるのはどうも不思議だ」

「すべてのものがあなたを災難から守ってくれますように！」とグラーニアは言った。

「これはきっとデグダナーンがブラフのアンガスに分からないようにあなたに罠をかけているのです。さあ、また寝てください」

ダーマットは寝たが、眠れなかった。また犬の声が聞こえた。彼は起き上がって、こんどはなにごとか見に行こうとしたが、グラーニアがまたもや彼をつかまえて、引き止めた、夜中に犬の声がしたからといって、それを見に行くのは彼らしくないと言って。

こんどはダーマットは心地よい眠りにおそわれ、だいぶ眠った。しかし、みたび犬の吠え声がして、目が覚め、飛び起きた。もう昼だから、犬を探しに行って、なぜ夜中に外にいたか調べて来るとグラーニアに言った。

グラーニアは同意したが、なぜか不安だったので、言った。「マナナーン・マック・リールの剣モラルタとアンガスの槍ガージャルグを持って行ってください。危ない目にあうかも知れません」

だが、ダーマットはかるく考え、運命的に悪い選択をして、答えた。「こんなささいなことが危ないということはないだろう。ベガルタとガーボーを持って行こう。犬のマック-アン-ホルにも鎖をつけて行こう」

そしてダーマットは行った。急いでベン-グルバン(1)の頂に行ってみると、そこにフ

インがいた。ダーマットはあいさつもせず、そこで狩りをしているのは誰だとたずねた。
「夜中にわしの部下が犬を連れて、ラース-グラーニアから出て来たのだ」とフィンが答えた。「そしたら犬が野生の猪の足跡を見付けたので、部下と犬が追って来たのだ。わしは止めようとしたが、家来どもが夢中になって、わしをおいて行ってしまった。これはベン-グルバンの野生の猪の足跡だから、その跡を付ける者は空しい危険な追跡をすることになるのだ。あの猪はこれまでになんども追跡された。そしていつも逃げおおせた、多くの人と犬を殺して。今も遠くでフェーナたちが、その前でほんろうされているのがおまえに見えるだろう。けさも数人殺した。あいつはわれわれが立っているこの小丘にむかってきている。早く道を避けたほうがいい」
しかし、ダーマットは野生の猪が怖くて、小丘を去るようなまねはしないと言った。
「おまえがここにいつまでもいるのはよくない」とフィンが言った。「おまえは猪を狩ってはいけないという誓いに縛られているのではないか？」
ダーマットは答えた。「そんな誓いのことは知りません。なぜぼくはそんな誓いに縛られるのですか？」

するとフィンが言った。「わしがそのことを話してやろう。よく覚えているから。おまえがアンガスの里子としてボインのブラフに連れていかれたとき、おまえの話し相手、遊び相手としてアンガスの執事の息子が一緒に養育された。執事は平民で、おまえの父のドンはフェーナ団の貴族だったから、執事は息子をおまえと一緒に育ててもらう代償に毎日九人分の食料と飲みものを届けることに同意した。したがって、おまえの父は好きな時に八人のお供と一緒にアンガスの家に行って、執事が届けた食物を要求することを許された。彼が来ない時はアンガスの家の者に与えられた。

「たまたまある日のこと、わしはフェーナの七個師団の団長たちとアレンの広い山腹にいた。すると、ブラン・ベグ・オブカンがわしがすっかり忘れていたことを思い出させたのだ。それは、わしがアレンで続けて九晩以上眠ることを禁じられていて、つぎの晩が十晩めになるということだった。

「この禁則が課せられていたのはわしだけだったから、おまえの父と数人の者をのぞいてみんな広間に入って行った。それでわしは今夜はどこでもてなしてもらおうかとたずねた。するとおまえの父のドンは、ボインのブラフでもてなそうと言った。あそこならいつアンガスを訪ねても、自分と仲間の食料と飲みものがある。ドンは

さらに言った、一年間息子に会っていないから歓迎されるだろう、と。
「そこでドンとわしと一緒にいた数人の者は、猟犬をつれてアンガスの家へ行った。アンガスは歓迎した。そこに二人の子どもがいた。おまえと執事の息子だ。しばらくして分かったのだが、アンガスはおまえ、ダーマットをとても愛していたが、家の者たちは執事の息子を可愛がっていた。彼らが彼には好意を示して、おまえには示さないので、おまえの父は嫉妬にかられた。
「日がくれてから、たまたまわしらの猟犬が、投げてやった肉切れをめぐってけんかをして、中庭で争った。女や子どもたちはあちこち逃げまどった。執事の息子がたまたまおまえの父の股のあいだを走った。すると、彼はおまえよりもその子がみんなに愛されているのを思い出して、とつぜん膝でぎゅーと締めつけその場で殺してしまった。そして誰にも見えないように、猟犬の足元に投げやった。
「ついに猟犬が引き離されたとき、その子が死んでいるのが見つかった。執事は長い嘆きの叫び声をあげた。それからわしのほうへ来て言った。
「『今夜アンガスの家にいるすべての人間のなかで、この騒ぎのためにいちばん悪い目にあったのはわたしだ。この子はわたしのひとりっ子です。フィン王、この子の死にたいして、あなたに償いを求めます。あなたの猟犬が殺したのですから』

「わしは言った、息子の体を調べてみて、犬の歯か爪の跡形があったら、償いをしよう、と。そこで、こどもを調べたが、嚙まれたり、ひっかかれた形跡はなかった。「そうすると、執事は息子を殺した犯人を捜しだせという恐ろしいドルイドのギーサの誓いをわしに課した。そこでわしはチェス盤と水を持ってこさせ、手を洗って知恵の歯の下に親指をいれた。すると子どもはおまえの父に殺されたことがわしには分かったのだ。これを知らせたくなかったので、わしは子どもの償いをすることにした。だが、執事はそれを拒んで、息子を殺した犯人を知りたいと言った。それでわしはしかたなく本当の事を言った。すると彼が言った。

「『ドンはこの館にいる誰よりも償いを楽に払える人だ。わしの要求する償いは、彼の息子をわしの股の下に入れることだ。息子が無事に逃げだせば、わしはこの問題をそれ以上追及しない』

「アンガスはこれを聞いて激怒した。わしが間にはいって助けなければ、おまえの父は執事の首をはねていただろう。

「執事はそれ以上言わず脇に下がると、ドルイドの魔法の杖を取出し、それで息子を打ち、耳も尻尾もない、剛毛の大きな野生の猪に変えた。そして杖を高々とかかげて、猪に呪文を唱えた。

『この魔法の杖で、
魔法使いの命令で、
定めるものなり、
ダーマットとおまえに、
おなじ熾烈な闘いと
おなじ年月の命を。
力を誇示する彼を
おまえはついに倒すべし。
見よ、ダーマット・オディナは
　流血のなかに横たわる。
見よ、わが復讐者を、
　猪の牙を！
かく定めるものなり、
ドンの残虐なる行いには、
確かなる復讐あるべし——

息子は血にまみれる運命。
　わが手のこの杖によって、
　魔法使いの命令によって！』

「彼が呪文を終えた瞬間、猪は開いているドアからとびだして行った。どこへ行ったのか分からなかった。
「アンガスは執事のことばを聞いたとき、おまえに予言された運命を避けるために、野生の猪を狩ってはいけないと命じた。
「その猪が猛り狂って今われわれのほうへ突進してきているのだ。さあ、だから、ただちにこの丘から立ち去って、猪を避けよう！」
「ぼくはそんな呪文や禁止事項のことは知りません」とダーマットは答えた。「あるいはあなたの言うようにぼくが子どものころ禁止されていたにせよ、ぼくはすっかり忘れています。ベン-グルバンのでも、どこのでも、野猪が怖くてこの小丘をおいて去ることはしません。でも、あなたが行くまえに、あなたの猟犬のブランをおいって、ぼくの犬のマック-アン-ホルを助けさせ、元気づけさせてください」
「おいてはいかない」とフィンが答えた。「ブランはこれまでなんどもこの猪を追い

かけて、いつもきわどいところで命びろいしている。わしはもう行く。見ろ、向こうの尾根から猪が来ている」
　そしてフィンは去り、ダーマットはひとり丘にとりのこされた。フィンが行くとダーマットは言った。「ほんとうは恐ろしいのだ、おまえがぼくを死においやろうとして追跡をはじめたのが。だがここで事のなりゆきを待とう。もしぼくがここで死ぬ運命なら、ぼくのために用意された運命を避けることはできないのだ」
　ただちに猪は丘の斜面をかけ登ってきた。はるか後方からフェーナ団があとを追ってきた。ダーマットは猪めがけてマック-アン-ホルを放った。だが、効果はなかった。猟犬は猪を一目見ると、しりごみしてその前から逃げた。するとダーマットはわれとわが身に言った。「妻の忠告に従わなかった者に災いあれ！　今朝グラーニアはモラルタとガ-ジャルグを持っていけと言ったではないか。それなのにぼくは彼女の忠告を軽視して、べガルタとガ-ボーを持ってきた」
　それから、白い細い指をガ-ボーの紐に入れると、注意深くねらいさだめて、猪の眉間に投げた。だが、無駄だった。槍は傷もつけず地に落ちた。猪はかすり傷ひとつ負わず、剛毛一本、乱れなかった。
　これを見たダーマットは、ほんとうは恐れを知らぬ男なのだが、すこし勇気がく

じけた。そこでベガルタの鞘を払うと、腕の力をふりしぼって、猪の首を打った。しかしこんどもうまくいかなかった。刀は粉々に飛び散り、柄が手に残っただけだったが、猪は剛毛一本も傷つかなかった。

いまや無防備の彼にむかって、猪が突進してきた。怒り狂ってまっしぐらに襲いかかり、彼を地面に押し倒した。そして向きなおると牙で英雄の脇腹を切り裂き、ものすごい深手を負わせた。ふたたび向きを変えて、新たな攻撃をしようとしたとき、ダーマットが猪めがけて刀の柄を投げると、頭蓋骨を突き抜け、脳まで刺さり、猪は即死した。

フィンとフェーナ団があがってくると、ダーマットが瀕死の苦しみのなかで、蒼白になって血を流していた。フィンが言った。「ダーマットよ、おまえがこんなに苦しんでいるのを見て、わしはうれしい。ただ残念なのは、エリンの女たちがおまえの姿を見ることができないことだ。女たちがこよなく愛した比類なく美しいおまえがおまえから去って行き、おまえは血の気を失い、醜く歪んでいる！」

するとダーマットが答えた。「ああ、フィン、なんと悲しいことを！　その言葉はきっと口先だけで、本心ではないだろう。もしあなたにその意志があれば、いままでもまだぼくを治す力があなたにはあるのだ」

「わしがどうしておまえを治せるのか？」とフィンがたずねた。

「あなたにはむずかしいことではありません」とダーマットは答えた。「ボインで予見の才能を授かったとき、あなたはこの才能も授かりました――つまりあなたの閉じた両手から水を飲ませてくれれば、たとえ死にかけていても、病気も怪我も治るのです」

「なぜわしが両手から水を飲ませて、おまえを治してやらなければならんのか？」とフィンが答えた。「あらゆる人間のなかでおまえがいちばんわしからそんな恩恵を受けるに値いしない」

「あなたは言い急いでいて、昔のことを思い出そうとしない」とダーマットは答えた。

「いや、本当は、ぼくはあなたに治してもらえるだけの価値があるのですよ。あなたは、フェーナ団の団長や貴族たちと一緒にドナラの息子ジャルカの家へ宴会に行った日のことを忘れたのですか？　ぼくたちが席につくとまだ宴がはじまらないうちに、コーマックの息子、〝リフィーのカーブリ〟が、タラとブレギアとミースとカームナの部下とともに、あなたとあなたの部下を殺そうと宮殿を包囲した。彼らは三度大きな叫び声をあげて、宮殿を焼き討ちしようとわれわれの頭上にたいまつを

投げた。するとあなたは立ち上がって、飛び出そうとした。だがぼくがおしとどめて宴会を楽しむようにと言った。ぼくはご馳走を味わいもせずその場をはなれ、より抜きの手下数人と飛び出して、火を消した。ぼくたちは宮殿のまわりを三回まわって、あなたの敵を殺した。一まわりするたびに五十人の敵が死んだ。カーブリとその部下は逃走したので、ぼくらは宴会に戻った。あの晩あなたに飲ませてくれと言ったら、あなたは喜んで飲ませただろう。いまだってあの時とおなじくらいぼくはそれにふさわしいのだ」

「おまえはわしの治癒の水に値しないし、ほかのどんな好意もおまえにはもったいない」とフィンが言った。「われわれがタラにやって来たあの晩グラーニアを守るのがおまえの役目だった。それをおまえは彼女とひそかに結婚して、タラから逃げて行った。彼女がわしの婚約者だと知ってのうえだ」

「そのことでぼくを責めないでください」とダーマットは言った。「グラーニアはぼくに重いギーサの誓いをさせたのです。それは世界じゅうの富をもらっても破れません――そうです、たとえ命とひきかえでも。それにあれはぼくの判断でやったわけではありません。あなたもよくご存じのように、オシーンとオスカーとジャリングとマック・ルーガが勧めるままにぼくは行動したのです。

「さあ、フィンよ、お願いします、あなたの手から飲ませてください。ぼくには死が迫り、弱ってきました。ぼくがあなたの手の水に値することは否定できないでしょう、コルガの息子ミダックがナナカマドの木の妖精の宮殿であなたのために催した宴会を思いだしさえすれば。この宴会にミダックはあなたとあなたの仲間を招待しました。その間にあなたとフェーナ団全員を殺そうともくろんで、世界王の大軍と、トレント島の三人の王をひそかに島の宮殿に導き入れました。

「ところで、ミダックはトレント島の土に、あなたの手と足が地面にくっつくようにと邪悪な呪文をかけて、ナナカマドの宮殿にいるあなたの下におかせました。世界王が大軍を送って手足をうばわれたあなたを殺し、あなたの首を島の宮殿へ持って行こうとしていることが分かりました。

「しかしそのときぼくがナナカマドの宮殿の外に来たのです。あなたは絶体絶命の窮地におちいっていることをぼくに知らせました。それからぼくは、フィン、あなたとあなたといっしょにいた仲間たちをぼくの騎士道と勇気で保護したのです。そしてぼくは浅瀬に行って異国の兵を相手に防御しました。

「しばらくすると、龍のような、トレント島の三人の王が宮殿へむかって来ました。しかしぼくは浅瀬を守り、あなたのために命を賭けて攻撃に堪え三人の王をすべて

殺しました。首をはね、血まみれの生首をぼくの盾にいれて、あなたがみじめに手足の自由を奪われている宮殿へ持ってきました。そして血のしみた土をふりかけて呪文を破り、あなたを自由にしました。ああ、フィンよ、あの晩飲ませてくれと頼んだら、きっとあなたは断りはしなかったでしょう。

「ほかにも絶体絶命の窮地におちいったときなん度もぼくはあなたを自由にしました。フェーナ団に入った日から、危険な場所にはまっさきにかけて行き、あなたの安全を守るためには自分の命を危険にさらしてきました。それなのに今なぜこんなきたない裏切りで報いるのですか？

「さらに、あなたは多くの王の息子と勇敢な兵士を殺してきました。あなたは強力な敵の恨みをかいました。それはどれもまだ決着がついていません。いつかは来るだろう――ぼくには今にも来そうな気がするのだが――恐ろしい打倒と殺しあいの日が。ああ！　悲しいことだ！　そのときはフェーナのことを語る者はほとんどいなくなるでしょう。そのとき、フィンよ、あなたはぼくの助けを激しく求め、今日のこの日をしきりに後悔するでしょう。ぼくが悲しむのは、じつは、あなたのためではない、ぼくの誠実な、真心の友――オスカーとマック・ルーガとジャリング、そして誰にもまして、誰よりも長生きして悲しい老齢を迎えるオシーンのためだ。

ああ！　彼らが絶体絶命の窮地におちいっても、ぼくは近くで助けてやれない！」
そのときオスカーが、悲しみに胸をつまらせ、涙さえ浮かべて、フィンに話しかけた。「王よ、ぼくはダーマットよりはあなたに近い血筋だが、あなたの手から飲ませてやれば彼が治るというのに、みすみす死なせるのには耐えられない。さあ、すぐに彼に水を持ってきてください」
すると、フィンが答えた。「この山では水を汲める井戸を知らない」
「それは嘘だ」とダーマットが言った。「ここから九歩とはなれていないむこうの藪の下に水晶のようにきれいな水の井戸があるのをあなたは知っている」
それでフィンは井戸へ行って、両手をしっかり閉じると水を汲んでダーマットのほうへ来た。しかし少し歩いてから、そんな遠くまで手で水を持っては行けないと言って、指の間からこぼした。
「それはちがう、フィン」とダーマットは言った。「ぼくには見えた、あなたは自分の意志でこぼしたのだ。さあ、王よ、急いでください、ぼくには死が迫っている」
ふたたび彼は井戸へ行って、水をゆっくりゆっくり運んで来た。ダーマットは水のしたたる手を目で追った。だが、フィンはグラーニアのことを思い出すと、またもや水をこぼした。ダーマットはこれを見て、あわれな苦痛の溜息をついた。

こんどはオスカーがもう悲しみと怒りをおさえきれなくなった。「おお、王よ、ぼくは誓う」と彼は言った。「あなたが水を汲んで来ないのなら、二人のうち――あなたかぼくか――一人はこの丘から生きて帰れないのだ！」

オスカーの言葉を聞き、ほかの者の渋面を見て、フィンは三たび水を汲んで、急いで来た。だが半分も来ないうちにダーマットの首はうしろにがくっと落ちて、命が絶えた。

そしてその場にいたフェーナ団の者は全員ダーマット・オディィナのために三度大きく悲しみの声をあげた。

それからオスカーが、険しい顔でフィンを見て、言った。「ダーマットのかわりにあなたがここに死んでいればいいのに！　まさにいまやフェーナでいちばん高貴な心が静かに眠ってしまった。闘いと危急の際の大黒柱がいなくなってしまった。ああ！　ぼくにはなぜ見透せなかったのだろう？　ダーマットの命がベン-グルバンの野生の猪とつながれていたことをなぜ知らされていなかったのだろう？　もし知っていたら、この追跡を思いとどまって、最悪の日を延ばしていたものを！」

そしてオスカーは泣いた。オシーンもジャリングもマック・ルーガも泣いた。ダーマットは誰からもきわめて愛されていたのだ。

しばらくして、フィンが言った。「もうこの丘を去ろう、ブラフのアンガスが追いかけてこないうちに。われわれがダーマットに手をかけたわけではないが、彼は信じないかも知れない」

そこでフィンとフェーナ団は丘を離れた。フィンがダーマットの犬マック‐アン‐ホルを引いて行った。しかしオシーンとオスカーとジャリングとマック・ルーガはあと戻りして、涙ながらにダーマットに自分たちのマントをかけてやったあとで、ほかの者に従った。

グラーニアはその日、ラース‐グラーニアの高い胸壁の上にすわってダーマットの帰りを待っていた。この狩りのために彼女の心は暗い恐怖におおわれていた。そしてとうとうフェーナ団が見えて来たとき、ダーマットの犬がフィンに引かれているのを見た。だが、ダーマット自身が見えないので、彼女は言った。「ああ！　どういうことなのかしら？　もしダーマットが生きていたら、フィンがマック‐アン‐ホルを引いて帰ってくるはずはないわ！」

そう言いながら、彼女は胸壁から身をのりだして落ち、魂が抜けるように、気絶した。小間使いは立ったまま取り乱して泣いた。やっと彼女が目を開いたときにダーマットが死んだことを聞かされた。彼女は長い悲しみの声をあげて泣いた。それ

で女たちや宮廷じゅうの者たちがまわりに来て、悲しみの原因をたずねた。ダーマットがベン-グルバンの野生の猪に殺されたと聞くと彼らは大きなつらい悲しみの声を三回あげた。それはあたりの峡谷や荒野にひびき、天の雲をつき抜けた。

グラーニアはやっと落ち着くと、五百人の家来にベン-グルバンへ行って、ダーマットの遺体を運んで来るように命じた。それからまだマック-アン-ホルを引いているフィンにむかって、ダーマットの猟犬を放してくれと頼んだ。しかし、フィンはそれを拒否して、猟犬はたいしたものではないから、ダーマットの財産のすくなくともこれぐらいはもらってもいいのだと言った。オシーンはこれを聞くと前へ出て来て、フィンの手から猟犬をとりあげ、グラーニアにわたした。

家来たちがラース-グラーニアを出てダーマットの死体を取りに行ったとき、アンガスには英雄が死んでベン-グルバンに横たわっていることが分かった。ただちに彼は出発し、澄んだ冷たい風に乗って旅をし、まもなく山に着いた。だからグラーニアの家来が登って来たときは、彼が死体の上に立ち、うしろに家来を従えて悲しんでいた。家来たちは平和の印に盾の裏側を前にして持っていた。

それから両隊は死んだ英雄を見て、悲しみの声を大きく三回あげた。その声はたいそう大きくつき抜けて荒涼とした天空までも、そしてエリンの五つの地方全体に

も聞こえた。
その声がやむと、アンガスが口を開いて言った。「ああ、悲しいことだ！　息子よ、なぜ、たった一度とはいえ、わしはおまえから目を離したのだろう？　幼子のおまえをブラフに連れて来た日から昨夜まで、わしはおまえを見守り敵から守ってきた。ああ！　なぜわしは、おまえが陰険なフィンの姦計にかかっておまえの運命に誘き寄せられるがままにしておいたのだろう？　わしの怠慢のせいでおまえはこのような目にあったのだ、ああ、ダーマットよ。これからはいつまでもつらい悲しみに胸痛むのだ！」
それからアンガスはグラーニアの家来になにをしに来たのかとたずねた。ダーマットの死体をラースーグラーニアに運ぶためにグラーニアがよこしたのだと言うと、彼は言った。
「ダーマットの死体はわしがボインのブラフへ運んでいく。棺台にのせて、わしの魔法で生きているように保存する。なるほど、あれを生き返らせることはできない、だが、わしが魂を吹き込んでやって、毎日すこしの間わしと話をさせよう」
それから彼は死体を黄金の棺台の上にのせ、両側に槍を一本ずつ先を上向けておかせた。それから家来が棺台をもちあげ、彼の前に運んで来た。このようにしてボ

インのブラフまでゆっくり行進していった。

グラーニアの家来は戻った。グラーニアに一部始終を話すと、彼女は最初悲しんだが、アンガスがダーマットを愛していることが分かって、最後には同意した。

訳注（1）ベン-グルバン―スライゴーの北五マイル（約八キロ）にあるベンブルベン山のこと。

訳者あとがき

ケルト民話のなかで、だれがいちばん美人だろうか。〝ケルトのヴィーナス〟はディアドラかグラーニアか。軍配はディアドラに上がるかもしれない。なにしろ彼女は生まれる前からその美貌が国に災いをもたらすと、予言されたのだから。

いちばんの英雄はだれだろう。ともに〝アイルランドのヘラクレス〟といわれるクーフーリンかフィンか、いい勝負だ。本来ならちがう時代の神話・伝説群に属するふたりなのに、民話ではなんとおなじ土俵で対決してみせるのだ。

＊　＊　＊

◆本編に収めた七つの物語のうち、**英雄のおもかげ、かたりべ達の競演、悲しみの始まり・悲しみの終わり**に含まれる民話は、ジョーゼフ・ジェイコブズ(Joseph Jacobs, 1854-1916)の『ケルト妖精物語』(*Celtic Fairy Tales*, 1891)と『続ケルト物語』(*More Celtic Fairy Tales*, 1894)から訳出した。「フィン対クーフーリンの勝負」と「コナル・イエロウクロウがした怖い話」の原題は、それぞれ「ノックマニィの伝説」と「コナル・イエロウクロウ」。

ジェイコブズはオーストラリア生まれの民俗学者・歴史学者で『イギリス妖精物語』『イ

ンド妖精物語』も編纂している。さし絵には原本から、ジョン・D・バトンの画を使用した。

ダーマットとグラーニアの運命はP・W・ジョイス（Patrick Weston Joyce,1827–1914）の『ケルトのロマンス』（*Old Celtic Romances*, 1879）所収の「ダーマットとグラーニアの追跡」の翻訳である。

ジョイスはアイルランド、リメリック州生まれで、アイルランドの音楽教育者であるが、古代ケルト文化研究者としても名高い。

アイルランドでケルト民話の収集がはじめられたのは十九世紀の初めであったが、これがさかんに行われるようになるのは半ばを過ぎてからである。神話や王侯・英雄の伝説はすでに文字に記されていた。それには多くのキリスト教の筆写僧があたったのでキリスト教の影響は免れていない。一方、一般の貧しい農民たちの口から口へ語り伝えられてきた民話はケルトの特色を残存しているものが多い。これを早期に記録にとどめなければ、貴重で豊かな宝が永遠に埋もれてしまうのではないかという危機感と焦りが、アイルランド内外の民話収集家には見られる。民話の発掘や普及に尽力したW・B・イエイツとレイディ・グレゴリーは、アイルランド文芸復興運動の中心的存在になっていく。

文芸復興運動の高まりはアイルランド独立運動と結びついた。神話・伝説のなかの英雄たちは人びとに勇気と希望を与え、精神的な推進力となった。ダブリンの中央郵便局の広間にあるクーフーリン像はアイルランド独立の象徴である。クーフーリンはアルスター伝

説随一の英雄。
一九世紀後半から急進的で過激な活動を繰り返し独立運動の中心だったIRB（アイルランド共和同盟）はフィニアンと呼ばれた。その命名の由来はフィンを首領とするフィアナ（フェーナ）騎士団にある。アイルランド共和国の大統領になったデ・ヴァレラが結成した党の名もフィアナ・フェイル。デ・ヴァレラは「アイルランドの神話の中の予言者、勇士、族長を合わせたようなタイプ」と評され、まさにフィンの再来ではないかと思われる。
クーフーリンは西暦紀元二年に死んだとされている。彼は女神ダナーの一族、トゥアハ・デ・ダナーン族の光の神ルーグの息子という。ルーグはアイルランドの神話で最高の神ダグダよりも重要視されている。ところが、この神は紀元前一八三〇年に没したことになっている。ダナーン族はミレシア族に滅ぼされたあと、永生・不可視のシィ（妖精）となったが、彼らはまた再生もくり返し、三世紀のフィアナ伝説群にも登場する。偉大な魔術師アンガスはダグダの息子という。
フィンはフィアナ伝説群のなかで、アイルランド大王コーマック・マック・アートの親衛隊フェーナ騎士団の首領の地位にある。その力と名声は大王自身と並ぶ勢いをもつ。フィンがもとは神ルーグの別名だったかもしれないと言われるほど、両者の類似がさまざま指摘されている。彼の息子が詩人オシーン（オシアン）、孫が英雄オスカーである。

◆英雄のおもかげ

「フィン、巨人国へ行く」には弱冠十八歳のフィンが登場する。

ここで少しフィンの生い立ちにふれておく。フィンの父はフェーナ団の首領であり、母は神族と妖精の血をひく女性だった。父はモーナの息子たちに殺され、母は再婚した。フィンは二人のドルイドの女に育てられた。やや長じてからは、かつての父の家来で盗賊となった男に武芸を習った。それから、旅から旅への生活をつづける吟遊詩人の一団に加わったりした。フィンは「知恵の鮭」を食べて全知予見の才能を授かった。彼は地下の魔界からやってきた魔王の孫を退治することによって、父と同じフェーナ団の首領の座に就く。

アイルランドではすでに十六世紀から神話のパロディがみられるという。さすがにフィンは巨人国にあっても巨人以上の働きを遂げるが、英雄のなかの英雄を愛玩用の小人にしてしまうこの民話のやり方は、『ガリヴァ旅行記』第一部リリパット国での巨人ガリヴァを、第二部では一転して巨人のなかの小人に卑小化してしまうスウィフトの手法に受け継がれている。

さらに徹底した英雄たちのパロディを見せてくれるのが「フィン対クーフーリンの対決」だ。国民的英雄であり聖域にもおかれるべきクーフーリンとフィンの二人を、二世紀の隔たりを超えて一場に登場させたうえ、思いきりからかってみせる。フィンは名声にこだわる臆病者であり、クーフーリンは力だけは噂どおりだが、頭のほうはからきしだめだ。絶対的な存在を永遠にその位置にとどめおかず、それをひっくり返して相対化してしまう傾

向はケルト民話特有のものだろう。

◆かたりべたちの競演

「ケインの足をヒルに吸わせて」は、つぎつぎと話が付け加えられていくという奇妙な構造になっている。もともと別のものだった二十以上もの話が、ケルトのかたりべの絶妙な技によって入念につなぎ合わされている。同じ文句のリフレインによって聴く者の注意を喚起し、興味をつなぎとめていく話術には驚嘆するばかりだ。

奇想に富み、『千夜一夜物語』に匹敵する、と十九世紀イギリスの小説家サッカレーが絶讃した「コナル・イエロウクロウがした怖い話」は物語の大枠のなかに三つの話が入っている入れ子型の構造だ。この手法はインドのかたりべが得意としたものだが、アラビアやギリシャそしてヨーロッパじゅうで用いられ、ケルト民話でも頻繁に使われている。『西部高地地方の民話』（一八六〇）を編纂したJ・F・キャンベルは、盲目のかたりべからこの物語を聞いている。巨人が盲目になって山羊に語りかける場面で、かたりべはこの物語の大枠にさらに、彼自身の心技で飾り枠をほどこした、とキャンベルは述べている。「コナル・イエロウクロウ」と類似した話はほかにも多数あるが、なかにはコナルが盗賊になっているものもある。この時代のスカンジナビア半島とイギリス、アイルランドの往来は頻繁に行われていたらしく、ノルウェーの王がエリン王の領臣をよく知っている。

第一話の獰猛な猫軍団は魔女の群れらしい。第二、第三話には『オデュッセイア』のポ

リュペモスのような一つ目の巨人が現れる。洞穴に住み、富をため込み、人を食い、女をかどわかす凶暴な巨人はヨーロッパのほとんどの国の民話に登場する。一つ目の巨人は「ダーマットとグラーニアの運命」でも活躍する。

◆悲しみの始まり・悲しみの終わり

ディアドラは、じつに多くのアイルランドの文学者に取り上げられ、名前がそのまま劇やロマンスの題名になっている。

ディアドラの話はケルトの口承伝説かたりべたちの記憶力がいかに確かで強いものかを示す好例である。十二世紀に編纂された『レンスターの書』いらい十九世紀まで五つ以上の版が保存されており、民間の伝承ではアイルランドだけで八十話以上が採集されているという。P・W・ジョイスも「ウシュナの息子たちの運命」でディアドラを取り上げている。

ここですこしジェイコブズの「ディアドラ」とジョイスの「ウシュナ」の異同をみてみたい。

◇出生と生い立ち……「ディアドラ」にたいして「ウシュナ」は長さが二倍以上ある。物語の骨子はほぼ同じだが細部がくわしい。ディアドラはコノール（コナハー）王の筆頭かたりべの娘になっていて、かたりべの館で王の近衛兵である赤枝騎士団のために宴を催している最中に生まれる。その美貌のためにエリン全土におびただしい災いがふりかかるというので、〈ディアドラ〉（古代アイルランド語で「災い、悲しみをもたらすもの」の意）

と呼ばれるようになる。コノール王は彼女が成人したら妻にすることにして、宮殿のちかくの砦に住まわせる。
◇恋人のイメージ……ディアドラが心にいだく恋人のイメージは「ディアドラ」の場合は、狩人からあたえられる。「ウシュナ」の場合は、ある雪の日、ディアドラが窓のそとを見ると、殺された牛の赤い血が雪の上に点々と落ちている。鳥が一羽おりてきてその血をすすりはじめる。ディアドラが「あの三つの色をそなえた男性を夫にしたいわ。鳥のように黒い髪、血のように赤い頰、雪のように白い肌。だって、昨夜、夢でその方に会ったのよ」と一緒に住んでいる女詩人に言うと、女詩人はその男性はすぐちかくにいるコノール王配下の騎士、ウシュナの息子ニーシャだと告げる。赤、黒、白の色のコントラストがあざやかで、鳥や血のイメージは不吉な予感をいだかせる。
◇女性から男性への求愛……夢でみた若者に恋いこがれるディアドラに同情した女詩人はだれにも知られないようにウシュナと会わせ、その結果、ふたりはたがいに愛し合うようになる。結果的には相思相愛だが、さいしょのはたらきかけは女性のほうが積極的である。「ディアドラ」ではウシュナの三兄弟は彼女を無視して通りすぎて行ったのに彼女が追いかけている。
◇三という数……ケルトでは三という数が多くもちいられる。ニーシャたちは三兄弟であるし、白鳥の姿に変えられたリールの子たちも男の子は三人である。（本文庫『ケルト妖精民話集』に「リールの子たちの運命」所収）「ディアドラ」ではファーハーの息子も三人だ

が、「ウシュナ」では二人になっている。三人は結束するが、二人の場合は、金髪の兄は忠実で、自分の身を犠牲にしてウシュナの兄弟を守るのに、赤毛の弟はコノール王の甘言にたぶらかされ、ウシュナ兄弟を裏切る。ここでも赤毛はろくでなしだ。ケルト文様では、人間組紐文様の三つ巴の構図が特徴で、三人の人物の結束を表している。ケルトの伝説や民話の人物たちは喜びの声も悲しみの叫びも三度ずつあげる。重要な意味をもつ動作は三度くり返される。三は完成された安定感を与えるのだろう。
◇ディアドラの夢と予言……「ウシュナ」ではディアドラの夢のなかに理想の恋人のイメージがあらわれるのをはじめとして、彼女の夢がたびたび語られる。その夢が現実となって、夢が確実な予言となる。ファーガスが来るまえの晩は、口に甘い蜜を含んだ三羽の鳥がやって来て、三滴の蜜のかわりに三滴の血をもち去っていく夢を見ている。蜜はコノール王の甘言で、心の奥には悪だくみがかくされている。三滴の血は三兄弟の血である。ファーガスの息子たちのうち忠実な金髪の兄に首がなく、裏切る赤毛の弟がかすり傷ひとつ負っていない夢も見ている。
◇死後結ばれる恋……はなればなれに埋葬された恋人たちの墓から木が生えてきて、上空で結ばれあうという部分は、ジェイコブズがイングランドのバラードから取り入れたもので、これはトリスタンとイズーの話にもみられる。『レンスターの書』ではディアドラはニーシャの死後一年生きていて、コナハー王を嫌悪しつづけ、嘆きの歌ばかり歌っていた。ニーシャに直接手をくだして殺したのはイーガン王で、そのためディアドラは彼を憎み嫌

っていた。このイーガンとコナハーのふたりの王にはさまれてすわらされた馬車のなかからディアドラは大きな岩にむかって突進し、自らの命を絶つ。
◇韻文の挿入……「ディアドラ」のなかのディアドラが夢をつげる部分、アルパへの別れの歌、それに埋葬されるニーシャへの呼びかけは韻文で書かれている。ジェイコブズはディアドラの嘆きの歌を『レンスターの書』からとったと言っている。「ウシュナ」にもディアドラがアルバへ別れを惜しむ歌とニーシャへの挽歌が挿入されている。
　ジョイスは細部にケルトの特色の濃厚な事件や状況をちりばめ、ケルトの雰囲気を盛り上げている。ジェイコブズは異色のイングランドのものもとりいれなから、よりケルト的な効果をあげている。

「ダヴェッド公パウエル」は、ウェールズの神話『マビノギオン』に基づいている。プラデリ（悲しみの終わり）とともに象徴的な意味をもつ名の人物が登場する。パウエルはアンニーヴァンの首領として有名になったが、アンニーヴァン（アンヌン）は伝説上、冥界のことを表す名だったので、パウエルは初め神と思われた。彼の名前は「知恵」を意味する。テイルニオンは神性を暗示し、リヒアンノンは馬の女神、エポナと同じだと考えられたようだ。

◆ダーマットとグラーニアの運命

これはディアドラ物語のフィアナ版である。グラーニアはフィンがかけた謎を解いたといわれる、知恵と美貌に恵まれた王女だ。ジョイスは純粋でひたむきなグラーニア像をつくりあげているが、他方では浮気女、悪女として語られているものもある。グラーニアという名は「醜悪」あるいは「嫌悪の情をもよおさせるもの」の意味を持ち、宿命の相手と結婚することによって並ぶもののない美人に変身した魔女として知られていたらしい。

ダーマットはフィンの妹の子で、数々の危難からフィンを救い出した。フィンにとっては命の恩人だ。彼も理想の美男騎士として描かれているが、ほかのいくつかの民話では、「女蕩しの名人」と呼ばれている。彼の額には〝魅惑のほくろ〟があり、このほくろを見た女はだれでも彼のとりこになってしまうのだった。ダーマットの前生は異界の神の国の英雄で、ダナーン族の偉大な王マナナーン・マック・リールとダグダの息子ブラフのアンガスから愛され、教えを受けた。彼は二本の槍――大はガ-ジャルグ(赤槍)、小はガ-ボー(黄槍)――を所有していた。彼はまた二本の剣――モラルタ(大怒)とベガルタ(小怒)――も持っていた。これらはマナナーンとアンガスからもらったものだ。

美男子で武芸に秀で誰からも愛される理想の騎士像をジョイスは描きあげている。『ケルトのロマンス』はこの物語にとどまらず全編ダーマット讃歌と言っていい。

妻を奪われ嫉妬に狂うフィンの復讐がこの物語を貫く主題だが、フィンという人物はこの事件でのみこれほど復讐の鬼と化してしまうのか、それともそもそも生来嫉み深い性質

なのだろうか。幼いころに父を殺され母と引き離され、つぎつぎと他人のなかで暮らした体験が原因で、その人格形成に影を落とす結果になったのだろうか。ここでのフィンは他人を全面的に信じることがない。自分自身が頼りという人間だ。それに子や孫からまで見離されている。

フィンという名の由来についてはさまざまの説がある。「美しき者」「金髪」「知恵」など。フィンは妖精の女にだまされて魔法の湖に入り全身老人と化してしまった。魔法の酒によって他の部分は元どおりになったものの、頭髪だけは老人のままだったので、「銀髪」だともいう。

幼年時代から老境に達するまで、フィンほど頻繁にケルトの民話や伝説に登場する人物はほかにいないのではないだろうか。生い立ちにまつわる奇しき運命、長所も短所も、強さも弱さも、高貴さも卑劣さも合わせもつ複雑な屈折した性格、栄光も悲惨も味わい尽くしながらも我欲に執着する英雄にして小人物。フィンこそは人間の多様性を体現し、人間にたいする尽きない興味を湧き起こさせるのだ。

＊　　＊　　＊

『ケルト妖精民話集』につづいてこの『ケルト幻想民話集』を刊行できたのは、編集部の高崎千鶴子氏のご助言とご尽力による。深く感謝する次第である。

一九九三年七月　　　　　小辻　梅子

訳編者略歴

小辻梅子

1938年　長崎県に生まれる。
1961年　九州大学文学部英文科卒業。
1974年　ロンドン大学、1977年、オックスフォード
　　　　大学サマー・スクールにて研修。
《現　在》　長崎総合科学大学教授
《著訳書》　『イギリス文学の伝統と現代』、スパーク
　　　　　『ポートベロー通り』『ケルト妖精民話集』
《現住所》　長崎市かき道2-29-9

現代教養文庫　1435　ケルト幻想民話集

1993年8月30日　初版第1刷発行

訳編者　小　辻　梅　子

発行者　宮　川　安　生

発行所　株式会社　社　会　思　想　社

東京都文京区本郷3の25の13
電　話（03）3813-8101（代表）
振込東京 6-71821　〒113

ISBN4-390-11435-2　凸版印刷・田中製本

●山室静の本

〈現代教養文庫〉

小さい人魚姫 アンデルセンの童話と詩 I

アンデルセンの童話には、人生の悲喜をたっぷりと味わった大人をも感動させるものがある。本巻には、彼が生涯に書いた童話の中から、初期の童話13篇と、9篇の詩をえらんで収録した。

みにくいあひるの子 アンデルセンの童話と詩 2

アンデルセンの三十代末から四十代の初期、作家としては最も充実した時期の、粒よりの童話11篇と8篇の詩を収録する。表題作のほか、マッチ売りの少女、モミの木、雪の女王、赤い靴、影ぼうしなど。

氷姫 アンデルセンの童話と詩 3

アンデルセンの童話活動の晩期、五十歳頃から晩年にかけての作品14篇に8篇の詩を添えて収めた。表題作のほか、ばかのハンス、雪だるま、二本のろうそく、プシケ、銀貨、大きい海蛇など。

アンデルセンの生涯

社会の最下層から出て奇異な運命に弄ばれながらよくそれに堪えて世界的作家に成長したアンデルセンの生涯と、その心に迫る名著。世界の大人にも子どもにも親しまれた〈童話の王様〉の翳のある実像。

●北欧の神秘と幻想――〈現代教養文庫〉

ケルト妖精民話集
J・ジェイコブズ編　小辻梅子訳編

いたずらものの妖精が人間の世界と行き来して、魔法を使ったり変身したり、人の運命をあやつるというケルトの幻想世界が展開。アイルランドとスコットランドに伝えられた民話のなかから十六篇収録。

ケルト幻想民話集
小辻梅子訳編

貧しい農民たちの口から口へ語り伝えられた民話はケルト人の奔放な想像力により時空を超えて広がる。一、二を争う美女ディアドラとグラーニアの運命は？　英雄クーフーリンとフィンの活躍を御覧じろ。

フィン・マックールの冒険　アイルランド英雄伝説
B・エヴスリン　喜多元子訳

ケルト系のアイルランド人により、口承によって伝えられた英雄伝説のひとつ。少年フィンが、父の仇を討ちとり、晴れて戦士の集団フィアナの長となるまでの冒険を生き生きと描いた好読物。

サガとエッダの世界　アイスランドの歴史と文化
山室　静

なぜアイスランドだけに、ほかのヨーロッパ諸国に類例を見ないほど、サガやエッダの伝承が残ったのか。北欧文学の開拓者であり権威でもある著者が、極北の島の命運を語り、ゲルマン文化の原像に迫る。

●フランスの民話と民俗 ──〈教養文庫〉

フランス幻想民話集

植田祐次訳編 心臓を食われた恋人／コケットな娘と悪魔／妖怪狼になった領主／死なねばならぬ／真夜中の葬列／死者のミサ／水晶の城など、恐ろしくも美しい物語34篇収録。

フランス妖精民話集

植田祐次訳編 小指の童女／真珠の涙／手のない少女／王女マリ／狼のミサ／双子と二人の妖精／魔法の指輪など、人間の愛や嫉妬の心理を巧みに暗示する、妖精が織りなす物語25篇。

フランス笑話集

奥平 堯訳編 フランスの民話の中から、愚行や失敗、頓智や機転、悪知恵や悪だくみなどに材をとった笑い話28篇収録。読む人を素朴でおおらかな笑いの世界へと誘う。

フランス小話集

奥平 堯訳編 やぶ医者と病人／二人の食いしんぼう／利口な司祭／二人の農夫／白い手など、気のきいた洒落や上品なお色気、巷の人物や出来事など下世話の話63の掌篇。

フランス民話バスク奇聞集

堀田郷弘訳編 ピレネーの山なみに守られた神秘の民バスク人は、いまだに特異な文化を保持している。本書は、日本で初めてのフランス＝バスク民話集。43篇収録。

フランス民話ブルターニュ幻想集

植田祐次・山内淳訳編 いまでもケルト的な地方文化を保持しているブルターニュに伝わる幻想的な民話・伝説17編を収録。

フランスことわざ歳時記

植田祐次・奥平堯・堀田郷弘共著 民俗的なフランスを季節の日々を追って考察する。各日の守護聖人、国定の祝祭日もあわせて紹介する。

●映画の本

現代教養文庫

映画366日館　石子順

映画の名画座　259本だてイラスト・ロードショウ　橋本勝

愛しのマレーネ・ディートリッヒ　高橋暎一

エンドマークはつけないで　映画監督の夫と共に　家城久子

ハリウッド・スキャンダル　ちょっと気になる話　E・ルケィア　田村研平訳編

殺陣チャンバラ映画史　永田哲朗

日本ドキュメンタリー映画全史　野田真吉

●映画の本

現代教養文庫

映画イヤーブック1991　江藤 努編

映画イヤーブック1992　江藤 努編

映画イヤーブック1993　江藤 努編

増補黒澤明の映画　D・リチー　三木宮彦訳

小津安二郎の美学　映画のなかの日本　D・リチー　山本喜久男訳

時代劇博物館　島野功緒

日本シネマ紀行　朝日新聞社会部

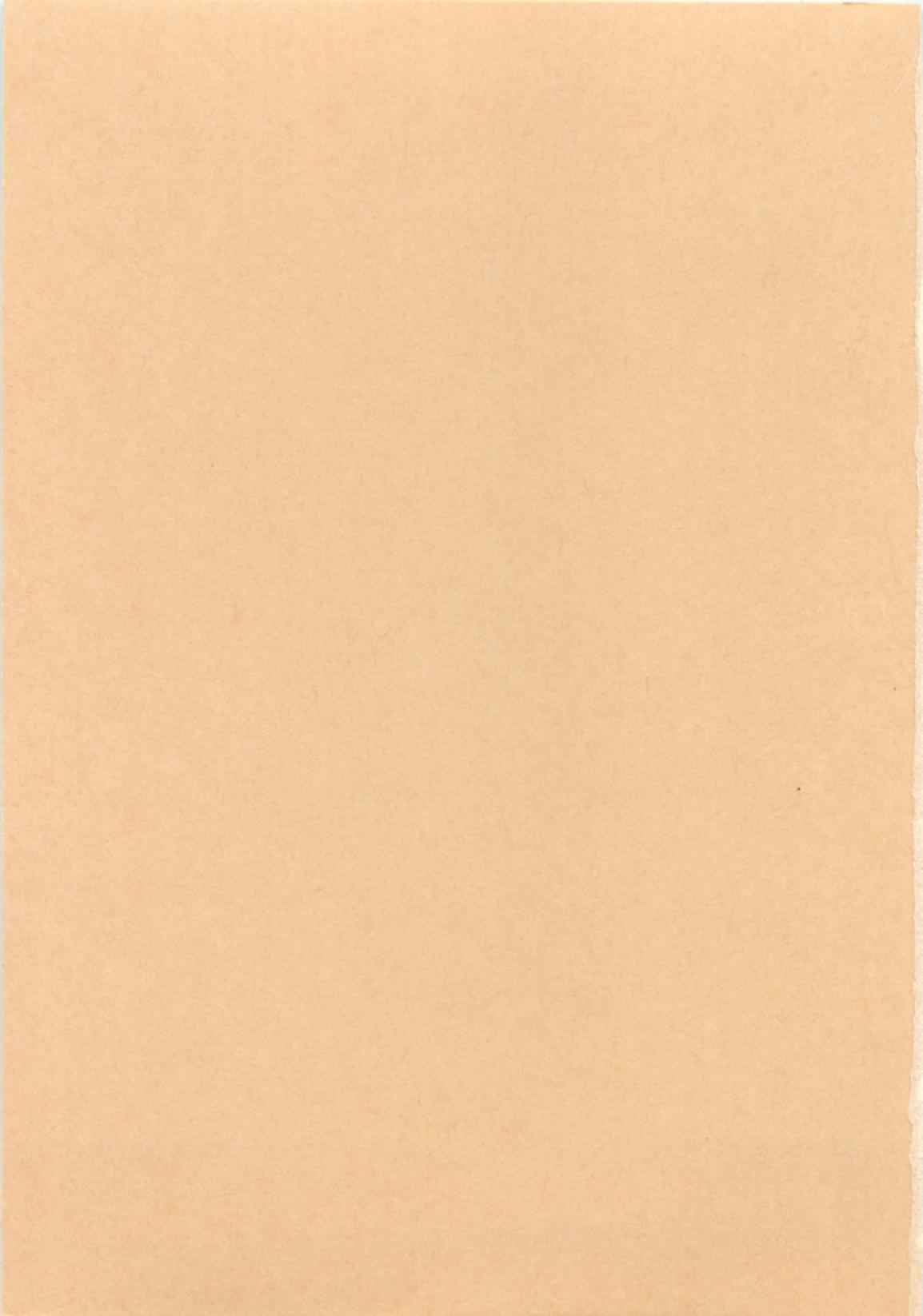
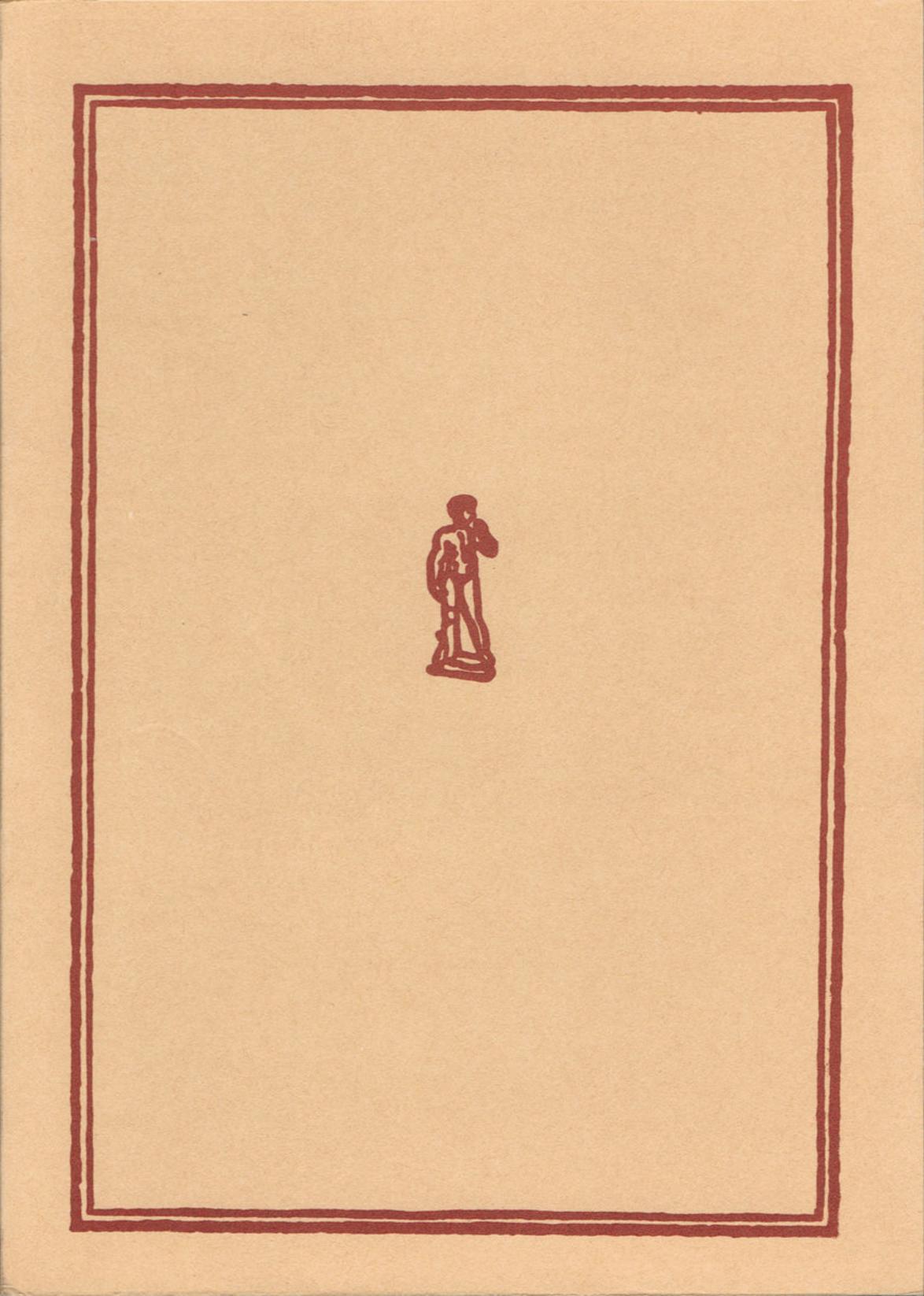
ケルト幻想民話集

小辻梅子訳編

教養文庫

1435

D
718

¥520
(505)

9784390114356

1910139005205

ISBN4-390-11435-2

C0139 P520E

社会思想社

現代教養文庫

定価520円（本体505円）

現代教養文庫

フランス妖精民話集　植田祐次訳編

フランス幻想民話集　植田祐次訳編

フランス怪奇民話集　植田祐次・山内淳訳編

フランス民話バスク奇聞集　堀田郷弘訳編

フランス民話ブルターニュ幻想集　植田祐次・山内淳訳編

ケルト妖精民話集　J・ジェイコブズ編　小辻梅子訳編